榎木畑遺跡

—安中市特別養護老人ホーム建設事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1990

群馬県安中市教育委員会
群馬県安中市福祉事務所

榎木畑遺跡

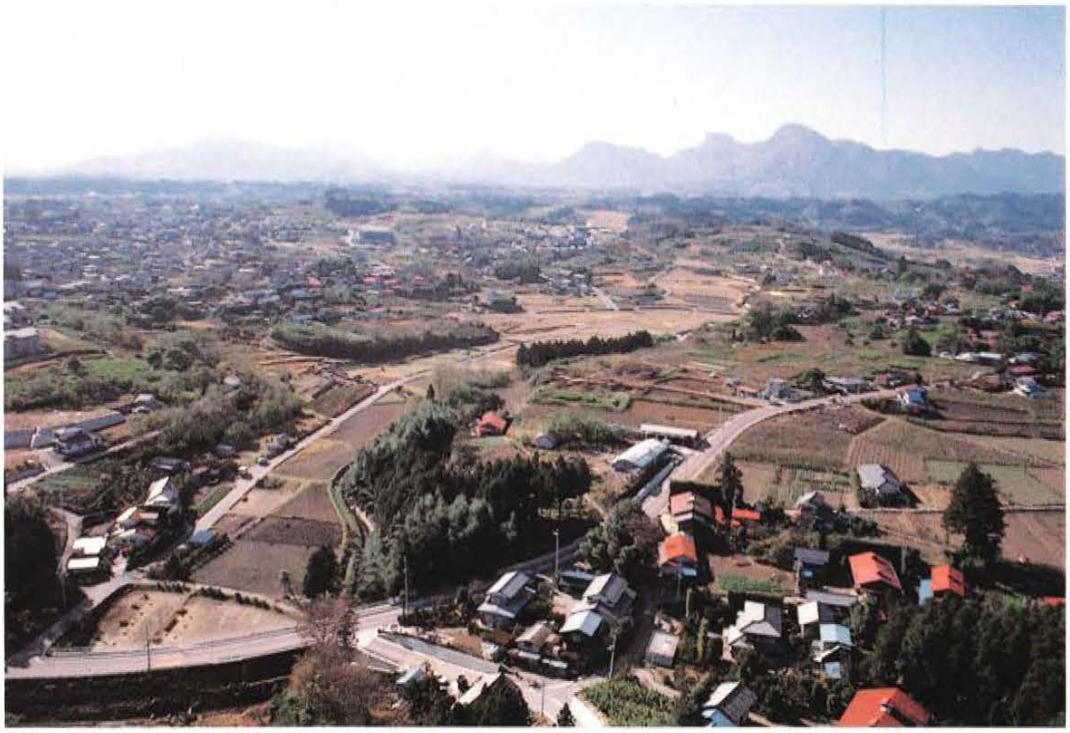
—安中市特別養護老人ホーム建設事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1990

群馬県安中市教育委員会
群馬県安中市福祉事務所

榎木畑遺跡　　正誤表

頁	行	誤	正
口　絵		榎木畑遺跡全景	榎木畑遺跡遠景
例　言	8行	通り	とおり
図版目次	1行	榎木畑遺跡全景	榎木畑遺跡遠景
図版目次	20行	石族	石鏃
P．52	7行	円形貼付門文	円形貼付文
P．55	21行	孤状	弧状
P．56	2行	孤状	弧状
P．56	12行	連孤状	連弧状
P．56	19行	孤状	弧状
P．56	23行	連孤状	連弧状
P．56	34行	孤状	弧状
P．57	14行	連孤状	連弧状
P．66	12行	北壁中央分	北壁中央部
P．82	1行	連孤状	連弧状
P．83	6行	精致	精緻



榎木畑遺跡全景

十三菩提式土器

五領ヶ台式土器

序

安中市は群馬県西毛地域のほぼ中心に位置します。市の中央には、西から東へ碓氷川が流れ、川に沿って緑豊かな田園風景が広がっています。また古くは東山道が通り、江戸時代には中山道、そして現在は国道18号線と交通の要として栄えてまいりました。

榎木畑遺跡の発掘調査は、安中市嶺地区に特別養護老人ホームを建設する事業に伴うものです。

今回の調査では、縄文時代の前期（約５千年前）から平安時代（約１千年前）までの人々が生活した住居の跡等が発見されました。嶺地区では今回のこの調査が初めての発掘調査であり、これにより、旧石器時代の昔から嶺地区では人々が生活をしていたことがわかりました。縄文時代では県内でも珍しい縄文時代の前期から中期に移行する時期の住居址が発見され、平安時代では、住居の壁が崩れないように壁の保護を施した跡等が発見されました。このような遺跡の様子を後世の人々に伝えてゆくために発掘調査により記録保存の措置を講じております。

こうした埋蔵文化財は、かけがえのない郷土の遺産であります。市民の皆様にも郷土の歴史を学習していただけるよう、社会教育、学校教育の場で広く活用を図り、文化財愛護の精神を広く普及するよう努めてゆく所存であります。

終わりに、発掘調査にご協力していただいた地元の皆様や、調査に従事していただいた大勢の方々には、この場を借り厚くお礼を申し上げたいと存じます。

平成２年３月

安中市教育委員会

教育長　佐　藤　三木岩

例　　言

1．本書は安中市（福祉事務所）が行う安中市特別養護老人ホーム建設事業に伴う榎木畑遺跡（略称Ｃ－５）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．試掘調査は昭和63年10月17日から11月９日まで昭和63年度文化財保護国庫補助金、県費補助金で実施し、本調査は昭和63年11月９日より12月９日までの間実施した。遺物整理は発掘調査終了後平成２年２月28日までの間断続的に実施した。

3．調査主体は安中市教育委員会であり、調査は社会教育課社会教育係主事大工原豊、千田茂雄が担当し、主査松本豊がこれを補佐した。

4．本書の編集は千田茂雄が行い、執筆分担は次の通りである。

大工原　Ⅶ、Ⅷ－１(1)石器、(2)石器、(3)石器、Ⅸ－２

千田　　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅷ－１(1)、(2)、(3)、(4)、２－(1)、(2)、Ⅸ－１、３

5．遺構の写真撮影は原則として大工原と千田が行ったが、航空写真は㈲青高館に委託した。

6．遺物の写真撮影は、千田、井上慎也（立正大学学生）が行った。

7．遺物の実測及び遺構・遺物のトレース、遺物の拓本は大工原、千田、新井幸介、新井真弓、井上、上原秀樹（東北学院大学学生）、金井京子、小林豊、斉藤説成、田村悦子、中川京子、飛田明日香（同志社大学学生）、飛田紀子、黛幸生、村井田俊木、和田宏子が行った。縄文土器の実測用写真を小川忠博氏に委託して撮影を行った。

8．本調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

9．発掘調査組織

安中市教育委員会事務局

社会教育部長	上原満雄			
社会教育課長	茂木勝文			
社会教育係長	反町良一（平成元年４月転出）			
	伊藤惣一			
主査（社教主事）	森泉寿義雄			
主査	松本　豊	主事	大工原豊	（担当）
主事（社教主事）	田中秀雄	主事	千田茂雄	（担当）

10．調査にあたり地元の方々に様々な面でご協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

11．調査より報告書作成に至るまで、次の方にご指導、ご助言いただいた。深く感謝いたします。（敬称略）

麻生敏隆　岡村道雄　小野和之　神戸聖語　前原　豊

12. 発掘調査及び遺物整理従事者は次のとおりである。(敬称略)

新井幸介　新井真弓　秋山広吉　井上慎也　上原英次　上原和夫　上原秀樹　大塚スエ子　岡澤恭子　岡島美智子　長日部とく子　金井京子　金井武司　小板橋秀吉　小林さい　小林豊　小林芳枝　斉藤説成　清水正　清水泰忠　下マスエ　白石俊子　神宮幸四郎　鈴木茂美　鈴木八郎　須藤だい　須藤登志夫　高木公太郎　高橋理樹　武内よし子　多胡靜　田島玉枝　田島元治　田島かつ子　田中七郎　田中利策　田村悦子　田村みさを　富田哲雄　中川京子　中村政雄　長岡政江　飛田明日香　飛田紀子　布施正男　松原鬼長　松本恭子　黛幸生　村井田俊木　森由一　蘭悦冶　和田宏子

凡　　例

1．遺跡全体図の縮尺は1／200である。

2．住居址等遺構の縮尺は1／80である。

3．遺物の縮尺は次のとおりである。

縄文土器（大形）　1／6　縄文土器、石器　1／3、2／3

土師器、須恵器、鉄製品、紡錘車　1／4

4．縄文時代の住居址のスクリントーンは炉を示している。

奈良・平安時代の住居址のスクリントーンは壁外柱穴を示している。

5．土層説明中での記号、略称は次のとおりである。

色調＜：より明るい方向を示す（例1＜2：1より2の方が明るい）

しまり、粘性　◎：あり、○：ややあり、△：あまりない、×：なし

混入物　◎：大量、○：多量、△：少量、※：若干、×：なし、

ＲＢ：ロームブロック、ＲＰ：ローム粒子、ＷＰ：白色粒子、ＹＰ：板鼻黄色軽石

6．縄文時代の土器分類は以下の8分類によって行った。

Ⅰ類：諸磯式　Ⅳ類：阿玉台式　Ⅶ類：加曽利Ｅ式出現期

Ⅱ類：十三菩提式　Ⅴ類：勝坂式　Ⅷ類：加曽利Ｅ式

Ⅲ類：五領ケ台式　Ⅵ類：曽利式系

7．石器の分類は注連引原Ⅱ遺跡（大工原1988）の分類基準に基づく。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
本文目次
挿図目次
表 目 次
図版目次
Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　調査の経過 …… 1
Ⅲ　調査の方法 …… 1
Ⅳ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 2
Ⅴ　層　　序 …… 5
Ⅵ　遺 跡 概 要 …… 6
Ⅶ　旧石器時代の遺物 …… 6
Ⅷ　遺構と遺物 …… 7
1　縄文時代の遺構と遺物 …… 7
(1)　住　居　址 …… 7
(2)　土　　壙 …… 45
(3)　竪穴状遺構 …… 50
(4)　縄文土器観察表 …… 52
2　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 58
(1)　住　居　址 …… 58
(2)　遺物観察表 …… 75
Ⅸ　成果と問題点 …… 79
1　縄文時代前期Ⅰ、Ⅱ群土器について …… 79
2　榎木畑遺跡における前期後半から中期中葉にかけての石器群について …… 83
(1)　石匙について …… 83
(2)　打製石斧について …… 83
(3)　スクレイパーB類について …… 85
(4)　石 器 組 成 …… 87
3　H－1、H－7号住居址壁面の横穴について …… 90

挿図目次

第１図　榎木畑遺跡位置図…… 3
第２図　榎木畑遺跡と周辺の遺跡…… 4
第３図　基本層序柱状図…… 5
第４図　榎木畑遺跡全体図……付図
第５図　旧石器時代の遺物…… 6
第６図　Ｊ－１号住居址実測図…… 8
第７図　Ｊ－１号住居址出土の土器…… 9
第８図　Ｊ－１号住居址出土の石器……10
第９図　Ｊ－２号住居址実測図……12
第10図　Ｊ－２号住居址出土の土器……12
第11図　Ｊ－２号住居址出土の石器……13
第12図　Ｊ－３号住居址実測図……14
第13図　Ｊ－３号住居址出土の土器(1)……15
第14図　〃　(2)……16
第15図　〃　(3)……17
第16図　Ｊ－３号住居址出土の石器(1)……18
第17図　〃　(2)……19
第18図　Ｊ－４ａ・４ｂ号住居址実測図…22
第19図　Ｊ－４ａ号住居址出土の土器……23
第20図　Ｊ－４ａ号住居址出土の石器……24
第21図　Ｊ－５・６・７・８号住居址実測図
……26
第22図　Ｊ－５号住居址出土の土器……27
第23図　Ｊ－５号住居址出土の石器(1)……28
第24図　〃　(2)……29
第25図　Ｊ－６号住居址出土の土器……30
第26図　Ｊ－６号住居址出土の石器……31
第27図　Ｊ－７号住居址出土の土器(1)……33
第28図　〃　(2)……34
第29図　Ｊ－７号住居址出土の石器……35
第30図　Ｊ－８号住居址出土の土器……36
第31図　Ｊ－８号住居址出土の石器……37
第32図　Ｊ－９・10号住居址実測図……39
第33図　Ｊ－９号住居址出土の土器(1)……40
第34図　〃　(2)……41
第35図　Ｊ－10号住居址出土の土器……41
第36図　Ｊ－９号住居址出土の石器(1)……43
第37図　〃　(2)……44
第38図　Ｊ－10号住居址出土の石器……44
第39図　土壙・竪穴状遺構実測図……46
第40図　土壙・竪穴状遺構出土の土器……47
第41図　土壙・ピット等出土の石器(1)……48
第42図　〃　(2)……49
第43図　Ｈ－１号住居址実測図……59
第44図　Ｈ－１号住居址出土の遺物……59
第45図　Ｈ－２号住居址実測図……60
第46図　Ｈ－２号住居址出土の遺物……60
第47図　Ｈ－３号住居址実測図……62
第48図　Ｈ－４号住居址実測図……62
第49図　Ｈ－４・５号住居址出土の遺物
……63
第50図　Ｈ－５号住居址実測図……64
第51図　Ｈ－６号住居址実測図……64
第52図　Ｈ－６号住居址出土の遺物……65
第53図　Ｈ－７号住居址実測図……67
第54図　Ｈ－７号住居址出土の遺物(1)……67
第55図　〃　(2)……68
第56図　Ｈ－８号住居址実測図……69
第57図　Ｈ－８号住居址出土の遺物……69
第58図　Ｈ－９号住居址実測図……70

第59図　Ｈ－９号住居址出土の遺物……70
第60図　Ｈ－10号住居址実測図……72
第61図　Ｈ－11号住居址実測図……72
第62図　Ｈ－10号住居址出土の遺物……73
第63図　Ｈ－12号住居址実測図……74
第64図　Ｈ－12号住居址出土の遺物……74
第65図　諸磯式土器編年図(1)……80
第66図　〃　(2)……81
第67図　打製石斧の形態別割合……84
第68図　打製石斧の欠損割合……84
第69図　打製石斧の使用痕……84
第70図　縄文時代前期のＢ類石器製作システムの変化……86
第71図　榎木畑遺跡石器組成図……88
第72図　横穴を持つ住居址……91

表　目　次

第１表　Ｊ－１号住居址石器組成表……７
第２表　Ｊ－２号住居址石器組成表……11
第３表　Ｊ－３号住居址石器組成表……20
第４表　Ｊ－４号住居址石器組成表……21
第５表　Ｊ－５号住居址石器組成表……25
第６表　Ｊ－６号住居址石器組成表……32
第７表　Ｊ－７号住居址石器組成表……32
第８表　Ｊ－６・７号住居址石器組成表…37
第９表　Ｊ－８号住居址石器組成表……38
第10表　Ｊ－９号住居址石器組成表……42
第11表　Ｊ－10号住居址石器組成表……45
第12表　土壙・ピット出土の石器組成表…50
第13表　調査区出土の石器組成表……51
第14表　榎木畑遺跡石器組成表……87

図版目次

口　絵　榎木畑遺跡全景
十三菩提式土器
五領ケ台式土器
図版１　榎木畑遺跡遠景、Ｊ－１号住居址
図版２　Ｊ－２号住居址、Ｊ－３号住居址
Ｊ－３号住居址遺物出土状況
Ｊ－４ａ、ｂ号住居址
Ｊ－５・６・７・８号住居址
Ｊ－５・６・７・８号住居址覆土
Ｊ－９・10号住居址
図版３　Ｄ－１・３・５号土壙、Ｈ－１号住居址
Ｈ－２号住居址、Ｈ－３号住居址
Ｈ－４号住居址、Ｈ－５号住居址
Ｈ－６号住居址
図版４　Ｈ－７号住居址、Ｈ－８・９・10号住居址
Ｈ－11号住居址、Ｊ－１・２・３号住居址出土の土器
図版５　Ｊ－４ａ・５・６・７・８・９・10号住居址・土壙出土の土器
図版６　Ｊ－１・３号住居址出土の土器
図版７　Ｊ－３・４ａ・７・８・９号住居址出土の土器
図版８　尖頭状石器、石族、石錐、スクレイパーＡ類
石匙、ピエス・エスキーユ
図版９　打製石斧、スクレイパーＢ類、磨製石斧
図版10　凹石、磨石、敲石
図版11　砥石、棒状礫、台石、石皿
図版12　Ｈ－１・２・４・５号住居址出土遺物
図版13　Ｈ－５・６号住居址出土遺物
図版14　Ｈ－７号住居址出土遺物
図版15　Ｈ－８・９・10号住居址出土遺物
図版16　Ｈ－10・12号住居址出土遺物

I　調査に至る経過

昭和63年10月、安中市福祉事務所より安中市教育委員会へ、特別養護老人ホーム建設事業に係る照会があった。しかし、該当地域は詳細分布調査の結果、埋蔵文化財が存在する可能性が高いことがわかっていたため、福祉事務所と市教育委員会の間で再三にわたり建設場所の変更をも含めて協議を行った。しかし、特別養護老人ホーム建設は、安中市にとってもこれからの高齢化社会を向かえるにあたり、必要不可欠な施設であることから、事業実施に先立ち、まず遺跡の有無を確実に確認するため、昭和63年度文化財保護国庫補助金、県費補助金により試掘調査を実施した。試掘調査の結果、該当地域には縄文時代から平安時代にかけての集落が存在することが確認されたため、ただちに本調査を実施して記録保存の措置を講ずることになった。

II　調 査 の 経 過

試掘調査は昭和63年10月17日より11月９日までの間実施した。特別養護老人ホーム建設の中心測量線を利用し、トレンチを６本設定し、遺構の確認作業を実施した。その結果、縄文時代前期から平安時代にかけての集落が存在することが確認された。

本調査は試掘調査終了後直ちに開始され、12月９日までの間実施した。発掘調査はまず、バックホーにより表土を掘削し、その後人力により、遺構確認を行った。確認された遺構は精査を行い、測量、写真撮影を行った。測量については遺構平面図、土層断面図の作成を行った。

遺物整理は発掘調査終了後、昭和63年12月10日から平成２年２月28日までの間実施した。作業は、遺物の水洗・注記→接合・復元→実測・拓本→トレース・写真撮影の順で行い、並行して遺構図面の整理・素図作成→トレース、写真整理を行った。

III　調 査 の 方 法

試掘調査は中心測量線のラインを基準線として、これに直行する方向に12m毎に幅２mのトレンチを６本設定し、東から１，２，３…と呼称するようにした。まず、各トレンチをバックホー

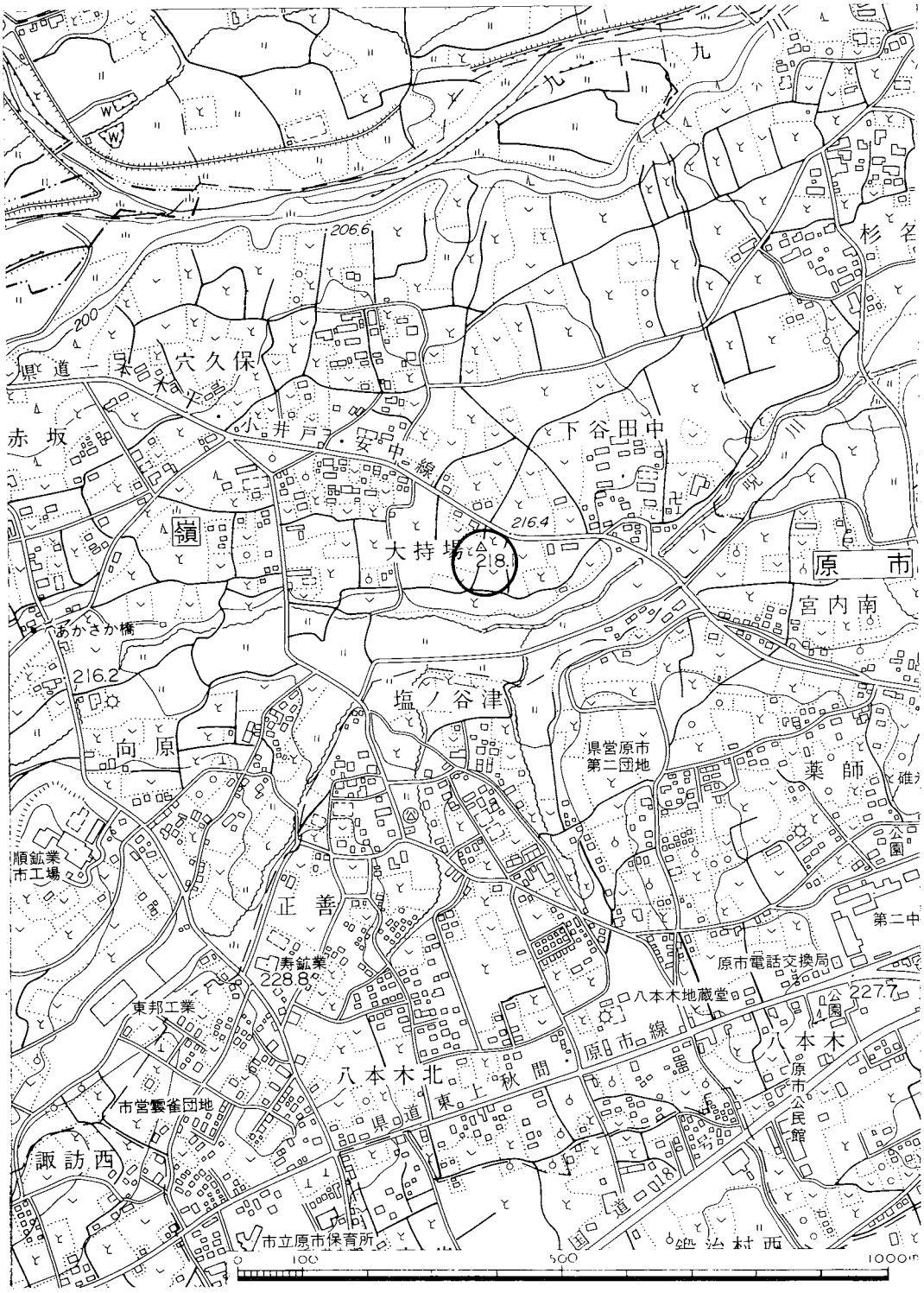
でⅣ層（暗褐色土）上面まで掘削し、その後人力で遺構、遺物の確認作業を実施した。

本調査では試掘調査の結果をもとに、遺構、遺物が確認された部分を拡張して調査を実施した。グリッドは試掘調査と同様中心測量線のラインを基線として、測量杭0.00mをA－12、80.00mをU－12グリッドとなるようにグリッドを設定した。また、1グリッドは4m×4mで北西隅を基点とし、北から南へA，B，C…西から東へ1，2，3…と呼称するようにした。また、グリッドをさらに四分した2m×2mの細グリッドを設定し、北西、北東、南西、南東の順にアルファベットの小文字でa、b、c、dと呼称することにした。本調査はまずバックホーによりⅣ層（暗褐色土）上面まで掘削し、その後人力により遺構、遺物の確認作業を実施した。また確認された遺構は順次精査を行った。確認された遺構、遺物については平板測量により測量を実施した。土層断面図、微細図は必要に応じ作成した。また、遺物の取り上げは土壙、ピットについては遺構毎に行い、住居址については縄文時代の住居で遺物が密集している住居について原則として遺物分布図を作成して行った。縄文時代の遺物の散漫な住居及び、平安時代の住居については住居址長軸方向及び、それに直交する方向に3本づつ等間隔の線を引き、住居址内を16に分割し各区画を層位毎に取り上げた。この他遺構以外の部分については細グリッドで層位毎に取り上げた。また、必要に応じて、遺構、遺物の写真撮影を行った。

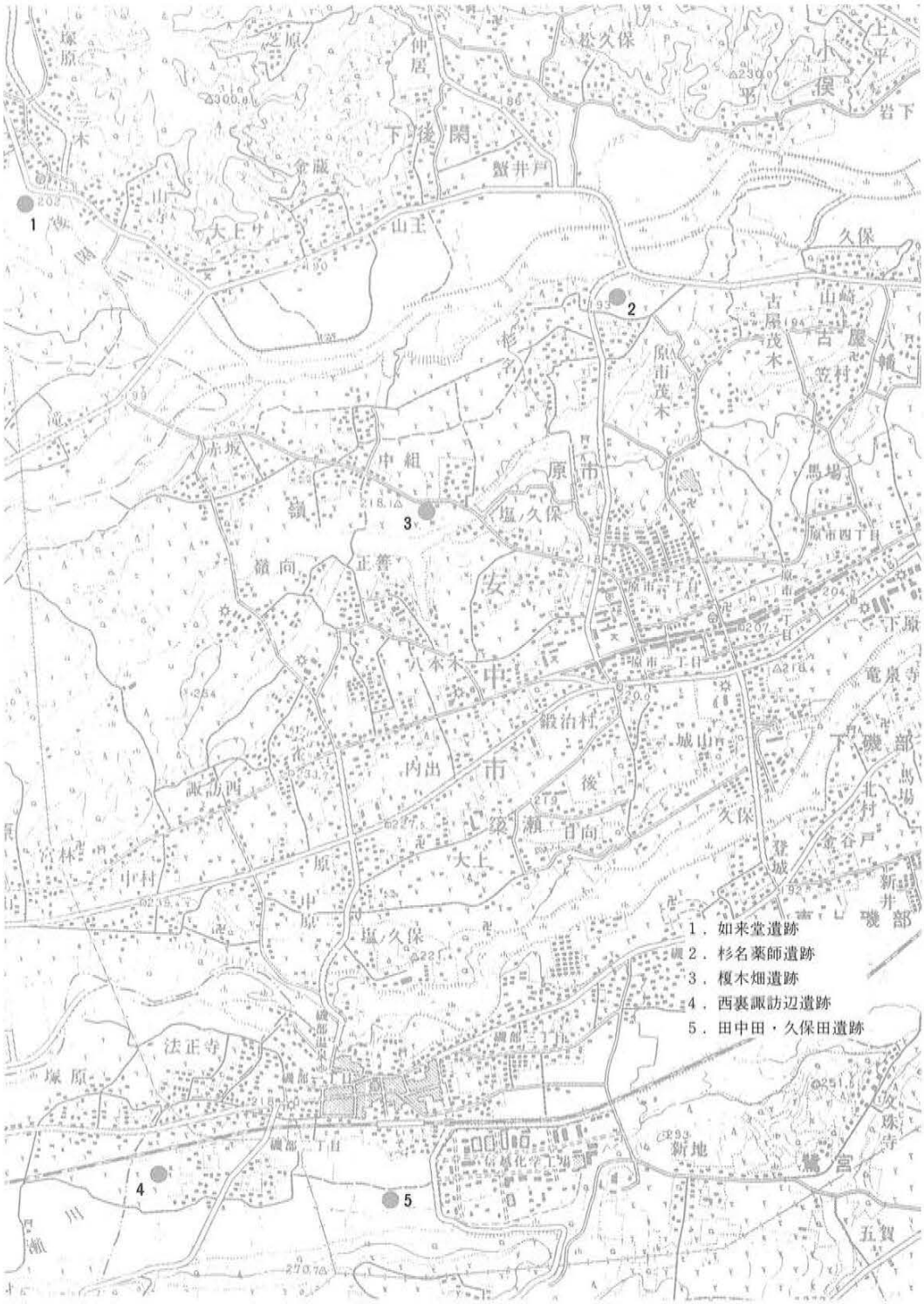
Ⅳ　遺跡の地理的・歴史的環境

榎木畑遺跡は安中市嶺字榎木畑地内に所在する。嶺地区は安中市の西部に位置し、九十九川と八咫川に挟まれた九十九川上位段丘上に位置する。榎木畑遺跡はこの段丘の中央から南側の八咫川との比高差約20mの崖線上に位置する。（第1図）

周辺には、安中市杉名の八咫川沿いの舌状台地先端部に位置する杉名薬師遺跡（未報告）がある。この遺跡は弥生時代、古墳時代の集落遺跡で、弥生時代の住居はほとんどが大形の住居址で、古墳時代の住居址はそのほとんどが火災住居という興味深い遺跡である。また、この遺跡の周辺には古墳が点在している。現在、古墳は4基しか確認できないが、地元の古老の話では7基存在していたということである。この他詳細分布調査により縄文時代から平安時代にかけての遺跡を数カ所確認している。嶺地区はそのほとんどが九十九川上位段丘上にあり、南側を八咫川が流れていることから、集落を形成するには良い立地条件の場所であったと思われる。



第１図　榎木畑遺跡位置図

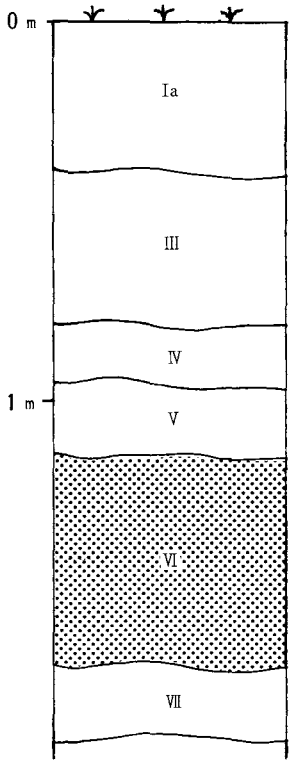


第２図　榎木畑遺跡と周辺の遺跡

V　層　　序

榎木畑遺跡の基本層序は安中市域における基本層序に対比させると、第３図のとおりである。なおＩｂ層（灰白色軽石層：As—A純層）は、調査区南側に寄せ集められた状態で確認されている。また、IIa層（黒色土層）、IIb 層（灰褐色軽石層：As—B純層）は基本層序土層断面図を作成した部分では確認できなかったが、所々に確認されている。以下に各層の特徴について述べることにする。

Ｉa層	黒褐色土層	浅間Ａ軽石（As—Ａ：1783年）を多量に混入する。現在の耕作土で、しまり、粘性はない。
III層	黒色土層	粘性はややあるが、しまりはあまりない。浅間Ｂ軽石（As—Ｂ：1108年）等の混入はまったくない。
IV層	暗褐色土層	III層より明るく、しまり、粘性共にある。この層の上面で遺構が確認される。縄文時代の遺物も包含される。
Ｖ層	黄褐色粘質土層	この層からローム層となる。粘性、しまり共にある。
VI層	黄色軽石層	浅間山を噴源とする板鼻黄色軽石層（As－ＹＰ：約1.3万年前）の純層。しまり、粘性共にない。
VII層	明褐色粘質土層	IV層よりやや褐色で、粘性、しまりともに強い。いわゆるハードロームである。



第３図　基本層序柱状図

Ⅵ 遺 跡 概 要

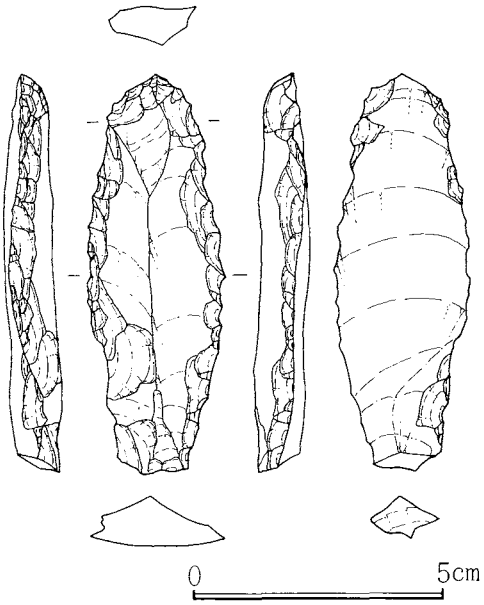
榎木畑遺跡は縄文時代前期後半から中期および、奈良・平安時代の集落遺跡である。

縄文時代では前期後半の諸磯ａ式～ｃ式、十三菩提式、中期前半の五領ケ台式、阿玉台式、勝坂式、加曽利Ｅ式出現期、加曽利Ｅ式の土器を出土する住居址を確認した。遺物では、諸磯ｃ式、十三菩提式、五領ケ台式の良好な資料が得られた。

奈良・平安時代では、12軒の住居址を確認した。確認面から掘り込みの深い住居址が多く、カマドの上部が壊れずに確認できた住居や壁の保護を考えさせられる横穴が壁沿いにある住居址を確認した。遺物では、土師器、須恵器の他に紡錘車、鎌、鉄製の斧、住居内に遺棄されたような状態で床面直上より編物石も検出された。

Ⅶ 旧石器時代の遺物

この遺跡からは、旧石器時代のものと推定される石器が１点検出された(第５図)。この石器はＨ－４号住居址の覆土中から検出されたものである。黒色安山岩製の縦長剝片を素材とし、両側縁部から先端部にかけて急角度の調整が施される。先端部の剝離は使用による二次的な剝離の可能性もある。また、調整は表面に主体的に施されるが、一部裏面にも施されている。打面は単剝離面打面である。形態から尖頭状石器と呼称することにしたが、角錐状石器の範疇に含まれる可能性がある。この尖頭状石器に類似した石器はＡＴの下位、上位とも存在しており、その位置付けについては今後の課題であり、慎重に行ってゆく必要がある。



第５図　旧石器時代の遺物

Ⅷ 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居址

J－1号住居址（第6図）

D－11・12、E－11・12グリッドに位置し、H－1号住居址と土壙2基が重複している。

住居址の平面形は5角形で、規模は最長径5m60cm、最短径4m50cm、周壁は約30.4cmを計る。

主柱穴は北側3本、南側3本の計6本が確認できた。

炉址は焼土もなくはっきりとは確認できなかったが、住居址中央部の円形の掘り込みと思われる。

遺物出土状況

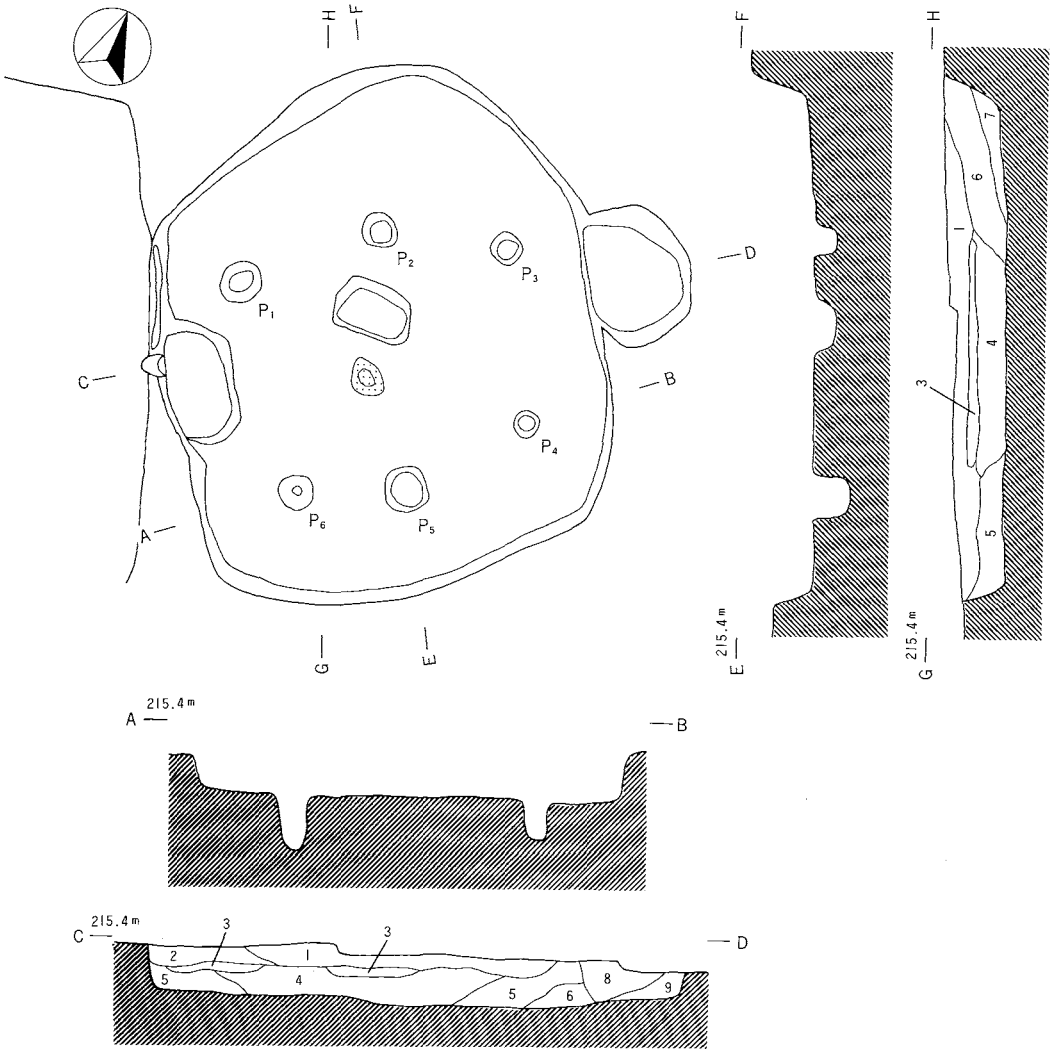
覆土の堆積状態をみると、3層を境として、その上層と下層とがやや不整合な状態で堆積していることが土層断面から観察された。そして、遺物は上層から下層まで検出されており、特に下層から床面直上にかけて多数検出されている。しかし、3層・4層から検出されたものは少ない。こうした状況から、この住居址から検出された遺物は大部分二次的に廃棄されたものと推定される。

土器（第7図）

この住居址からはⅠ類を主体に、Ⅲ類、Ⅴ類、Ⅷ類の土器片が約500点出土している。Ⅰ類土器は出土量の85％を占め、下層から床面にかけてまとまって出土している。

	器種	Ob	Ch	硬質Sh	Sh	計
A類	石鏃	2				2
	石錐	1				1
	石匙			1	1	2
	スクレイパーA	11	1			12
	ピエス・エスキーユ	1				1
	R・F・A	8				8
	小計	23	1	1	1	26
B類		Sh	An	GAn		
	打製石斧	13	8			21
	スクレイパーB	7		2		9
	小計	20	8	2		30
C類		An	砂岩	玄武岩系		
	凹石	11				11
	磨石	7				7
	敲石			1		1
	石皿	3				3
	台石	2				2
	砥石	1	4			5
	小計	24	4	1		29
D類		KH				
	棒状礫	2				2
	小計	2				2
E類		玄武岩系				
	磨製石斧	2				2
	小計	2				2
	合計	71	13	4	1	89

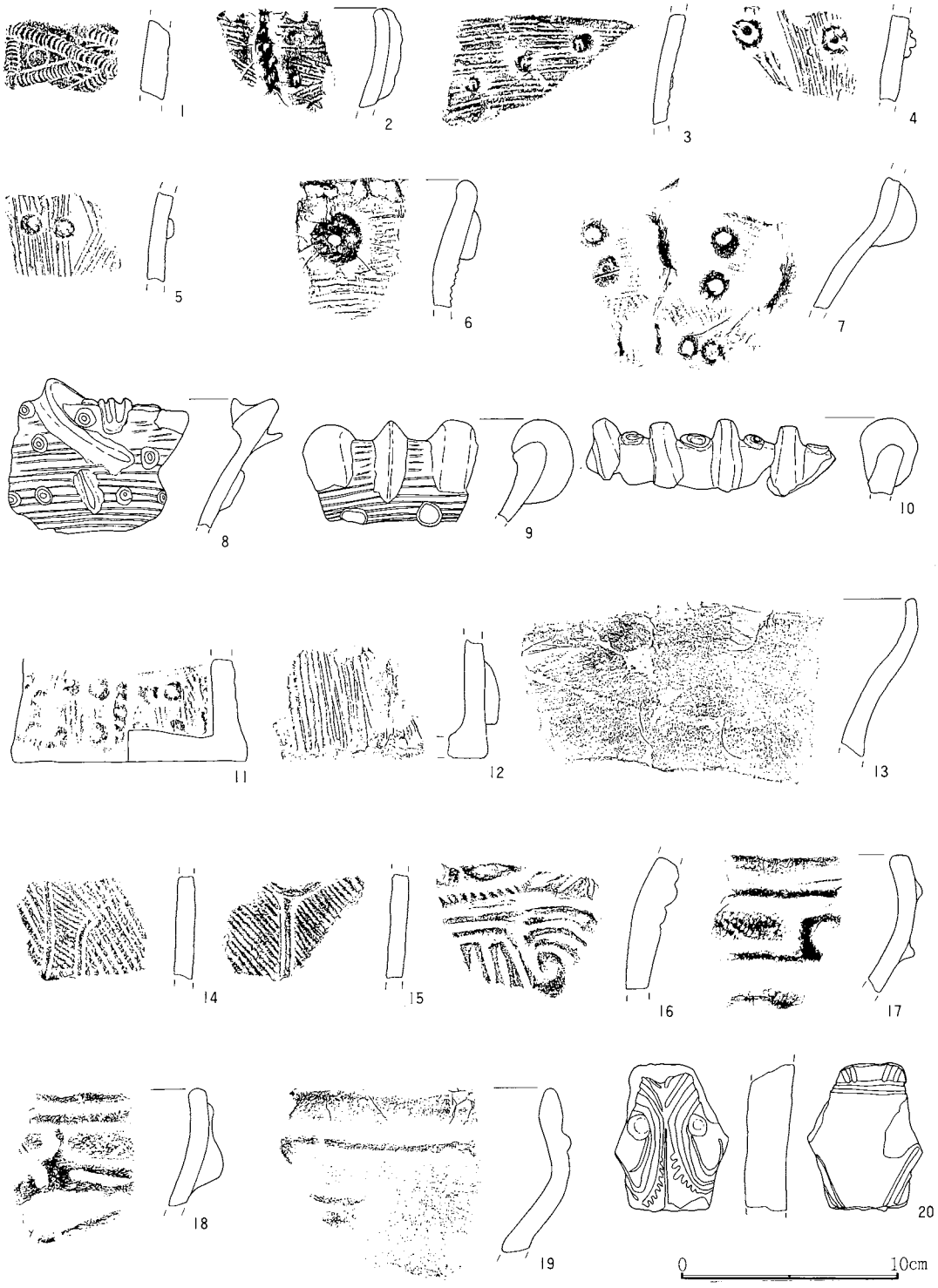
第1表　J－1号住居址石器組成表



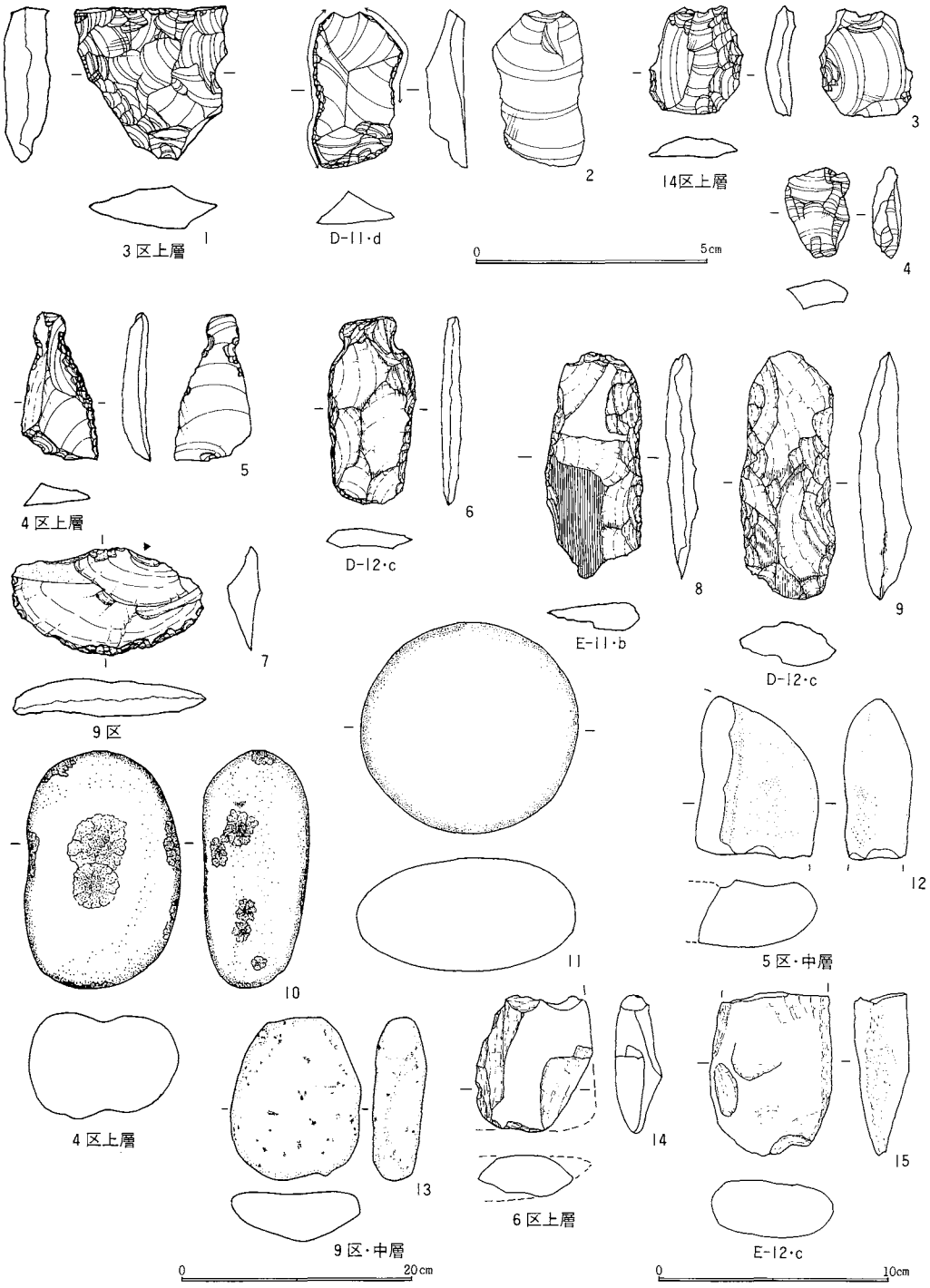
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 Y・P	混入物 R・P	混入物 R・B	備考
1	暗褐色土層		○	○	○	※			S混入
2	暗黄褐色土層	2>4	○	○	○	※			
3	暗黄褐色土層		○	○	※	※		○	
4	黒褐色土層		○	○	○	○			
5	暗褐色土層		○	○	○	○			S混入
6	暗黄褐色土層		○	○	○	○	※		S混入
7	黄褐色土層		○	○	○	※	○	※	
8	暗黄褐色土層		○	○	○	○			P・S混入
9	〃	8<9	○	○	○	○			

0 4m

第6図　J－1号住居址実測図



第７図　Ｊ－１号住居址出土の土器



第8図　J－1号住居址出土の石器

石器（第８図）

この住居址から検出された石器は全部で89点である(第１表)。Ａ類の石器としては、石鏃、スクレイパーＡ類(1～3)、石匙(5･6)、ピエス・エスキーユ(4)、リタッチド・フレイクＡ類がある。石材は大部分が優先石材である黒曜石を用いている。Ｂ類では打製石斧(8･9)、スクレイパーＢ類(7)がある。Ｃ類では凹石(10)、磨石(11)、石皿、砥石(12)、台石がある。Ｄ類では結晶片岩製の棒状を呈した礫がある。この礫は遺跡周辺の河川には存在しないものであり、棒状の形状を呈していることから、人為的に何らかの目的で遺跡内へ持ち込まれたものと考えられる。この結晶片岩製の棒状礫は前期にしばしばみられるものであり、狭義の石器に含まれるものと推定される。

Ｊ－２号住居址（第９図）

Ｔ－15・16、Ｕ－15・16グリッドに位置し、Ｈ－４号住居址と土壙２基とに重複する。

住居址の平面形は不正円形で、規模は約５ｍ×４ｍ20cm、周壁は約15cmを計る。

掘り込みが非常に浅く、プラン確認に困難をきたした。柱穴は壁に沿って数本確認されたが、主柱穴は確認できなかった。

炉址は焼土の散らばりもなく、全く確認できなかった。

遺物出土状況

住居の掘り込みが浅く、少量しか検出されなかった。遺物は偏在性なく住居址全体から出土した。土層は２層に分かれるが、出土レベルは余り上下差がないので、これらの遺物はこの住居址に伴う可能性が強い。

土器（第10図）

この住居址からは、Ｉ類に属する土器片が少量出土した。

石器（第11図）

この住居址から検出された石器は少なく、狭義の石器は全部で５点である(第２表)。１は石鏃、３は凹石、４は砥石、５は磨製石斧である。この他に打製石斧が１点存在する。また、２は石核Ａ類である。

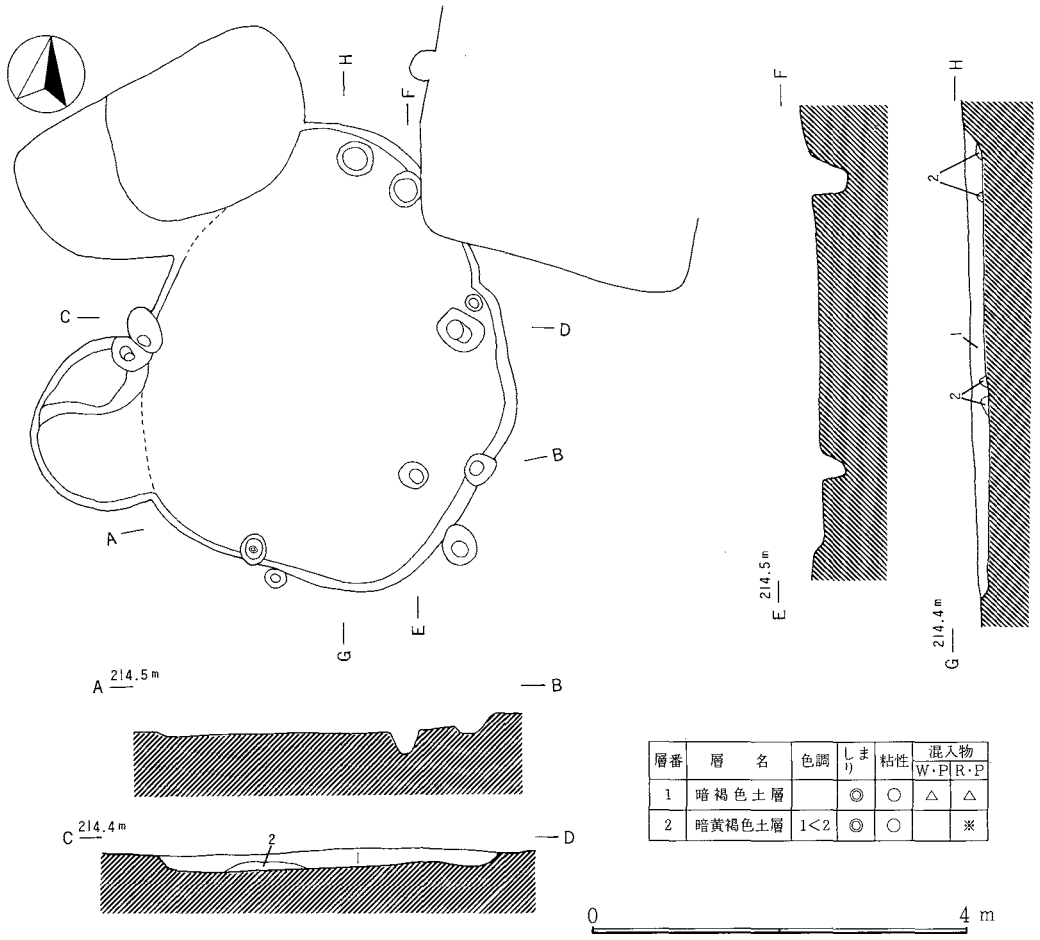
Ｊ－３号住居址（第12図）

Ｐ－12・13グリッド、Ｑ－12・13グリッドに位置し、他の遺構との重複はない。

住居址の平面形はほぼ円形で、規模は約６ｍ10cm

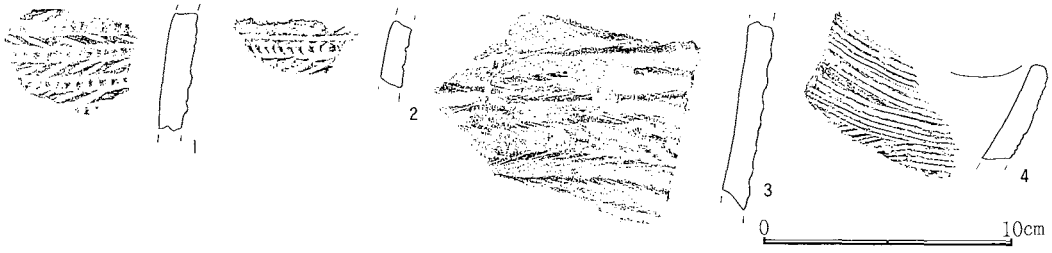
	器種	Ob		計
Ａ類	石鏃	1		1
	小計	1		1
Ｂ類		Sh		
	打製石斧	1		1
	小計	1		1
Ｃ類		An	砂岩	
	凹石	1		1
	砥石		1	1
	小計	1	1	2
Ｅ類		玄武岩系		
	磨製石斧	1		1
	小計	1		1
	合計	4	1	5

第２表　Ｊ－２号住居址石器組成表

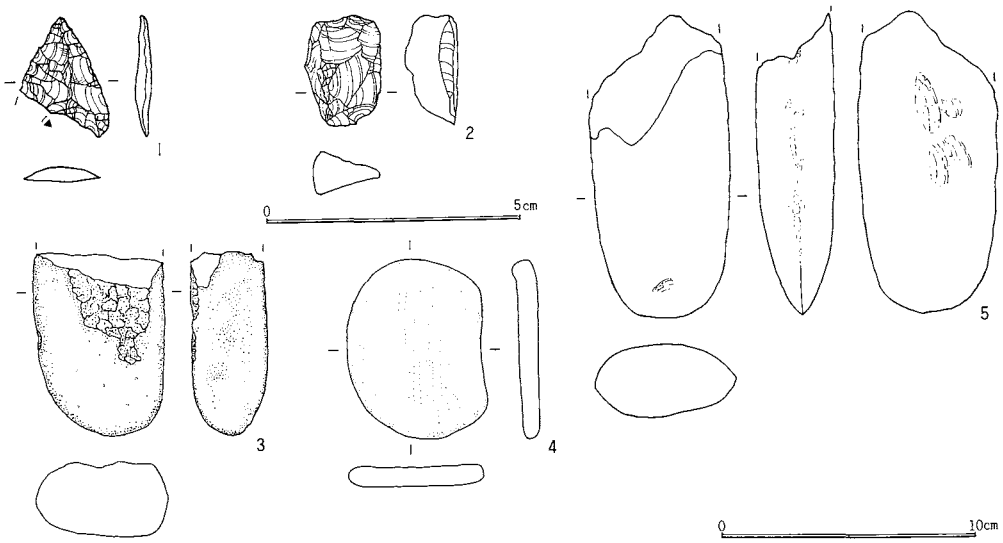


層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物	
					W・P	R・P
1	暗褐色土層		◎	○	△	△
2	暗黄褐色土層	1<2	◎	○		※

第9図　J－2号住居址実測図



第10図　J－2号住居址出土の土器



第11図　J－2号住居址出土の石器

×5m80cm、周壁は約60cmを計る。

柱穴は10基確認されたが、主柱穴は7本と考えられる。この柱穴の内P－1、P－2の2本は東壁下に接触して確認され、出入口等の何等かの施設の存在が考えられる。

炉址は焼土などの確認もできなかったが、中央部分の浅い掘り込みと思われる。

遺物出土状況

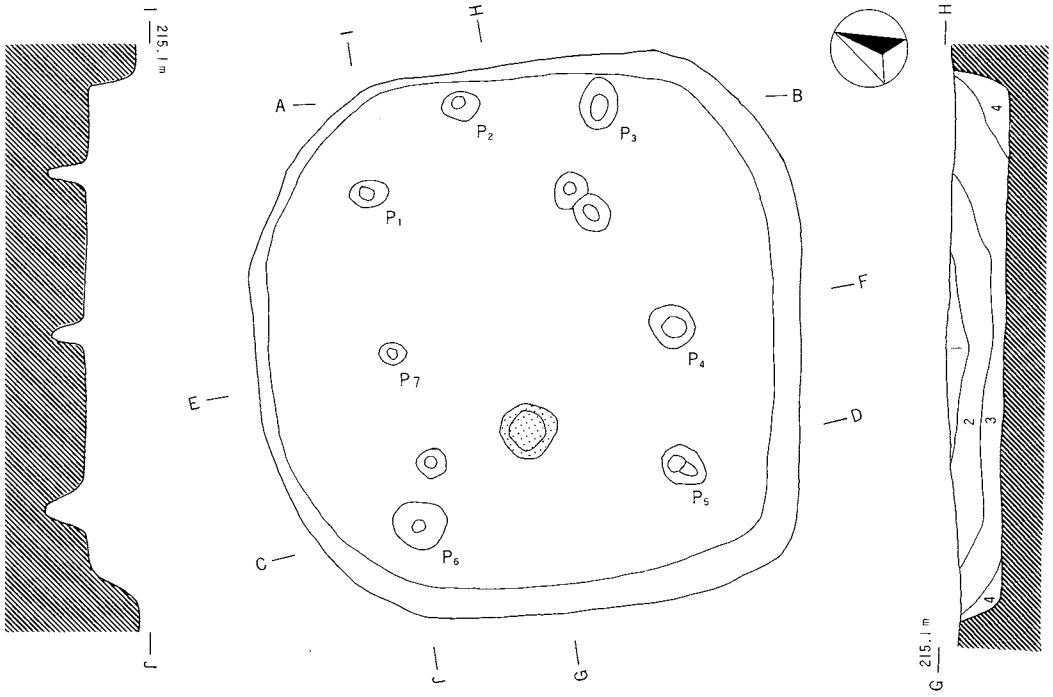
この住居址からは大量に検出された。覆土はきれいなレンズ状に堆積しており、自然に埋没した様相を示している。遺物は1層から4層まで検出され、特に2層から3層にかけて大形の土器片がまとまって検出された。これらの遺物は明確に床面に接して検出されたものがないため、住居廃絶後それほど時間をおかずに継続して廃棄されたものと考えられる。

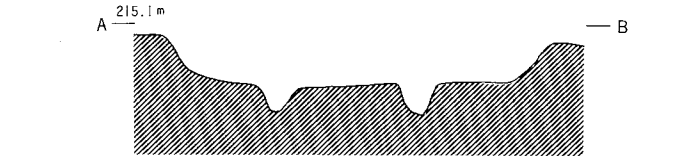
土器（第13図・第14図・第15図）

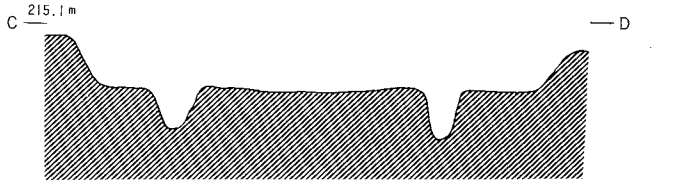
この住居址からは1層から4層までⅠ類に属する破片のみ1,500点余りが出土した。特に大形破片が多く、完形資料となるものも数点出土していてⅠ類の土器細分を行うための良好な資料を得ることができた。この住居の土器を中心としてⅨ章ではⅠ類土器の細分を試みたいと思う。

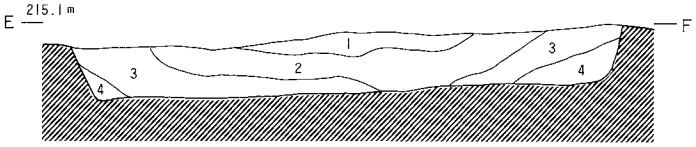
石器（第16図・第17図）

狭義の石器は全部で107点であり、内訳は第3表のとおりである。A類では石鏃(1～3)、石錐(4・5)、石匙(9～11)、スクレイパーA類(6・7)、ピエス・エスキーユ(8)、リタッチド・フレイクA類がある。B類では打製石斧(14～18)、スクレイパーB類(12・13)、その他の打製石器がある。また、C類では凹石(21)、磨石(19・20)、敲石(22)、砥石(25)、石皿(26)がある。そして、D類では結晶





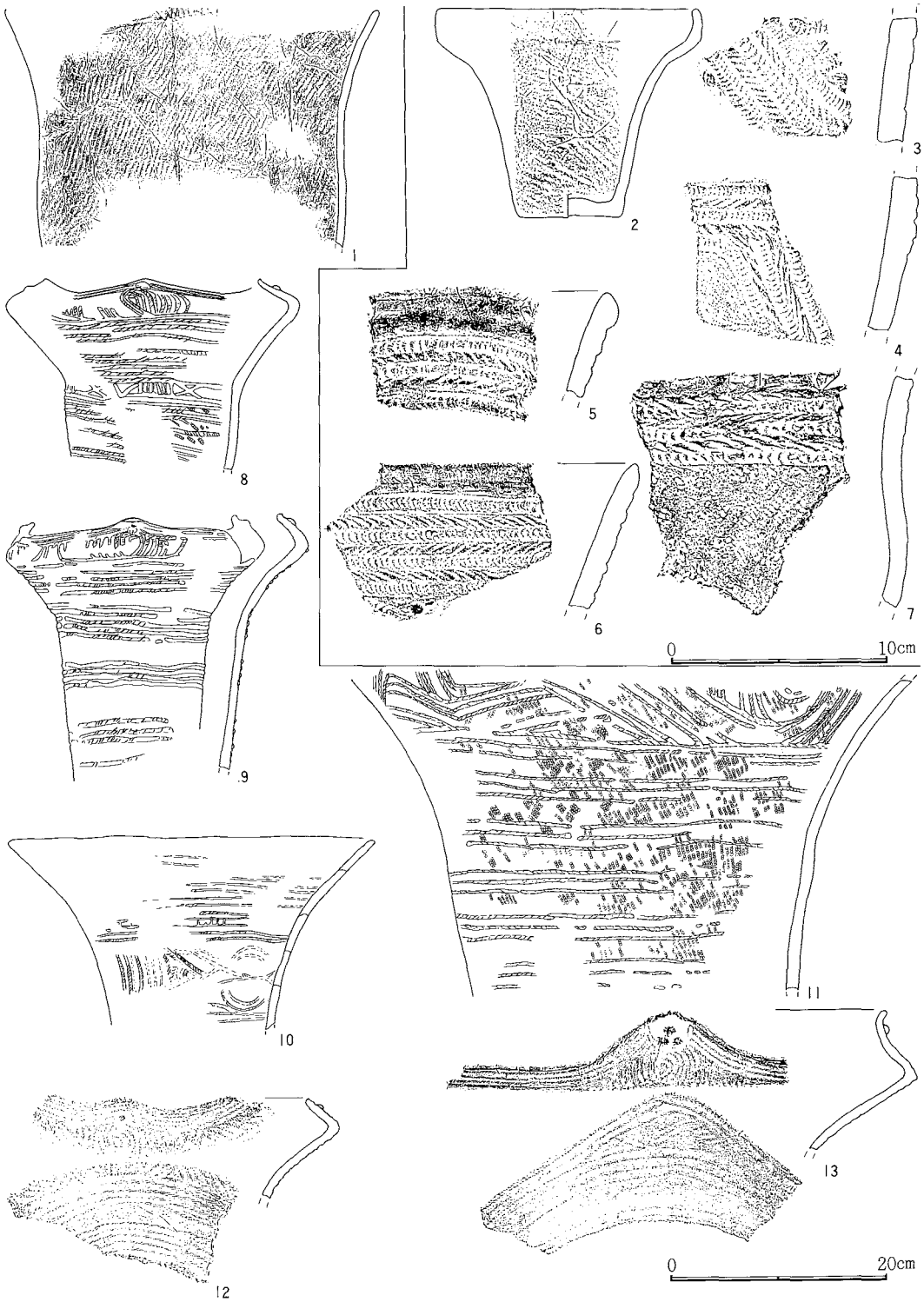




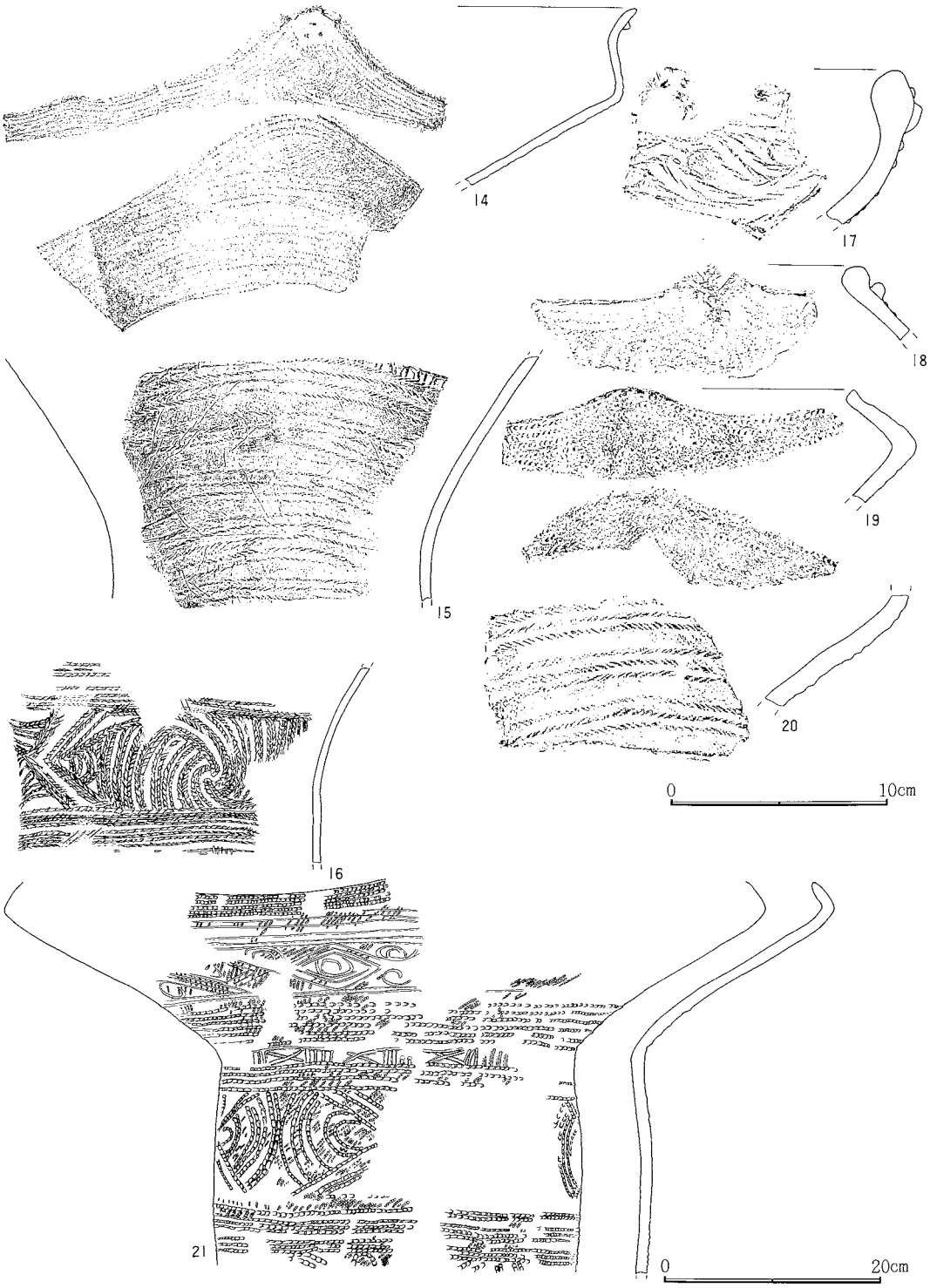
層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 Y・P	混入物 R・P
1	黒褐色土層		◎	○	△	△	△
2	〃	1>2	◎	○	△	△	
3	暗黄褐色土層		○	○		○	○
4	〃	3>4	○	○	△	△	

0　　4 m

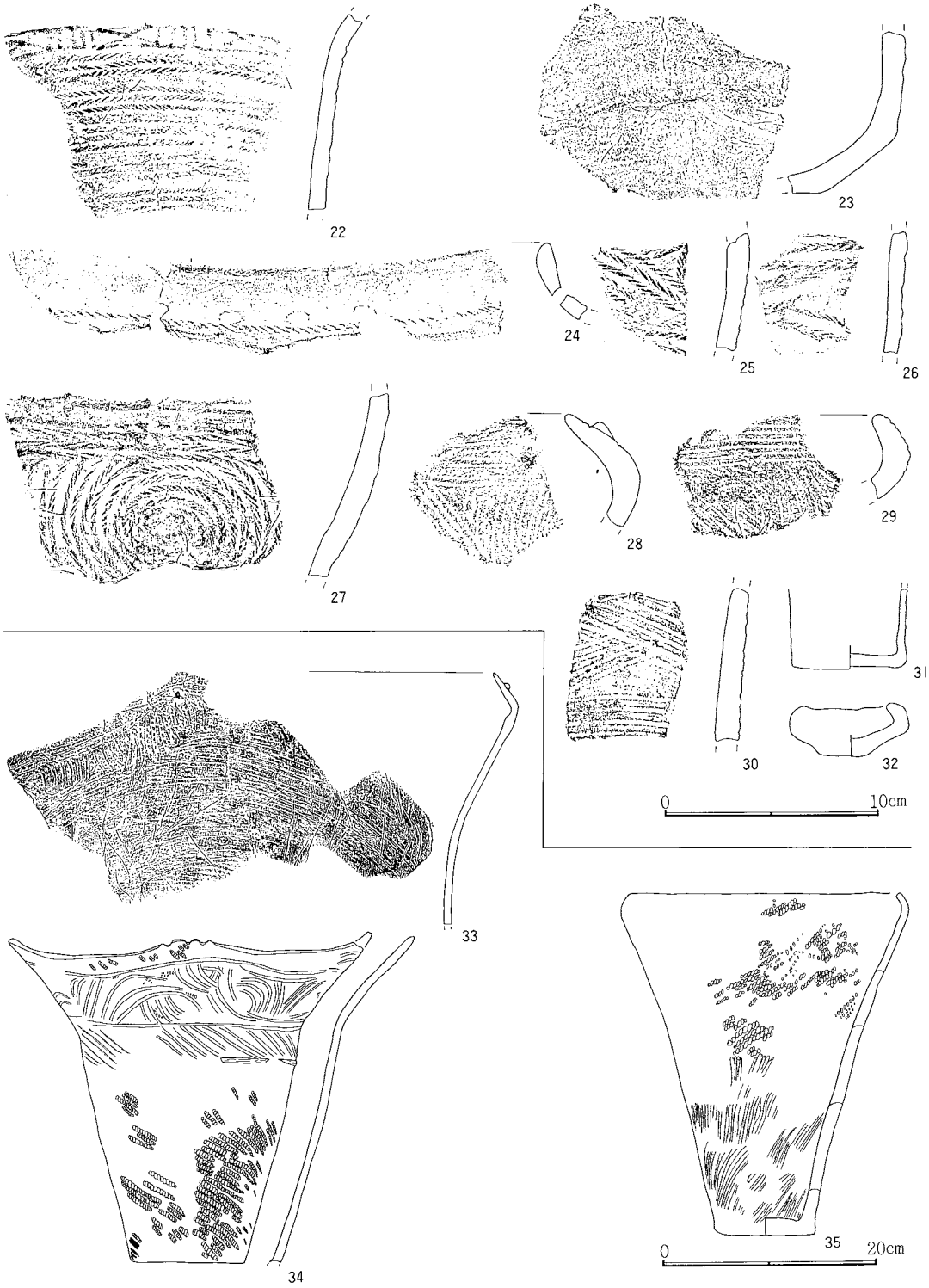
第12図　J－3号住居址実測図



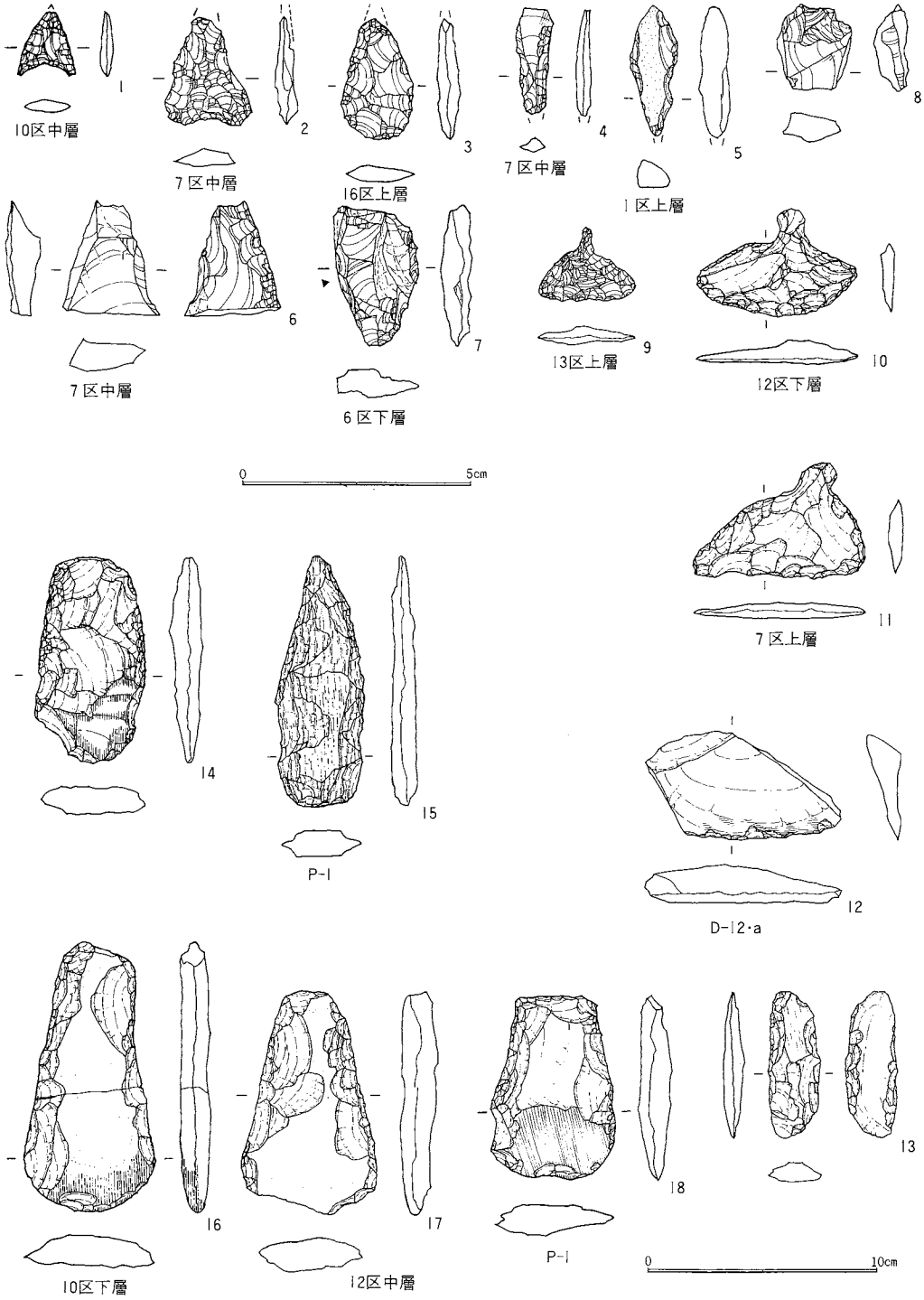
第13図　Ｊ－３号住居址出土の土器(1)



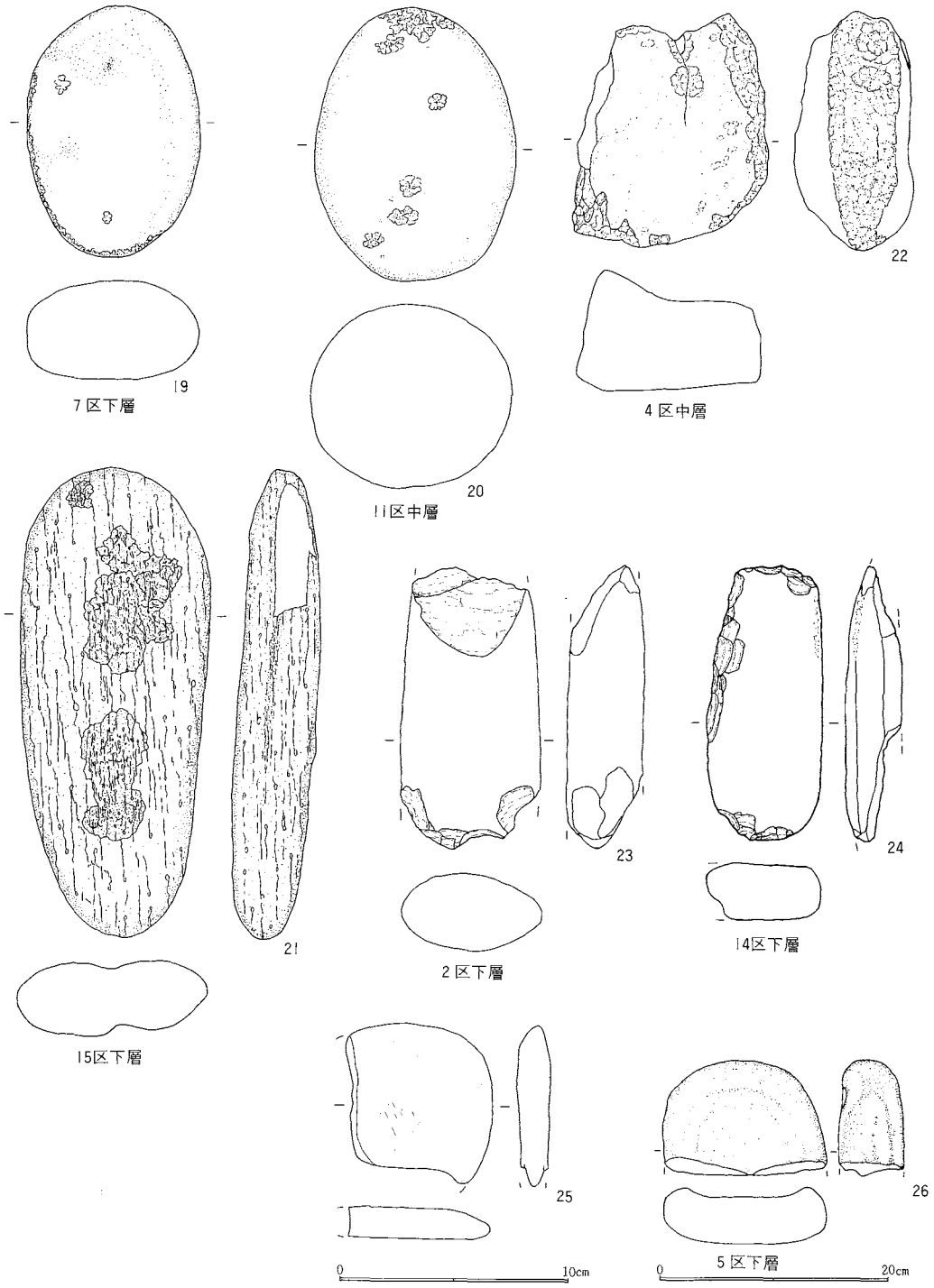
第14図　J－3号住居址出土の土器(2)



第15図　J－3号住居址出土の土器(3)



第16図　J－3号住居址出土の石器(1)



第17図　J－3号住居址出土の石器(2)

片岩製の棒状礫があり、E類では磨製石斧(23・24)がある。このように、この住居址の石器群は器種が豊富であり、前期後半期の石器組成の特徴がよく現れている。

この中で、18の打製石斧は刃部に研磨痕があり、使用による磨滅ではないので、局部磨製石斧とも考えられる。また、13のスクレイパーB類は打製石斧調整剝片を素材としている。21の凹石は結晶片岩製で大形であり、他の凹石とは形状が異なっている。

	器種	Ob	Ch	Sh		計
A類	石鏃	3	1			4
	石錐	2				2
	石匙		1	4		5
	スクレイパーA	6	2			8
	ピエス・エスキーユ	2				2
	R・F・A	5				5
	小計	18	4	4		26
B類		Sh	An	GAn	KH	
	打製石斧	18	7	2	3	30
	スクレイパーB	14		1	1	16
	その他	3	1			4
	小計	35	8	3	4	50
C類		An	砂岩	花崗岩	KH	
	凹石	10			1	11
	磨石	6				6
	敲石	1		1		2
	石皿	2			1	3
	砥石	1	2			3
	小計	20	2	1	2	25
D類		KH				
	棒状礫	4				4
	小計	4				4
E類		玄武岩	蛇紋岩			
	磨製石斧	1	1			2
	小計	1	1			2
	合計	78	15	8	6	107

第3表　J－3号住居址石器組成表

J－4a号住居址（第18図）

T－12・13、U－12・13グリッドに位置し、J－4b号住居址と重複している。土層の観察から掘り込みの深いJ－4a号住居址の方が古いことが確認された。

住居址の平面形は5角形で、規模は約5m×4m10cm、周壁は約50cmを計る。

柱穴は9基確認されたが、主柱穴は4本と考えられるがP－3が壁に接しているため台形状の平面形を呈する。

炉址は地焼炉で、P－1、P－2の間に位置し1回の改築が行われている。

遺物出土状況

遺物は、覆土中層から下層にかけてまとまって検出され、この中には大形の土器片も多量に含まれている。しかし、床面から多少浮いた状態で検出されているため、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

土器（第19図）

J－3号住居址同様I類に属する破片が600点余り出土し、I類土器の細分の良好な資料が得られた。

石器（第20図）

狭義の石器は50点であり、内訳は第４表のとおりである。この住居址は２軒重複しているが、出土状態からみて、大部分の遺物はＪ－４ａ住居址に属すると推定される。Ａ類では石鏃(1)、石匙(6)、スクレイパーＡ類(2･3)、リタッチド・フレイクＡ類がある。Ｂ類では打製石斧(4･5)、スクレイパーＢ類(7･8)、その他の打製石器がある。また、Ｃ類では凹石(9)、磨石(10)がある。Ｄ類では結晶片岩製の棒状礫が存在する。

１の石鏃は未成品の可能性がある。また、９の凹石は結晶片岩製である。

	器種	Ob	Ch	Sh	計
A類	石鏃		1		1
	石匙			2	2
	スクレイパーA	2	1		3
	R・F・A	4			4
	小計	6	2	2	10
B類		Sh	An	KH	
	打製石斧	15		2	17
	スクレイパーB	3	1		4
	その他	5			5
	小計	23	1	2	26
C類		An	KH		
	凹石	7	1		8
	磨石	5			5
	小計	12	1		13
D類		KH			
	棒状礫	1			1
	小計	1			1
	合計	42	4	4	50

第４表　Ｊ－４号住居址石器組成表

Ｊ－４ｂ号住居址（第18図）

Ｔ－12・13、Ｕ－12・13グリッドに位置し、Ｊ－４ａ号住居址と重複している。

住居址の平面形は、Ｊ－４ａ号住居址に切られ、南壁が確認できなかったことからはっきりと確認できなかったが、長方形を呈していたと推測される。周壁ははっきりしている西側で約20cmを計る。

柱穴は４基確認されたが、主柱穴の確認はできなかった。

炉址もまた確認できなかった。

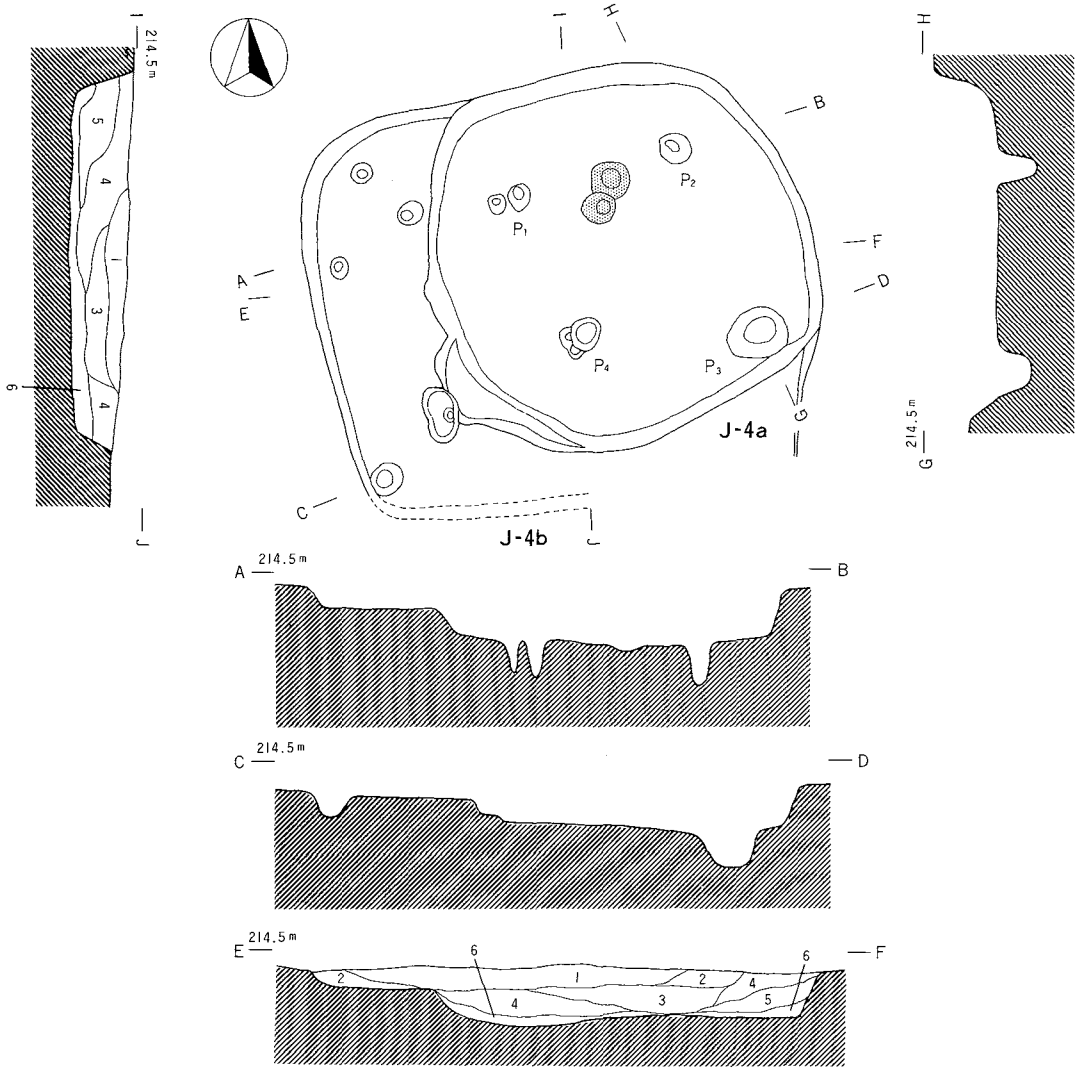
遺物出土状況

遺物は、少量しか検出されず、床面からはほとんど検出されなかった。しかし、出土遺物からみて縄文時代前期後半の住居と考えられる。

Ｊ－５号住居址・Ｊ－６号住居址・Ｊ－７号住居址・Ｊ－８号住居址（第21図）

Ａ－11・12、Ｂ－11・12・13、Ｃ－11・12・13グリッドに位置し、この４軒の住居址が重複していて、重複関係の確認は非常に困難を極めた。

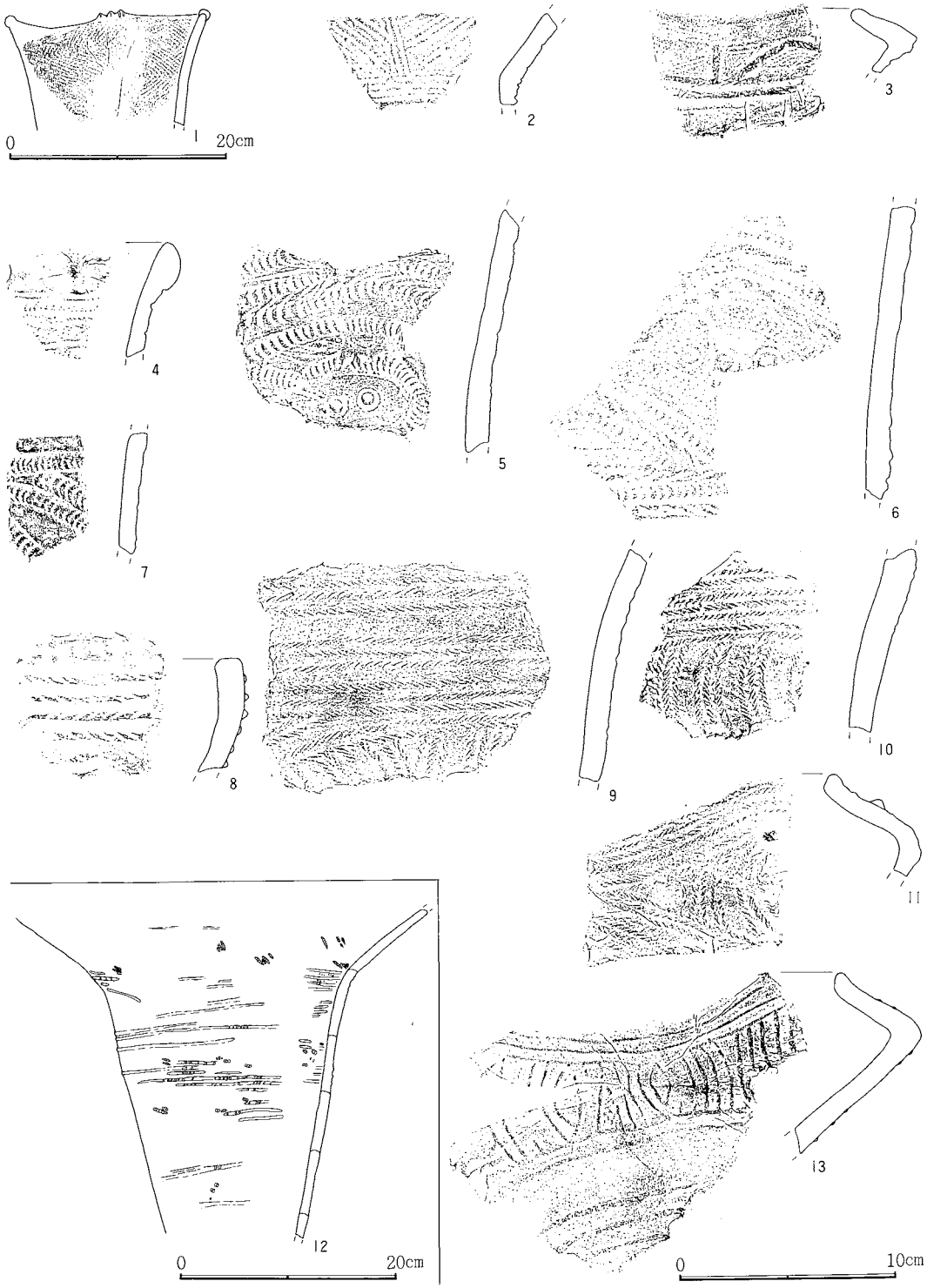
出土遺物に関しても、各住居址の遺物が混在していると思われる。また、これらの住居の床面に接して検出された遺物はなく、住居廃絶後に廃棄された遺物と思われる。しかし、床面付近まで遺物が確認されているため、住居廃絶後余り時間をおかずに廃棄されているものと考えられる。



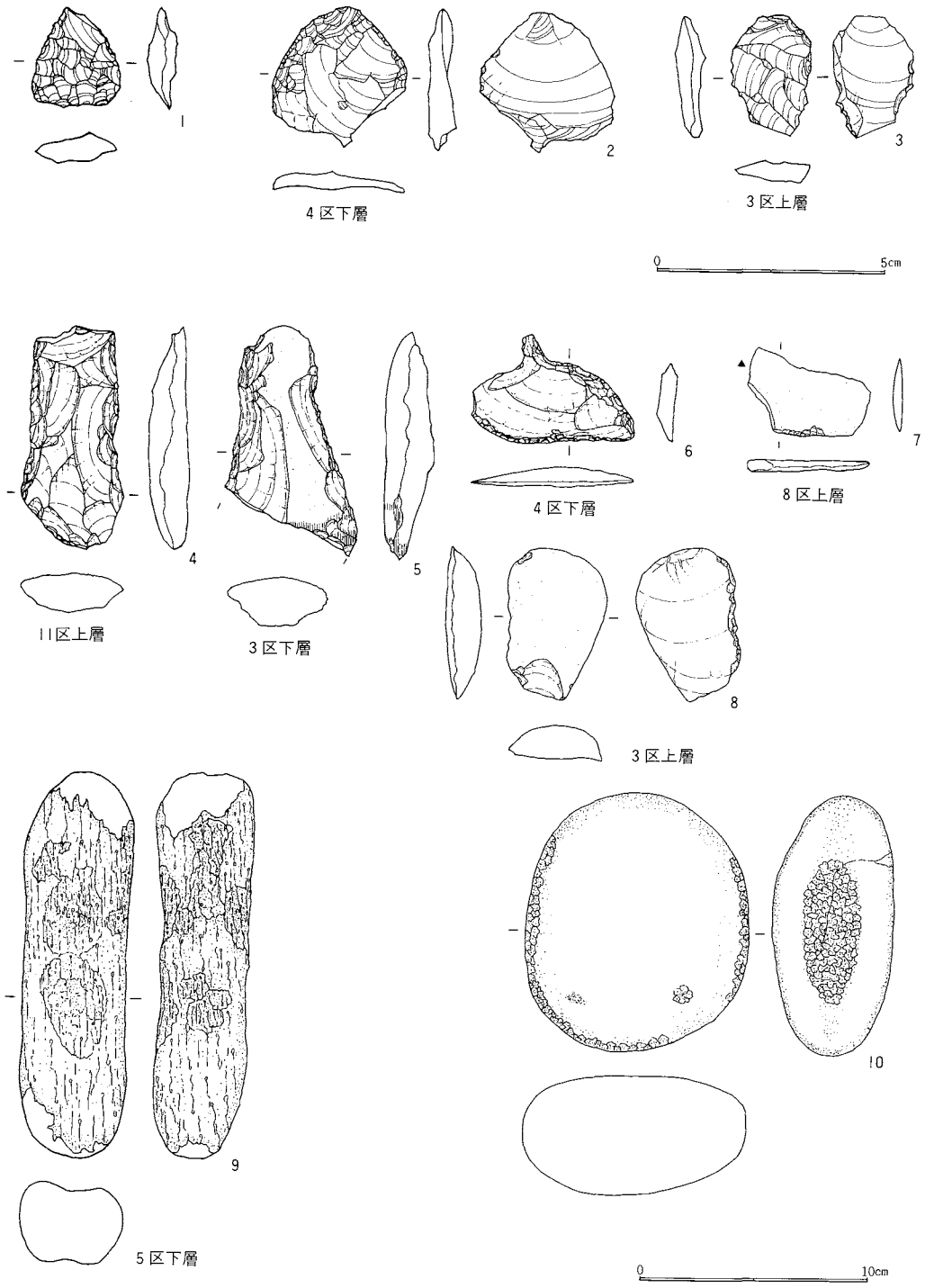
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 Y・P	混入物 R・P
1	黒褐色土層		◎	○	○	○	
2	暗褐色土層		△	△		○	
3	黒褐色土層	1>3	◎	○	△	△	
4	暗黄褐色土層		◎	○	○	○	
5	〃	4<5	◎	○	○	○	
6	〃		○	○		○	○

0 4m

第18図　J－4a・4b号住居址実測図



第19図　J－4a号住居址出土の土器



第20図　J－4a号住居址出土の石器

Ｊ－５号住居址

東壁が調査区外になり切れてしまうが、住居址の平面形はほぼ円形で、規模は約６ｍ×５ｍ90cm、周壁は南側約半分が確認され、深いところで約40cmを計る。

主柱穴は５本と考えられるが、この５本の主柱穴の他にも、掘り込みのしっかりとした柱穴が存在するため、柱の立替があったことも考えられる。また周壁に沿って小さめの柱穴が回ることから、壁沿いに補助柱があったものと思われる。

炉址は住居ほぼ中央に位置し、規模が約１ｍ５cm×90cmの石囲い炉である。

遺物出土状況

遺物は、覆土上層から下層まで特に偏在性がなく多数出土している。またＪ－６、Ｊ－７号住居址の遺物も混在しているものと思われる。

土器（第22図）

この住居址からはＩ類、III類、Ｖ類、VI類、VII類、VIII類の土器片が約500点出土した。その中でＩ類土器は点数も少なく流れ込みと思われる。主体を占めるのはIII、VII、VIII類で、VII類、VIII類は覆土上層から下層にかけて、III類は特に覆土下層を中心に出土している。

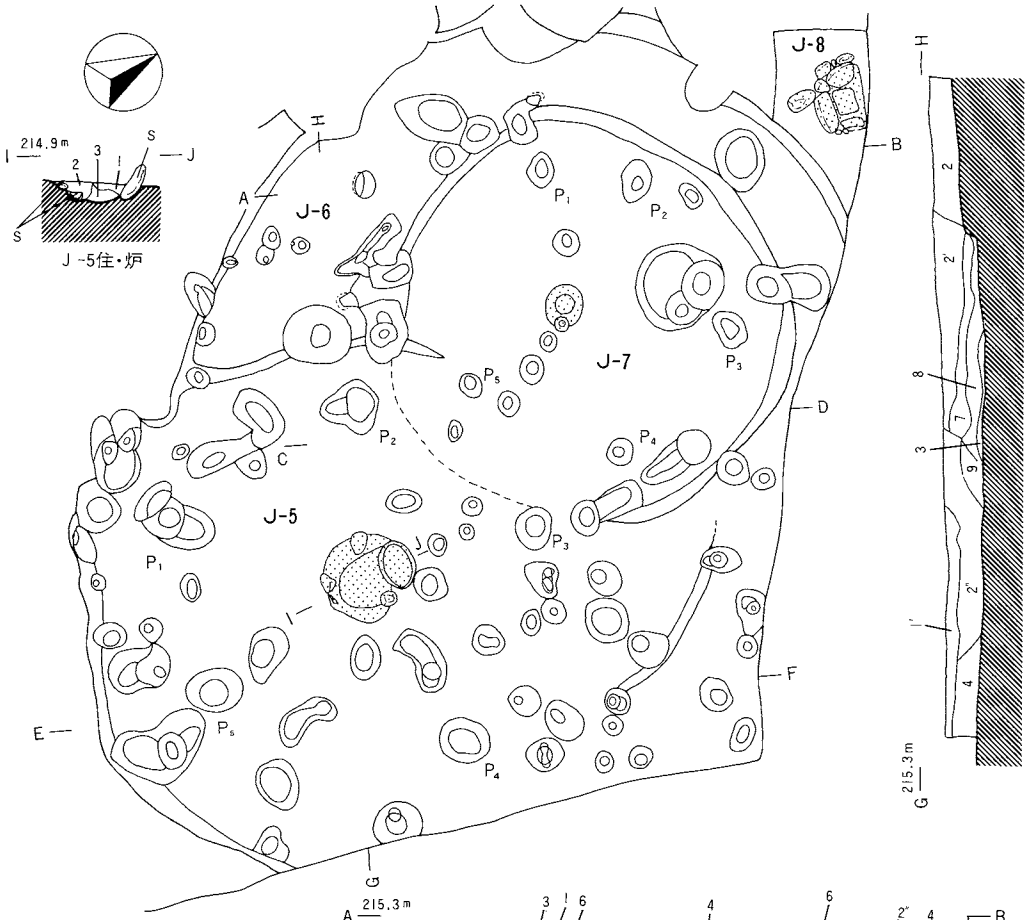
石器（第23図・第24図）

狭義の石器は174点検出されており、第５表のとおりである。このＪ－５号住居址とＪ－６、Ｊ－７、Ｊ－８号住居址は重複関係にあるので、これらの住居址の石器が混在している可能性がある。ここではとりあえず位置関係から各住居毎に分離して記述することにする。

Ａ類としては、石鏃(1～3)、石錐(4)、石匙(12)、スクレイパーＡ類(5･6･9)、ピエス・エスキーユ(7･8)、リタッチド・フレイクＡ類がある。Ｂ類としては、打製石斧(10･

	器種	Ob	Ch	Sh		計
Ａ類	石鏃	9				9
	石錐	1				1
	石匙			2		2
	スクレイパーＡ	12	1			13
	ピエス・エスキーユ	8				8
	Ｒ・Ｆ・Ａ	19				19
	小計	49	1	2		52
Ｂ類		Sh	An	GAn	KH	
	打製石斧	40	9	1	4	54
	スクレイパーＢ	20	1			21
	小計	60	10	1	4	75
Ｃ類		An	砂岩	KH		
	凹石	18				18
	磨石	7				7
	敲石	2				2
	石皿	2		2		4
	砥石	5	4			9
	小計	34	4	2		40
Ｄ類		KH				
	棒状礫	3				3
	小計	3				3
Ｅ類		玄武岩系				
	磨製石斧	4				4
	小計	4				4
	合計	150	15	5	4	174

第５表　Ｊ－５号住居址石器組成表



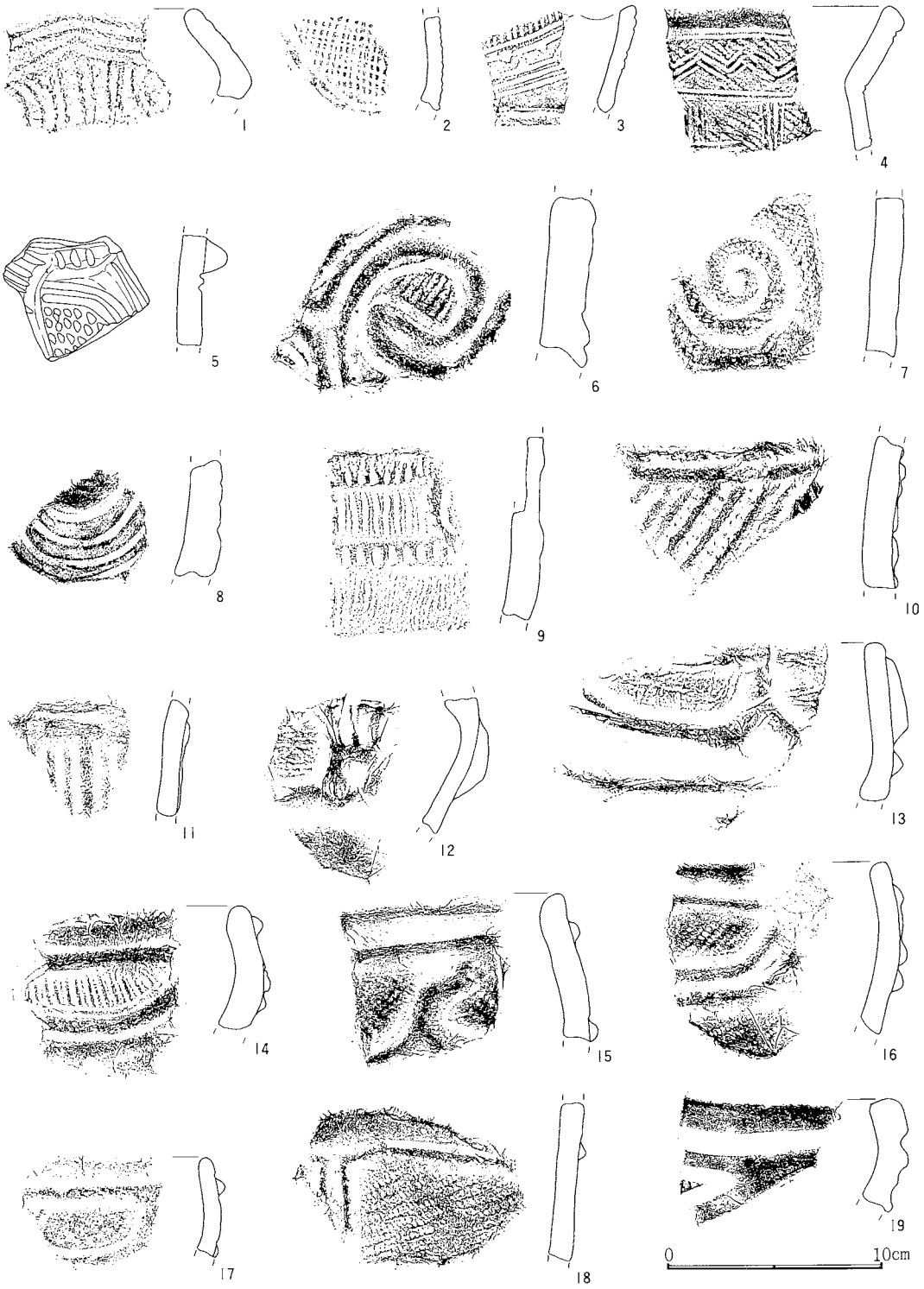
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 Y・P	混入物 R・P	備考
1	黒褐色土層		○	○	※		
2	暗黄褐色土層	1<2	○	○	※		S・P混入
3	〃	2<3	○	○	○	※	

J－5住・炉土層説明

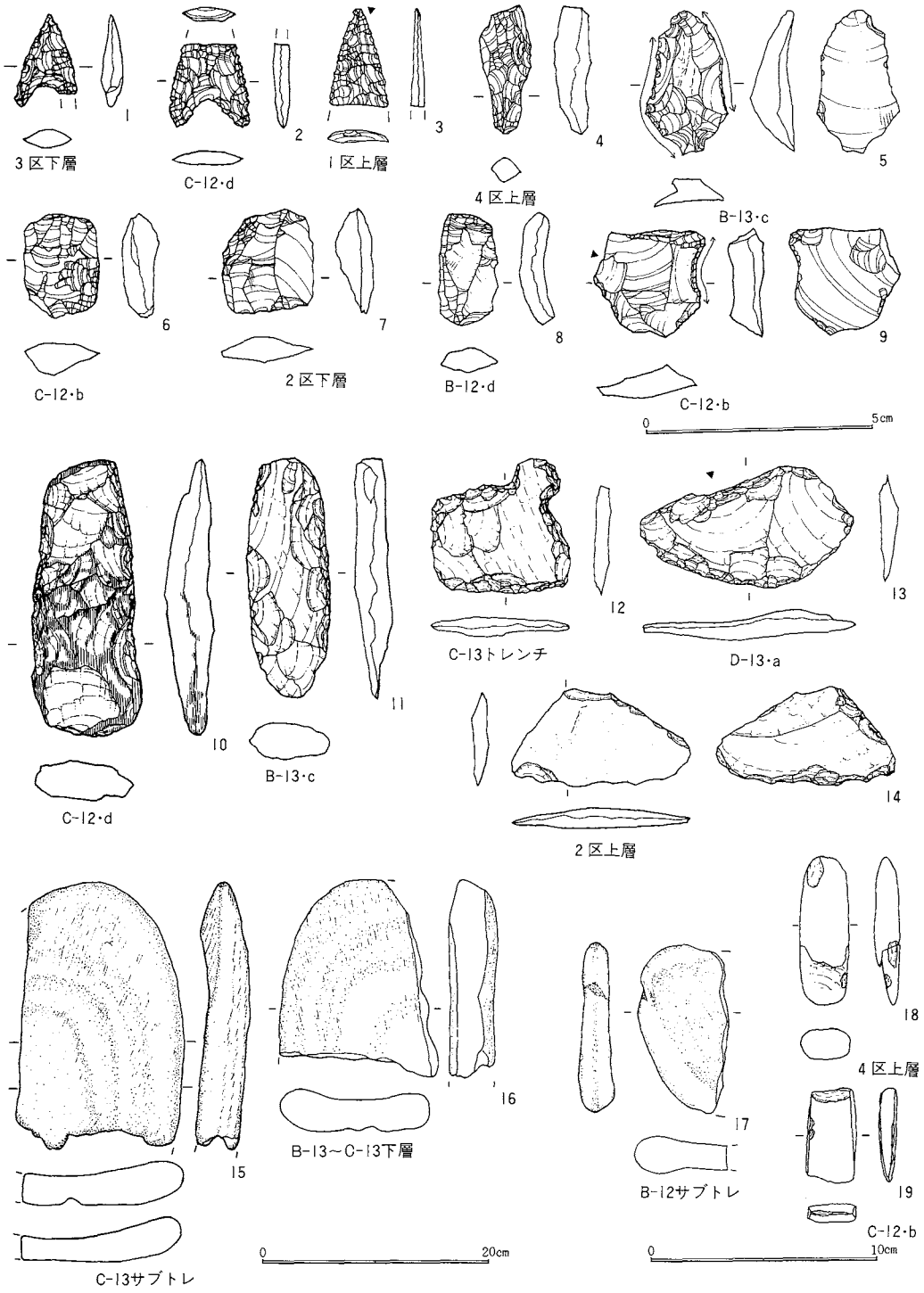
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 Y・P	混入物 R・P
1	暗褐色土層		○	○	△	△	△
1'	〃	1>1'	○	○	△	△	△
2	〃	1>2	○	○	△	○	△
2'	〃	2>2'	○	○	△	○	△
2"	〃	2'>2"	○	○	△	△	△
3	暗黄褐色土層		○	○	△		○
4	暗褐色土層	2>4	○	○	△	△	※
5	〃		△	○	△	△	
6	黒褐色土層		△	△	△		
7	暗黄褐色土層	3<7	△	△	△	○	△
8	〃	7>8	△	△	△	○	△
9	〃	8>9	○	○	△	○	
10	褐色土層		○	○	△		

0　　4m

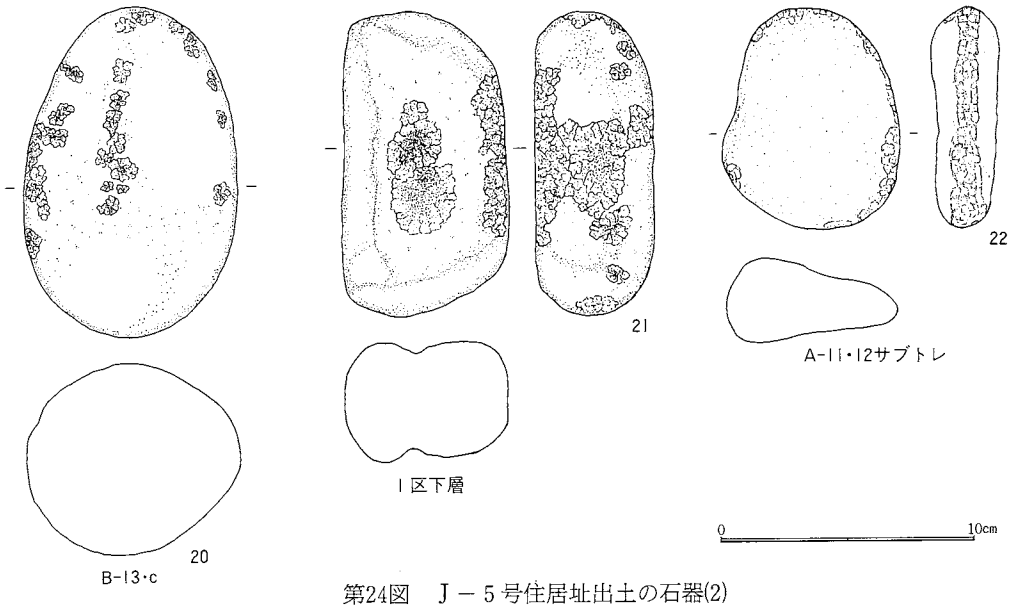
第21図　J－5・6・7・8号住居址実測図



第22図　J－5号住居址出土の土器



第23図　J－5号住居址出土の石器(1)



第24図　J－5号住居址出土の石器(2)

11)、スクレイパーB類(13・14)がある。また、C類としては、凹石(21)、磨石(20)、敲石(22)、石皿(15・16)、砥石(17)がある。D類としては、結晶片岩製の棒状礫がある。そして、E類としては、磨製石斧(18・19)が検出されている。

この中で、11の打製石斧は刃部が円形を呈し、やや尖頭状となるものであり、この遺跡からは一つだけ検出されている。

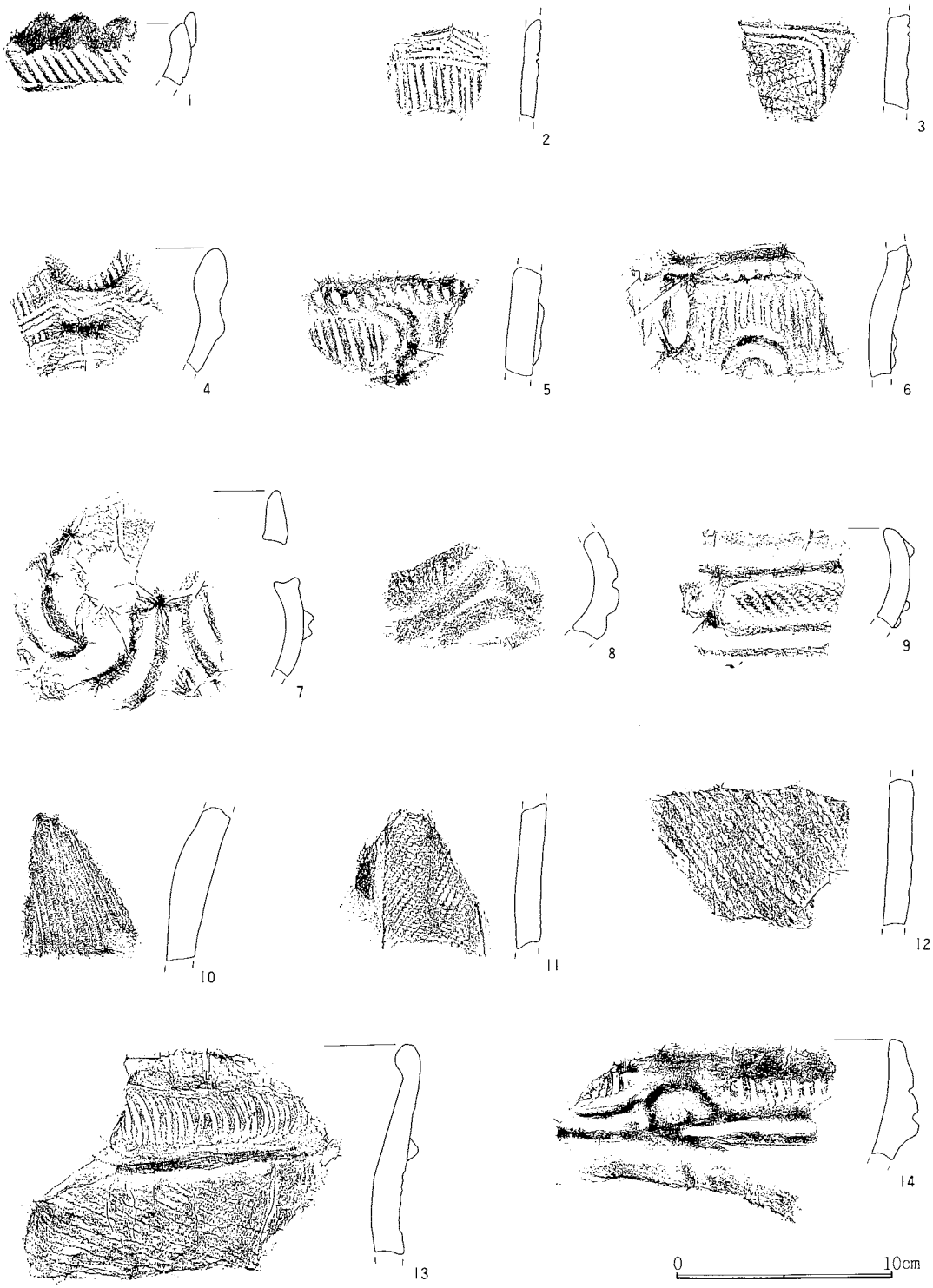
J－6号住居址

D－1、D－3号土壙と重複し、J－5号住居址、J－7号住居址に切られているが、住居址の平面形はほぼ円形を呈すると思われる。

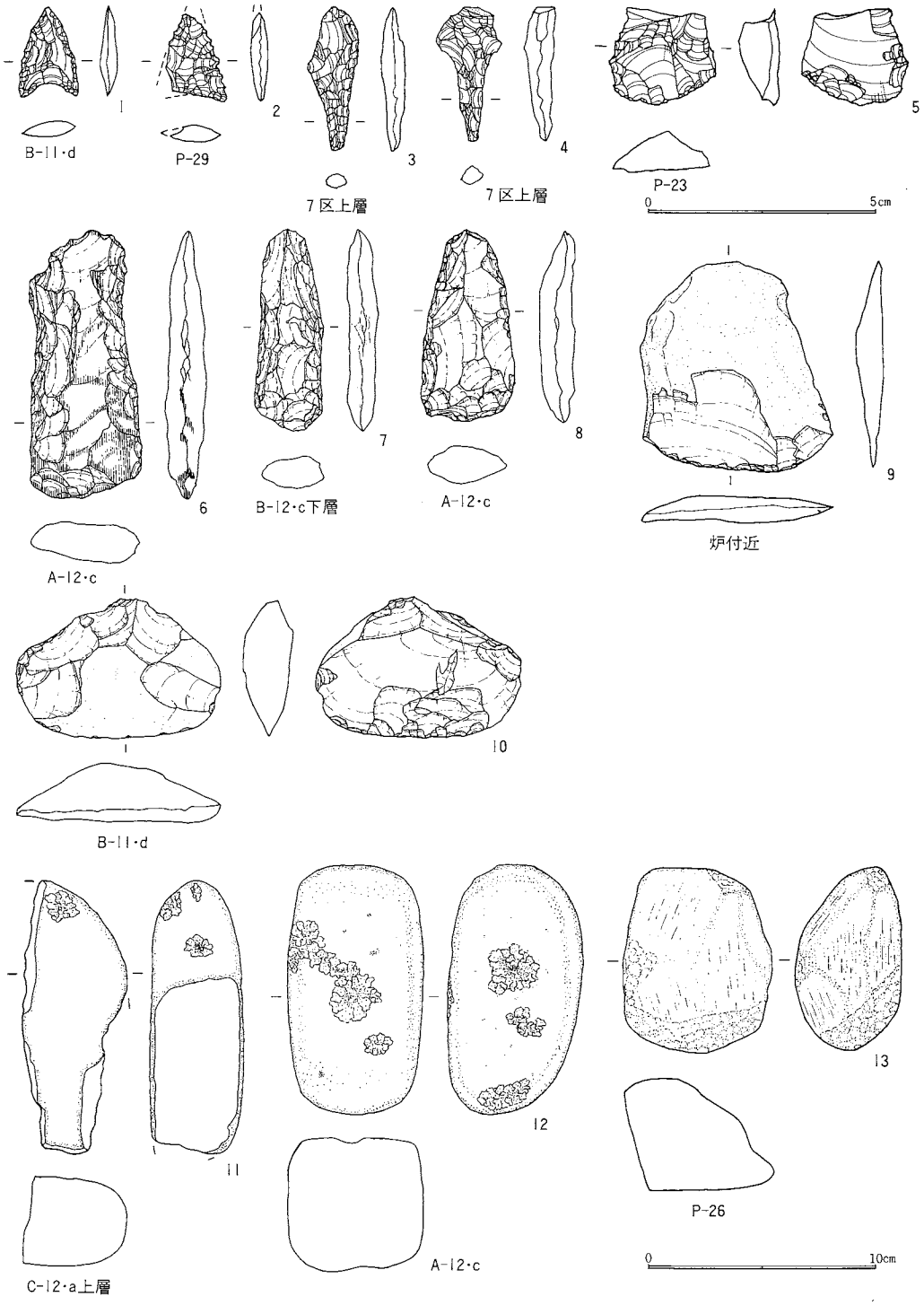
主柱穴、炉址共に、J－7号住居址に中央部分を切られてしまっているため確認することができなかった。

遺物出土状況

遺物は、住居を半分以上切られてしまっているため、少量検出された。J－5、J－7号住居址にも遺物が混在しているものと思われる。



第25図　J－6号住居址出土の土器



第26図　J－6号住居址出土の石器

土器（第25図）

この住居址からはⅢ類、Ⅶ類、Ⅷ類の土器片が約200点、覆土上層から下層にかけて出土した。Ⅲ類、Ⅶ類、Ⅷ類共出土レベルに上下差はないが、数量的にⅦ類、Ⅷ類がⅢ類に比べやや多い。

石器（第26図）

狭義の石器は58点検出されている。内訳は第６表のとおりである。Ａ類としては、石鏃(1･2)、石錐(3･4)、スクレイパーＡ類(5)、ピエス・エスキーユ、リタッチド・フレイクＡ類がある。Ｂ類としては、打製石斧(6～8)、スクレイパーＢ類(9～10)、その他の打製石器がある。また、Ｃ類としては、凹石(12)、磨石(11)、砥石(13)がある。Ｄ類としては、結晶片岩製の棒状礫が検出されている。

	器種	Ob			計
A類	石鏃	3			3
	石錐	2			2
	スクレイパーA	8			8
	ピエス･エスキーユ	2			2
	R・F・A	4			4
	小計	19			19
B類		Sh	An		
	打製石斧	14	2		16
	スクレイパーB	11			11
	その他	1			1
	小計	26	2		28
C類		An	砂岩	凝灰岩	
	凹石	1			1
	磨石	1			1
	砥石	3	1	1	5
	小計	5	1	1	7
D類		KH			
	棒状礫	4			4
	小計	4			4
	合計	54	3	1	58

第６表　Ｊ－６号住居址石器組成表

このうち、13の砥石は側縁部に顕著な敲打痕があり、敲石としても利用されていたとみられる。

Ｊ－７号住居址

Ｊ－５号住居址と東側の周壁の一部を重複しているが、住居址の平面形はほぼ円形と思われる。

主柱穴は５本と考えられるが、壁に沿って柱穴が数本回るため、この柱穴も当住居に関係しているものと思われる。

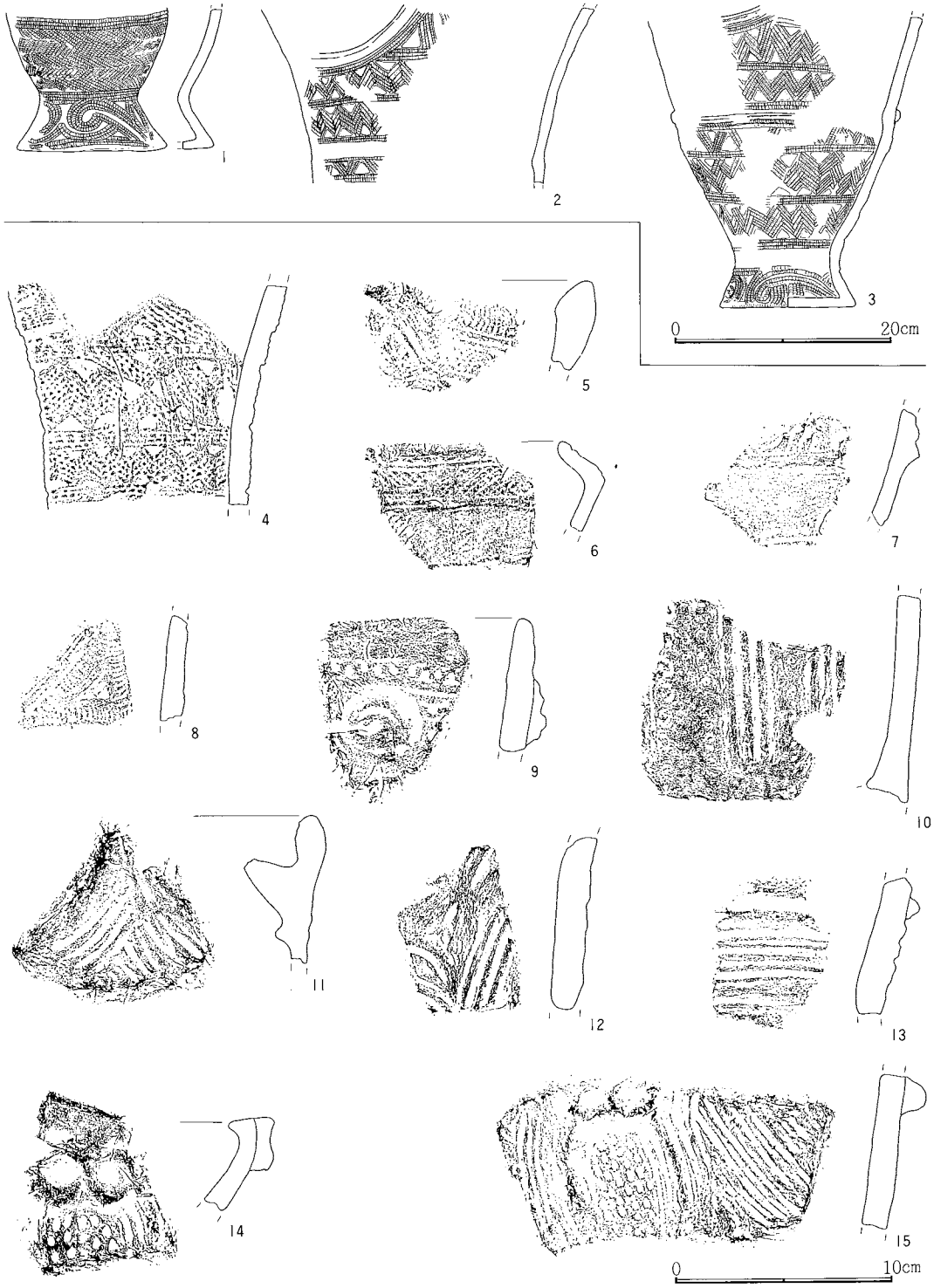
炉址は焼土などの確認ができなかったが、住居址中央部分の掘り込みと思われる。

遺物出土状況

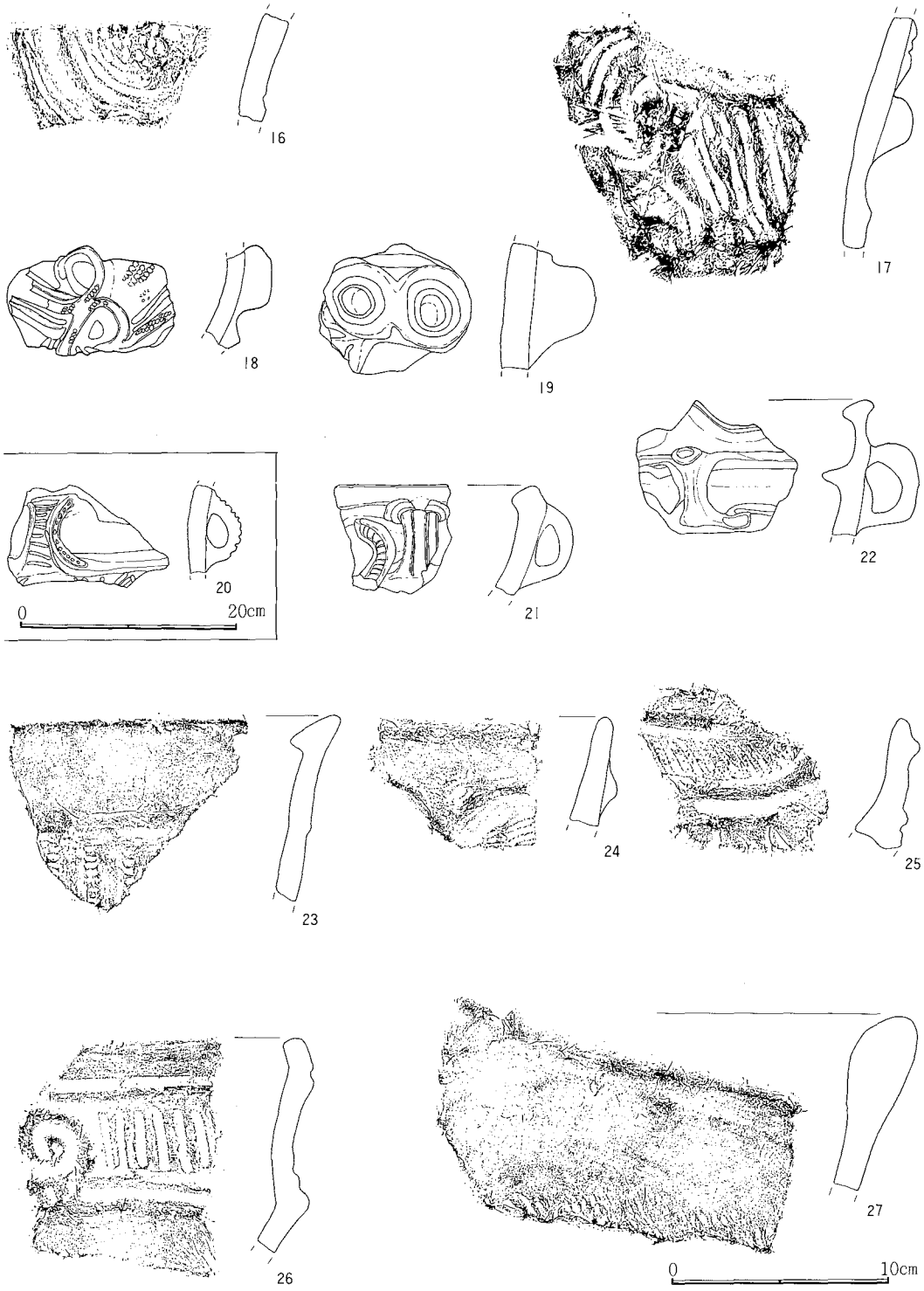
遺物は、Ｊ－５号住居址同様偏在性なく覆土上層から下層まで多数出土し、Ｊ－５、Ｊ－６号住居址の遺物も混在していると思

	器種	Ob			計
A類	石鏃	5			5
	スクレイパーA	8			8
	ピエス･エスキーユ	2			2
	R・F・A	12			12
	小計	27			27
B類		Sh	An	KH	
	打製石斧	14	1	5	20
	スクレイパーB	4	1		5
	その他	1			1
	小計	19	2	5	26
C類		An	KH		
	凹石	7			7
	磨石	6			6
	砥石	1	1		2
	小計	14	1		15
	合計	60	3	5	68

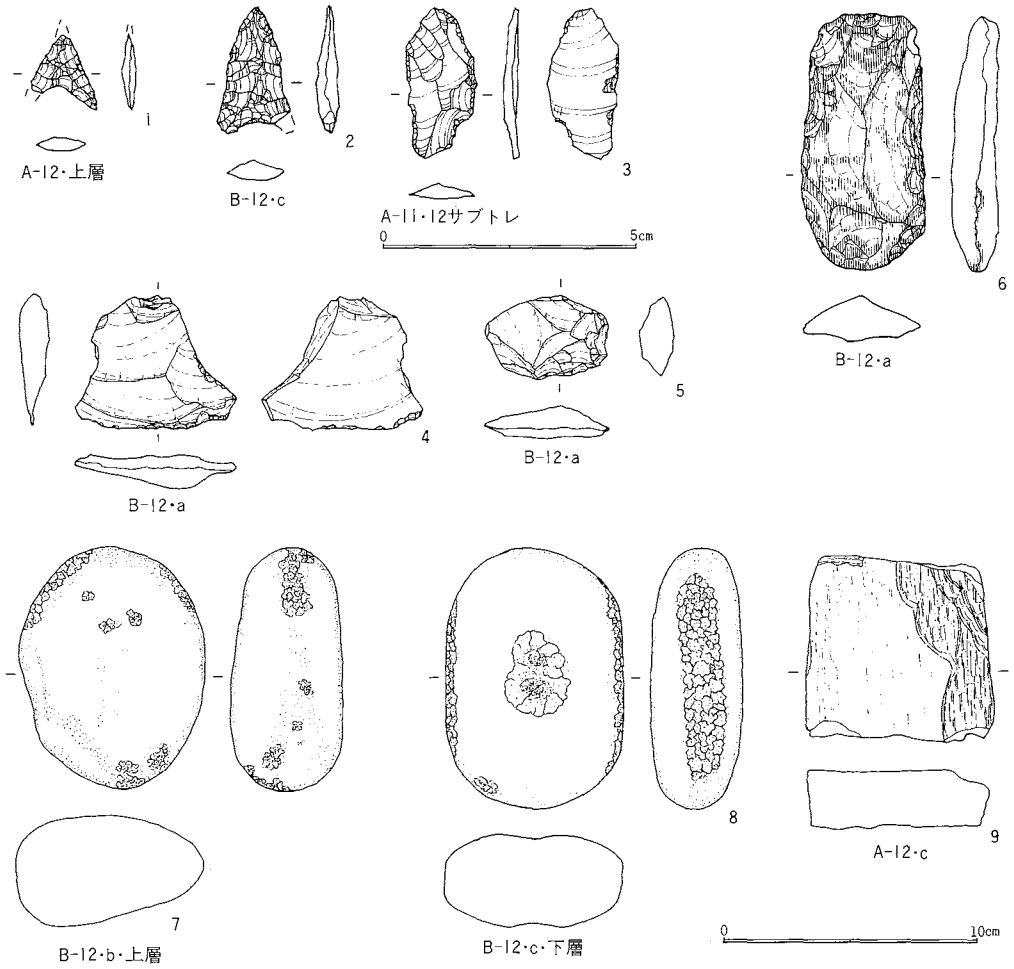
第７表　Ｊ－７号住居址石器組成表



第27図　J－7号住居址出土の土器(1)



第28図　J－7号住居址出土の土器(2)



第29図　J－7号住居址出土の石器

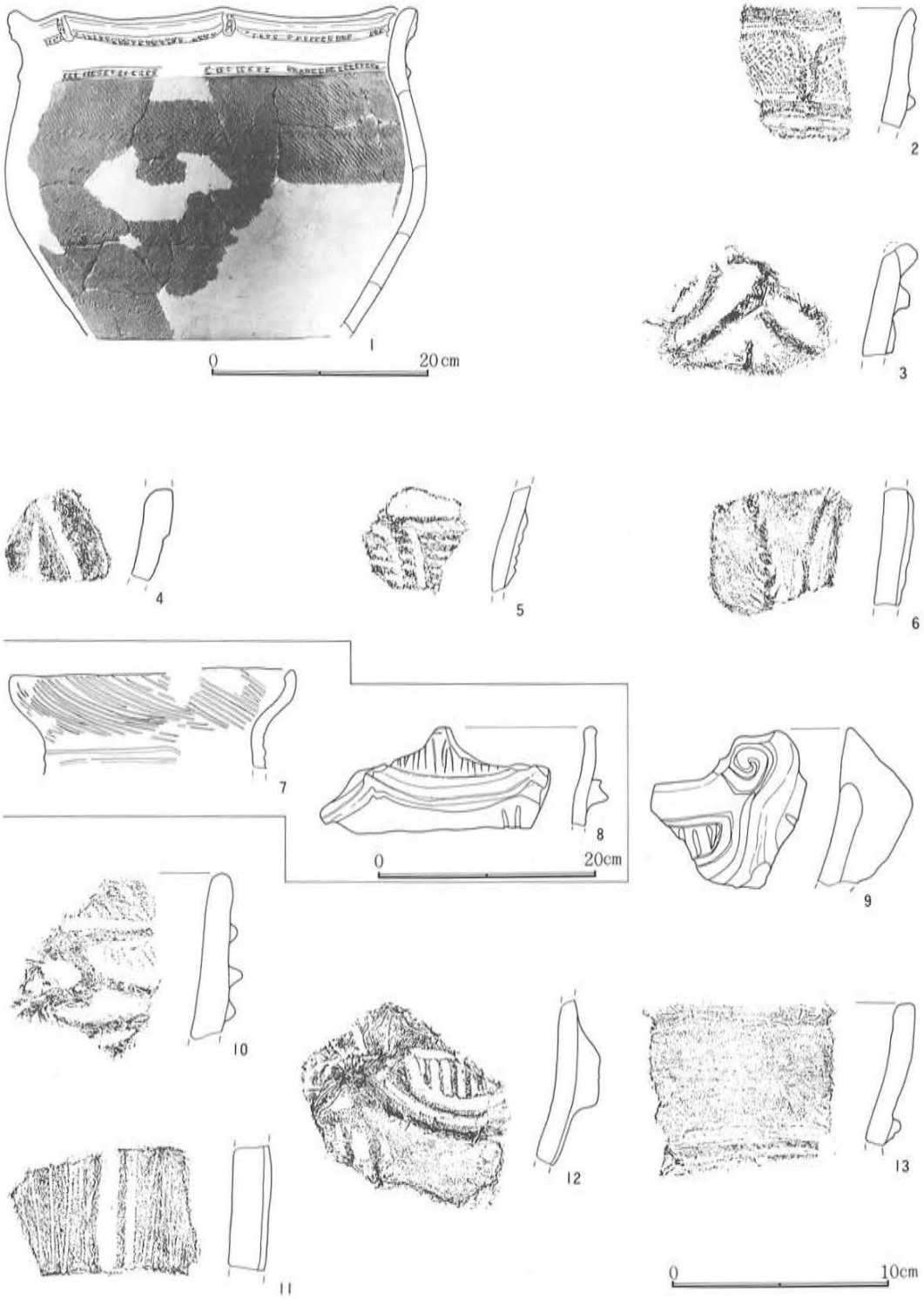
われる。

土器（第27図・第28図）

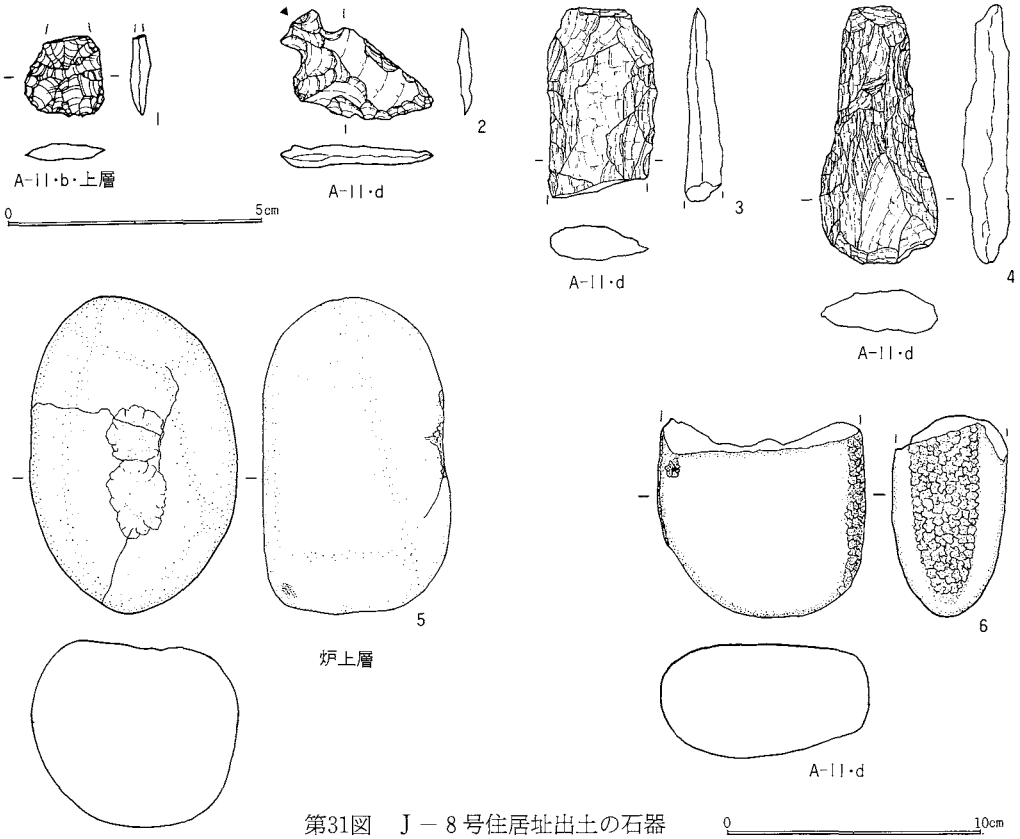
この住居址からはII類、III類、IV類、V類、VI類、VII類、VIII類の土器が約600点出土した。主体を占めるのはV類、VII類、VIII類の土器であり、覆土下層を中心に多数出土している。J－5とJ－7号住居址とはレベル的にも差がなく、新旧関係がはっきりとしなかったが、出土土器の構成を見るかぎりJ－7号住居址の方が古いと考えられる。

石器（第29図）

狭義の石器は68点検出されており、内訳は第7表のとおりである。A類としては、石鏃(1・2)、スクレイパーA類(3)、ピエス・エスキーユ、リタッチド・フレイクA類がある。B類としては、打製石斧(6)、スクレイパーB類(4・5)、その他の打製石器がある。また、C類としては、凹石(8)、磨石(7)、砥石(9)がある。



第30図　J－8号住居址出土の土器



第31図　J－8号住居址出土の石器

9の砥石は結晶片岩製で、きめが細かい仕上砥である。

J－6号住居址またはJ－7号住居址出土の石器

出土位置からJ－6号住居址またはJ－7号住居址のいずれかに属すると考えられる石器は、第8表のとおりである。これらの石器を含めると、住居址の石器組成に変動をきたすことになる。

	器種	Ob	Ch	Sh	計
A類	石錐	2	1		3
	石匙			2	2
	スクレイパーA	4			4
	R・F・A	9			9
	小計	15	1	2	18
B類		Sh	An	GAn	
	打製石斧	9	1	1	11
	スクレイパーB	7			7
	その他	1			1
	小計	17	1	1	19
C類		An			
	凹石	2			2
	磨石	1			1
	小計	3			3
	合計	35	2	3	40

第8表　J－6・7号住居址石器組成表

J－8号住居址

床面もあまり硬くなく、ローム面まで掘り込まれておらず、J－6号住居址、J－7号住居址等と重複していたため、炉址とその周辺の床面一部分の確認に終った。

炉址は北側の一部分が調査区外であったが、今回の調査中一番しっかりとしたほぼ正方形の石囲い炉であった。規模は約75cm×60cmである。

土器（第30図）

この住居址からはⅢ類、Ⅴ類、Ⅵ類、Ⅷ類の土器片が出土した。

石器（第31図）

この住居址に属すると推定される石器は12点と少なく、内訳は第９表のとおりである。この住居址は炉址のみ確認された住居なので、石器組成上は器種が大きく欠落している。また、重複するＪ－６、Ｊ－７号住居址のものも含まれていると推定される。

検出された石器は、Ａ類では石鏃(1)、石匙(2)、ピエス・エスキーユ、Ｂ類では打製石斧(3・4)、その他の打製石器である。また、Ｃ類では、凹石(5)、磨石(6)がある。このうち、４の打製石斧は結晶片岩製である。

	器種	Ob	Sh		計
A類	石鏃	1			1
	石匙		1		1
	ピエス・エスキーユ	1			1
	小計	2	1		3
B類		Sh	An	KH	
	打製石斧	3	1	1	5
	その他	1			1
	小計	4	1	1	6
C類		An			
	凹石	1			1
	磨石	2			2
	小計	3			3
	合計	9	2	1	12

第９表　Ｊ－８号住居址石器組成表

Ｊ－９号住居址（第32図）

Ｊ－６・７・８、Ｋ－６・７・８グリッドに位置し、土壙及びＪ－10号住居址と重複し、東側は一部調査区外となる。

住居址の平面形は、東側と南側の壁がはっきりと確認できなかったが不正円形と思われ、規模は約７m70cm×６m50cmと推測される。周壁は深いところで40cmを計る。

柱穴は十数基確認されたが、主柱穴を特定することはできなかった。

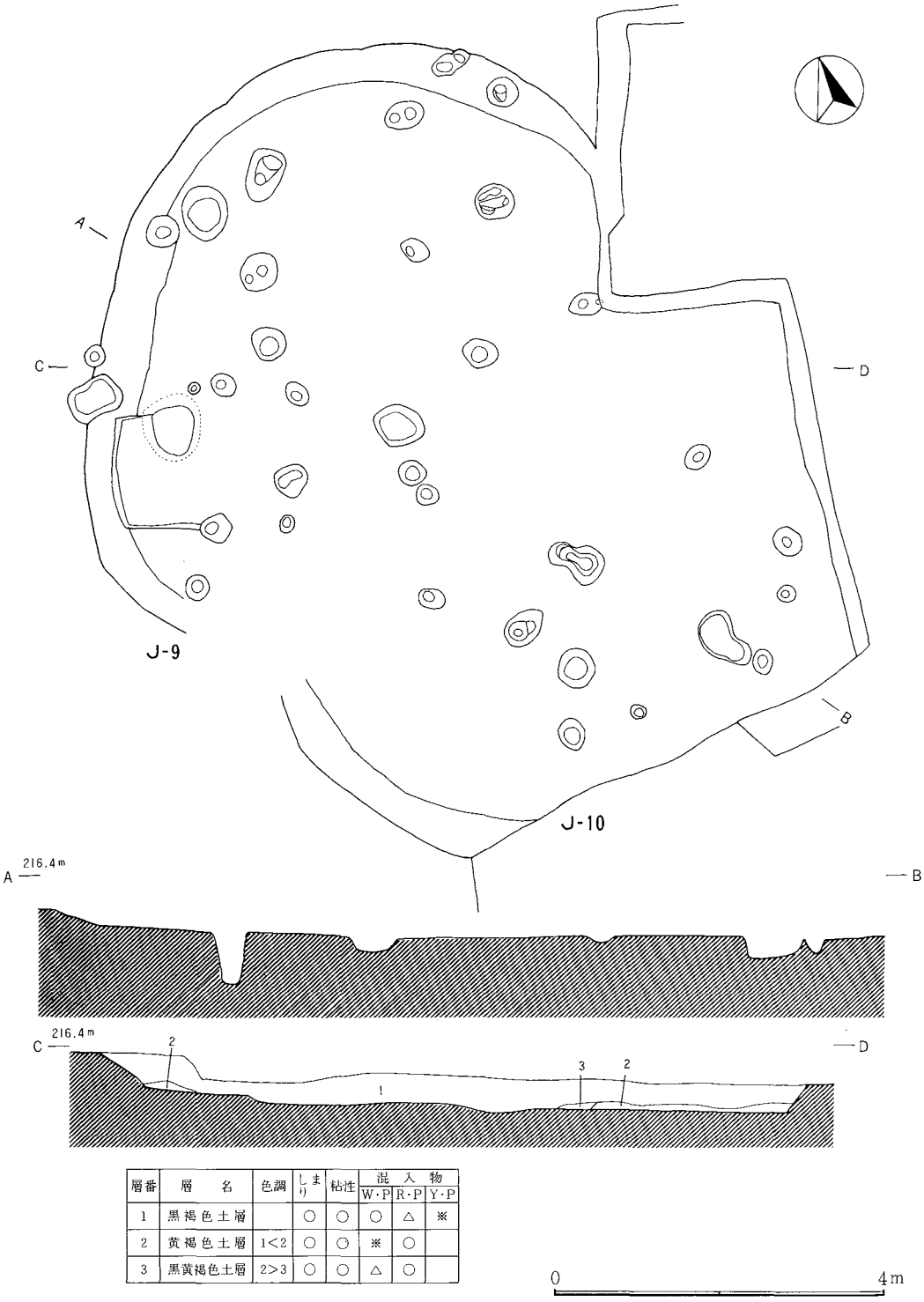
炉址は、焼土もなく炉址と思われる掘り込みもなく確認できなかった。

遺物出土状況

住居址全体から偏在性なく多数検出された。覆土は３層に分かれるが大部分を第１層が覆い、遺物は全てこの層の上層から下層で出土している。しかし、明確に床面に接して出土した遺物は確認できなかったため、住居廃絶後に廃棄されたものと思われる。また、Ｊ－10号住居址の遺物も混在しているものと思われる。

土器（第33図・第34図）

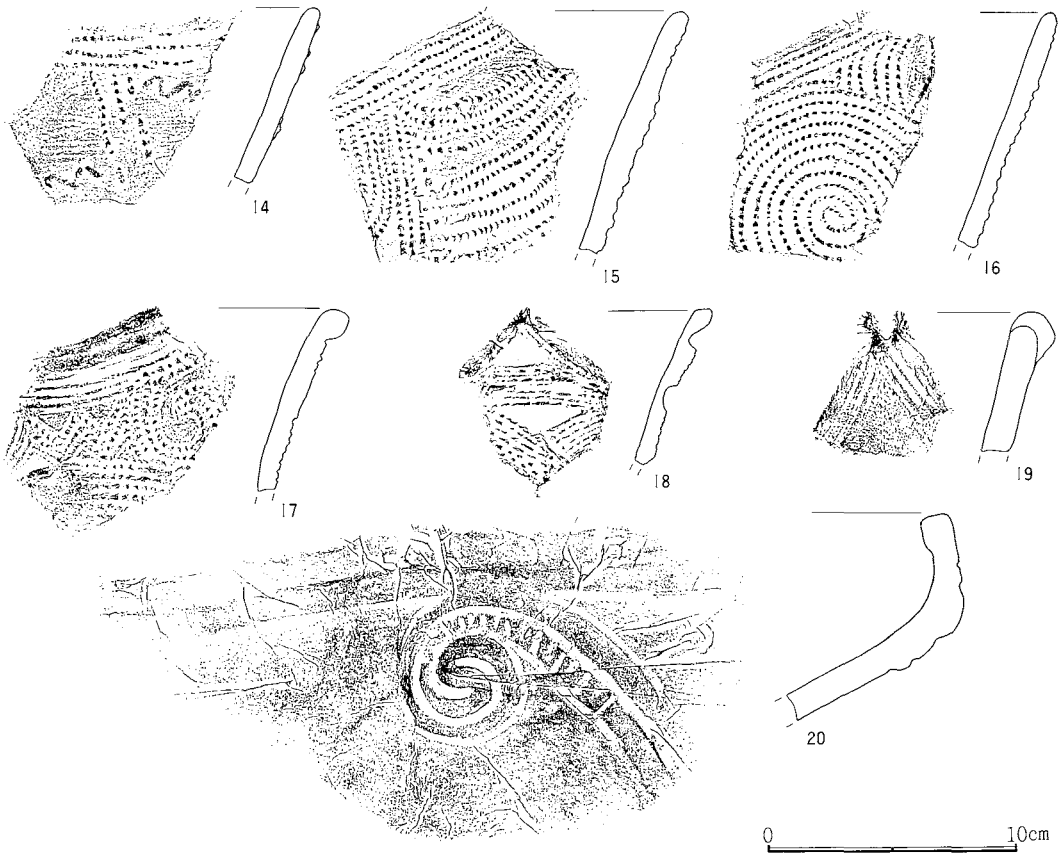
この住居址からはⅠ類、Ⅲ類、Ⅴ類の土器片が約450点出土した。80％がⅠ類の土器で、特に下



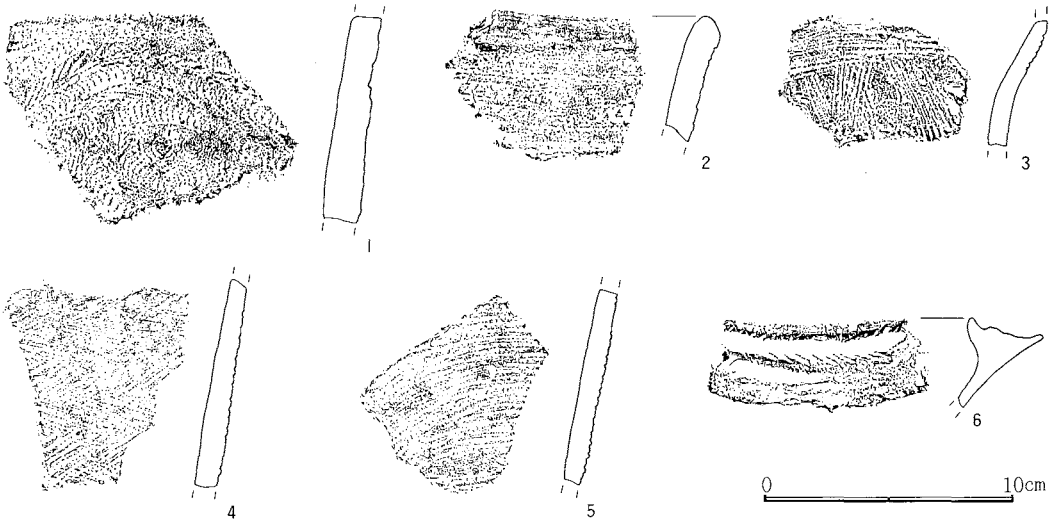
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物		
					W・P	R・P	Y・P
1	黒褐色土層		○	○	○	△	※
2	黄褐色土層	1<2	○	○	※	○	
3	黒黄褐色土層	2>3	○	○	△	○	

第32図　J－9・10号住居址実測図

第33図　J－9号住居址出土の土器(1)



第34図　J－9号住居址出土の土器(2)



第35図　J－10号住居址出土の土器

層に集中して出土した。Ⅲ類、Ⅴ類の土器は数量も少なく流れ込みの可能性が強い。

石器（第36図・第37図）

狭義の石器は65点であり、内訳は第10表のとおりである。D類とE類の器種は存在しない。特に結晶片岩製の石器は石皿に1点存在するだけで、結晶片岩を用いる割合はきわめて低い。

A類では、石鏃(1・2)、石錐(3・4)、石匙(7・8)、スクレイパーA類 (5)、ピエス・エスキーユ(6)、リタッチド・フレイクA類がある。B類では、打製石斧(10)、スクレイパーB類(9・11・12)がある。また、C類では凹石(14)、磨石(13)、敲石(16)、砥石(15)、台石(17)、石皿(18～20)がある。

このうち、7の石匙は刃部が湾曲する特殊な形態のものである。また、20の石皿は整った形態のもので、結晶片岩製である。

	器種	Ob	Sh		計
A類	石鏃	2			2
	石錐	4			4
	石匙		2		2
	スクレイパーA	9			9
	ピエス・エスキーユ	1			1
	R・F・A	8			8
	小計	24	2		26
		Sh			
B類	打製石斧	2			2
	スクレイパーB	6			6
	その他	1			1
	小計	9			9
C類		An	砂岩	KH	
	凹石	19			19
	磨石	5			5
	敲石	1			1
	石皿	1		1	2
	台石	1			1
	砥石	1	1		2
	小計	28	1	1	30
	合計	61	3	1	65

第10表　J－9号住居址石器組成表

J－10号住居址（第32図）

K－7・8・9、L－7・8グリッドに位置し、J－9号住居址、H－7号住居址と重複し、東側は一部調査区外となる。

住居址の平面形は南側の壁の一部しか確認できなかったため推測不可能である。

柱穴も数基確認しているが、主柱穴は不明である。

炉址も確認不可能であった。

遺物出土状況

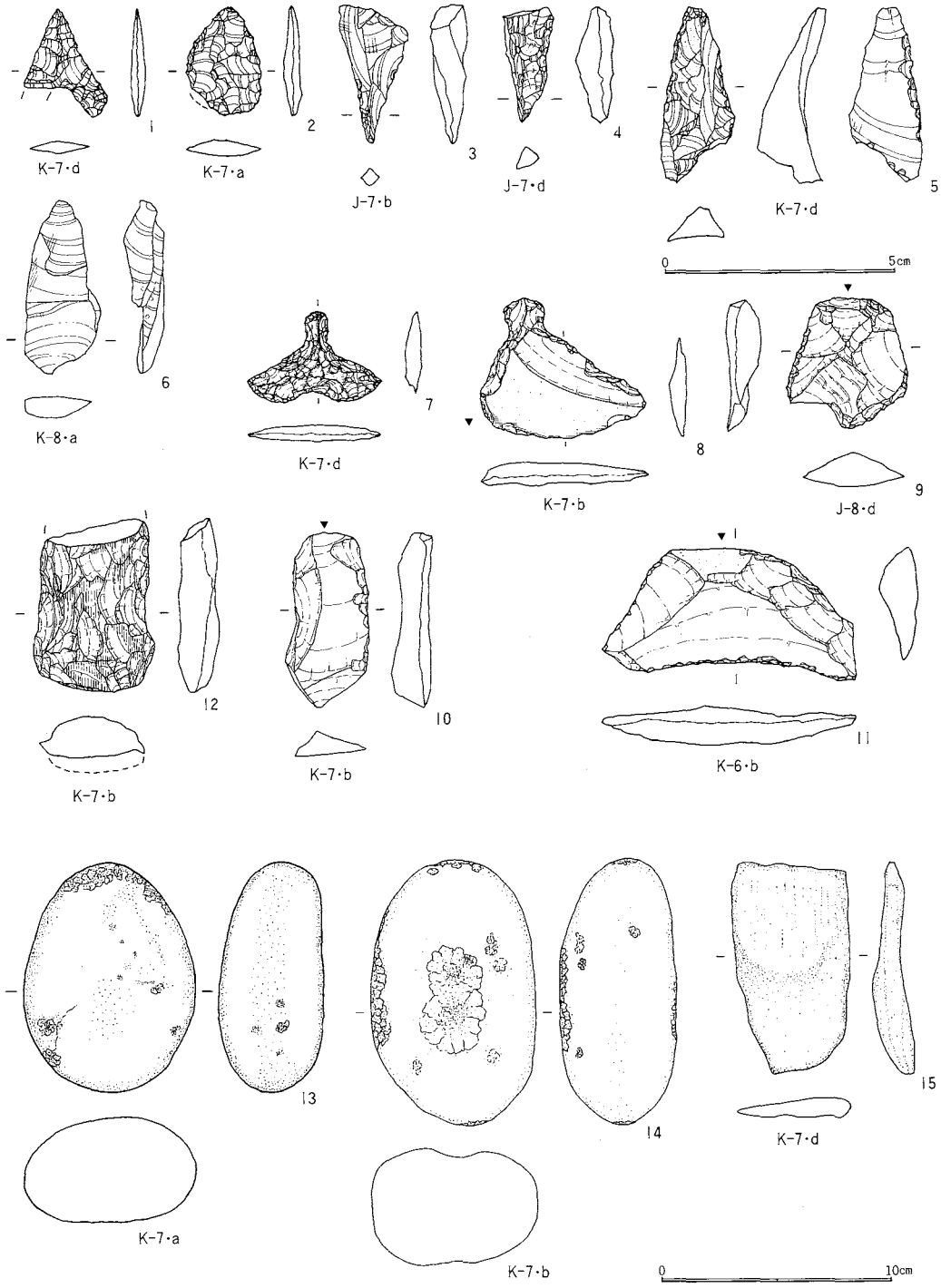
この住居址からは少量しか検出されなかった。遺物は特に偏在性なく住居址全体から検出された。床面から遺物が確認されなかったため、住居廃絶後に廃棄されたものと思われる。

土器（第35図）

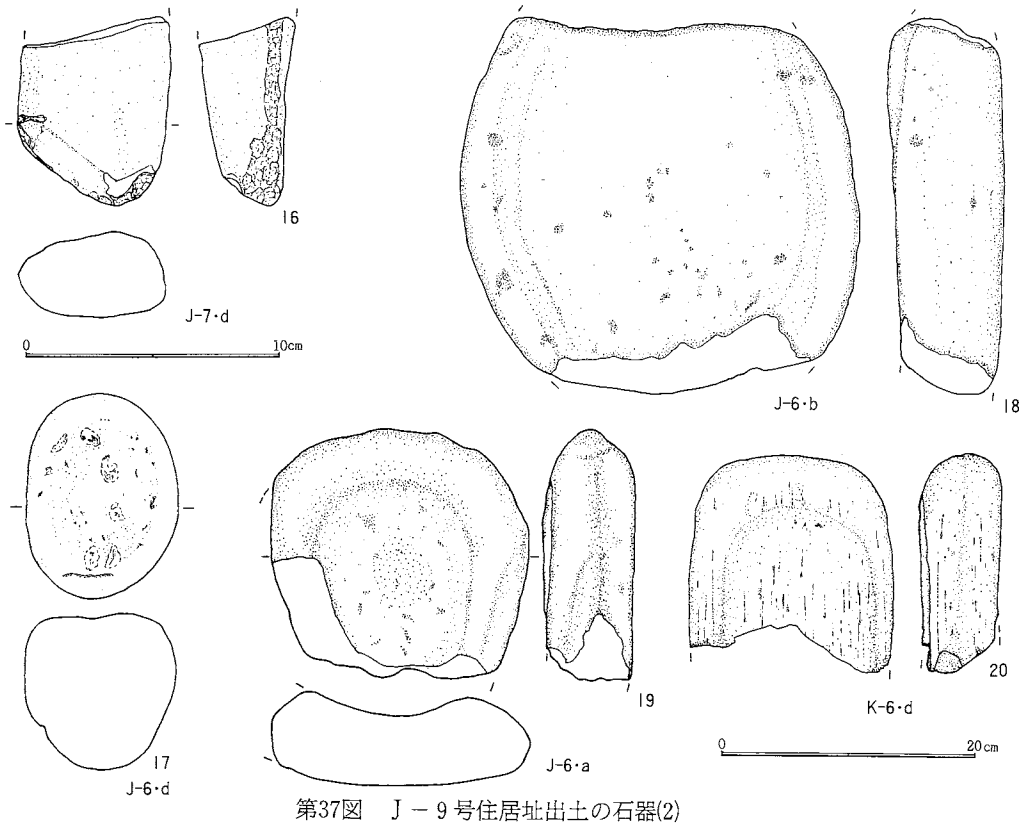
この住居址からはⅠ類土器が少量出土した。

石器（第38図）

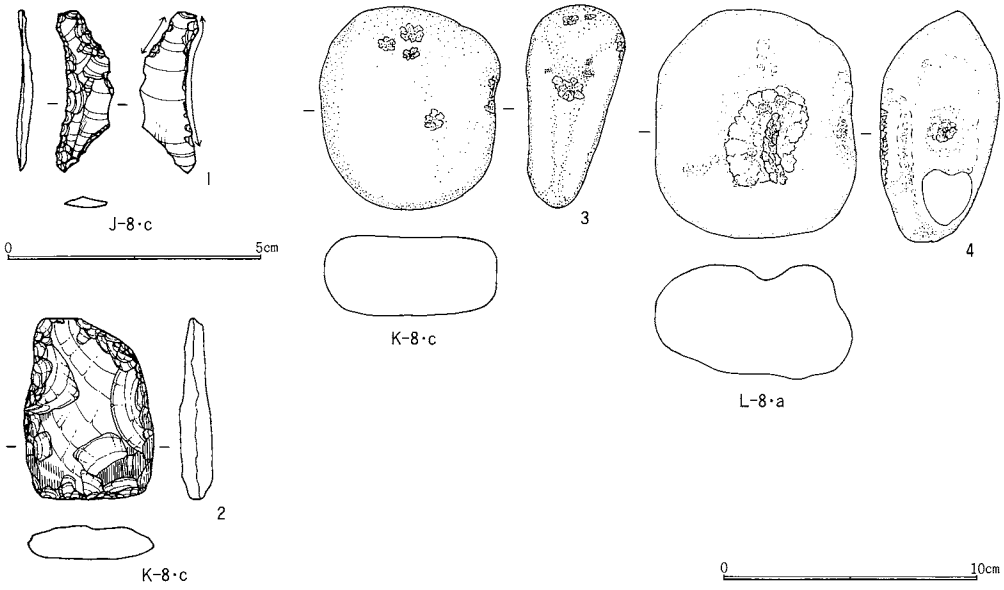
この住居址から検出された石器は少なく、16点である。内訳は第11表のとおりである。石器組成全体としては、石錐、石皿が欠落する程度で、住居が一時期に所有する石器組成に近い形で



第36図　J－9号住居址出土の石器(1)



第37図　Ｊ－９号住居址出土の石器(2)



第38図　Ｊ－10号住居址出土の石器

あると考えられる。なお、石皿はＪ－９号住居址のところに図示したものの中に、この住居址に属する可能性があるものが含まれている。

Ａ類では石鏃、スクレイパーＡ類(1)、リタッチド・フレイクＡ類がある。Ｂ類では、打製石斧(2)、スクレイパーＢ類がある。また、Ｃ類では、磨石(3)、凹石(4)、砥石がある。

	器種	Ob			計
A類	石鏃	1			1
	スクレイパーA	1			1
	R・F・A	2			2
	小計	4			4
B類		Sh	An		
	打製石斧	2			2
	スクレイパーB	3			3
	その他	1	1		2
	小計	6	1		7
C類		An	GAn	砂岩	
	凹石	1	1		2
	磨石	2			2
	砥石			1	1
	小計	3	1	1	5
	合計	13	2	1	16

第11表　Ｊ－10号住居址石器組成表

(2) 土　　壙

Ｄ－１号土壙（第39図）

Ｂ－11グリッドに位置し、Ｊ－６号住居址と重複する。

土壙の平面形はほぼ円形で、規模は約６m80cm×６m50cm、深さは約40cmを計る。

遺物出土状況

覆土中層から少量出土し、土器はⅠ類、Ⅷ類が出土している。

Ｄ－２号土壙（第39図）

Ｔ－15・16グリッドに位置し、Ｊ－２号住居址と重複する。

土壙の平面形は楕円形で、規模は約10m50cm×８m50cm、深さは約38cmを計る。

遺物出土状況

遺物は少量出土し、土器はⅧ類が出土した。

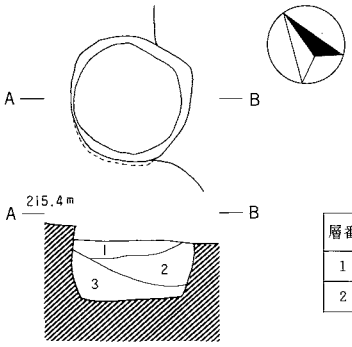
Ｄ－３号土壙（第39図）

Ｂ－11グリッドに位置し、Ｊ－６号住居址と重複する。

土壙の平面形はほぼ円形で、一部オーバーハングする。規模は約５m80cm×５m10cm、深さは約37cmを計る。

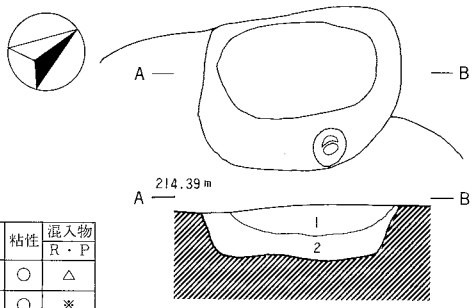
遺物出土状況

遺物は、覆土下層から中層にかけて少量出土し、土器はⅦ類、Ⅷ類が出土した。



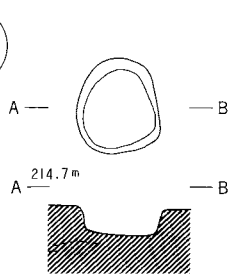
層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 Y・P	混入物 W・P	混入物 R・B
1	暗褐色土層		×	○	※	※	
2	〃	1<2	○	○	○	※	※
3	暗黄褐色土層	2<3	○	○	○		※

D-1号土壙

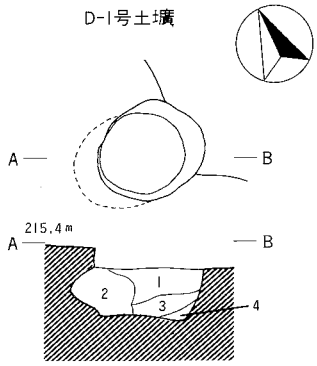


層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 R・P
1	暗褐色土層		◎	○	△
2	黒褐色土層	1>2	◎	○	※

D-2号土壙

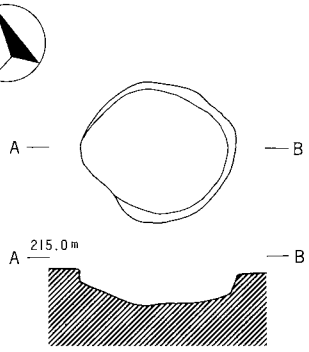


D-4号土壙

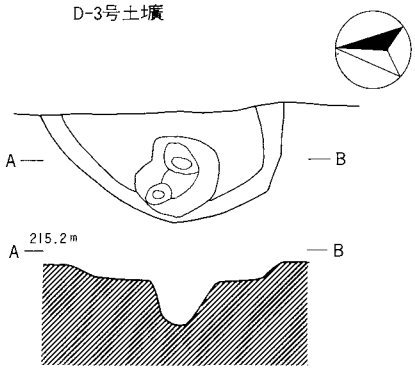


層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 Y・P	混入物 W・P
1	暗黄褐色土層		○	○	△	△
2	〃	1<2	○	○	○	※
3	〃	1>3	○	○	△	△
4	〃	3<4	×	○	○	

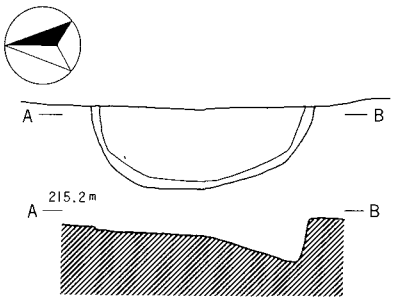
D-3号土壙



D-5号土壙



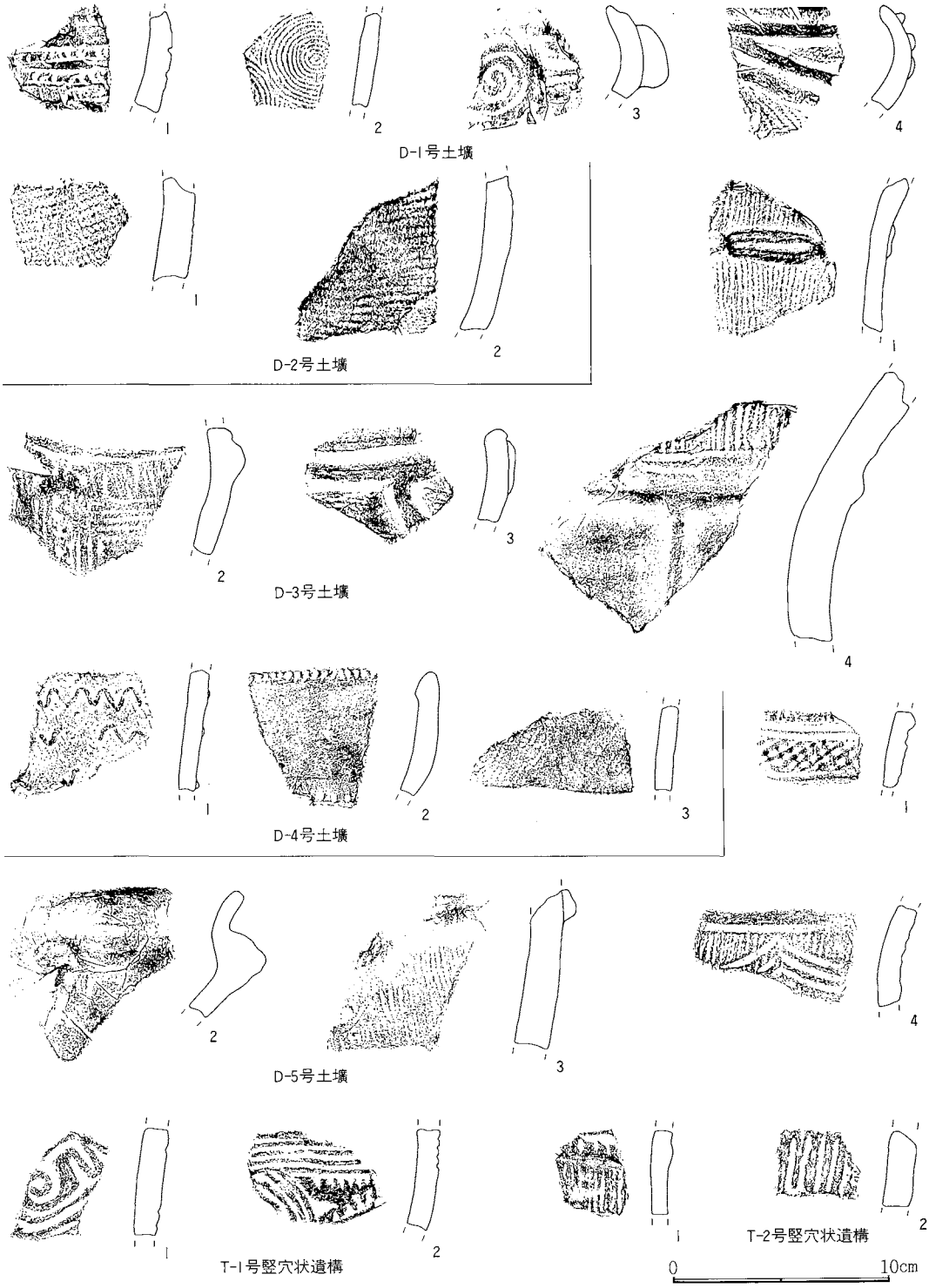
T-1号竪穴状遺構



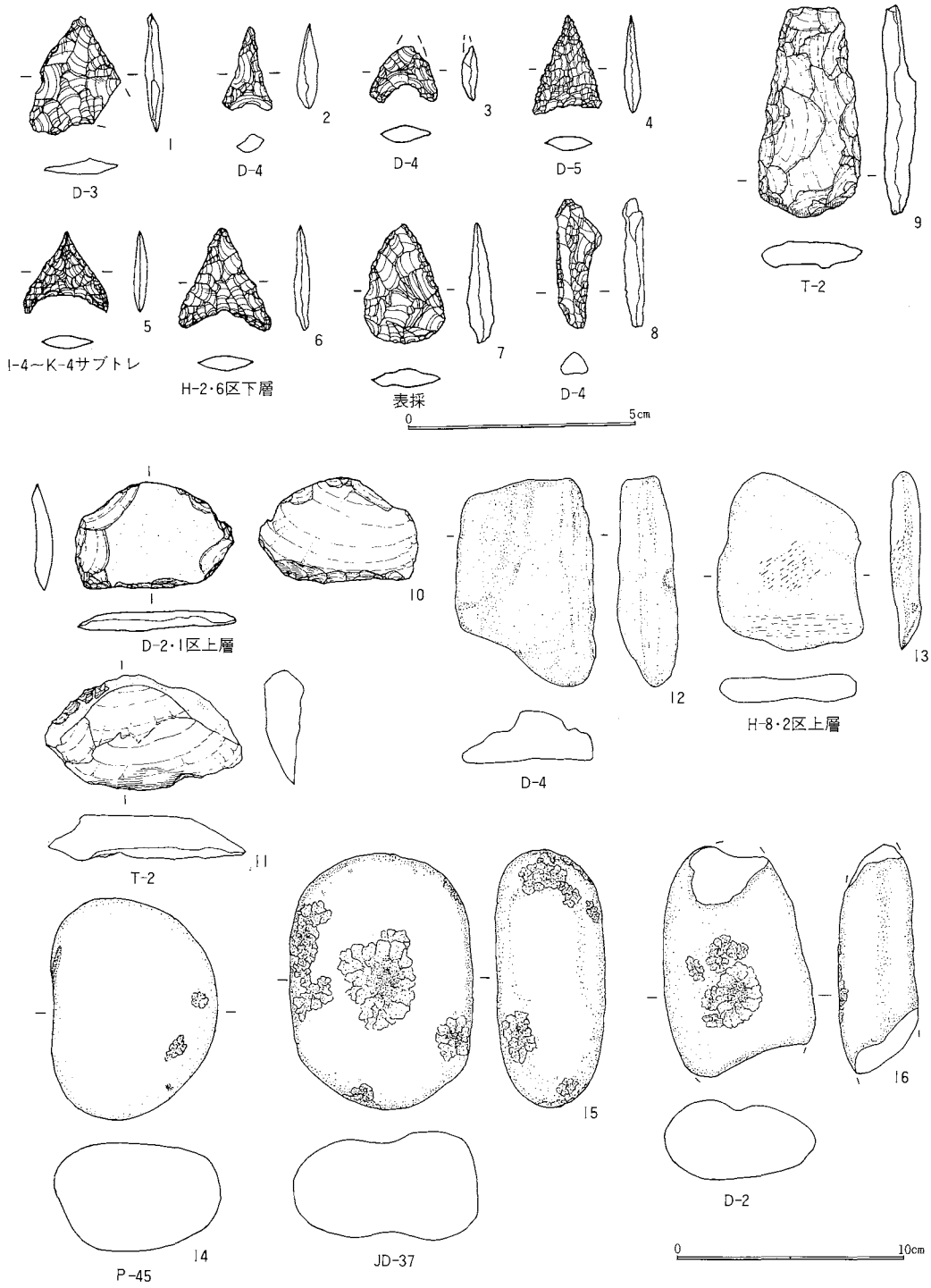
T-2号竪穴状遺構

0　4 m

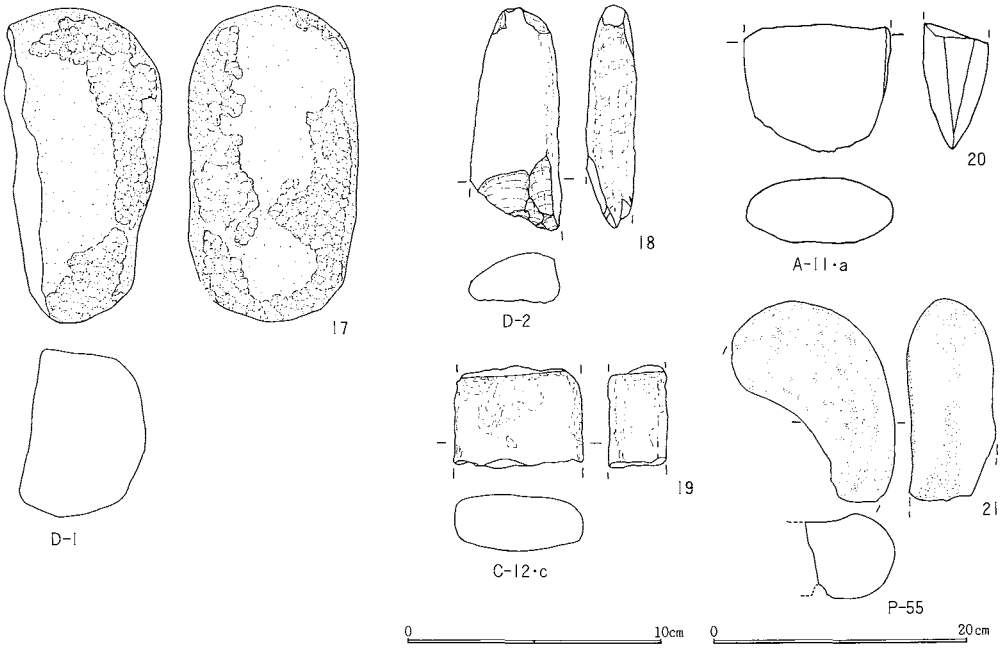
第39図　土壙・竪穴状遺構実測図



第40図　土壙・竪穴状遺構出土の土器



第41図　土壙・ピット等出土の石器(1)



第42図　土壙・ピット等出土の石器(2)

Ｄ－４号土壙（第39図）

Ｔ－12グリッドに位置し、他の遺構との重複関係はない。

土壙の平面形は不正円形で、規模は約５ｍ10cm×４ｍ40cm、深さは約15cmを計る。

遺物出土状況

遺物は、覆土中層から少量出土し、土器はⅠ類、Ⅳ類、Ⅷ類が出土した。

Ｄ－５号土壙（第39図）

Ｃ－12グリッドに位置し、他の遺構との重複関係はない。

土壙の平面形は不正円形で、規模は約７ｍ80cm×７ｍ40cm、深さは約20cmを計る。

遺物出土状況

遺物は、少量出土し、土器はⅢ類、Ⅴ類、Ⅷ類が出土した。

土壙・ピット・調査区出土の石器（第41図・第42図）

土壙・ピットから検出された石器は全部で52点であり、内訳は第12表のとおりである。これらの石器の多くは、Ｊ－１・Ｊ－５～８号住居址周辺の土壙・ピットより検出されたもので、前期末葉と中期中葉の段階のものが多いとみられる。

また、調査区から検出された石器は361点であり、内訳は第13表のとおりである。これらの石器

も大部分はＪ－１・Ｊ－５～８号住居址周辺から検出されたものであり、前期末葉と中期中葉の段階のものが多いと推定される。

これらの石器には、ほぼ全ての器種が存在しており、代表的な石器を第41図・第42図に図示した。１～７は石鏃、８は石錐、９は打製石斧、10・11はスクレイパーＢ類である。また、12・13は砥石、14は磨石、15・16は凹石である。そして、17は敲石、18～20は磨製石斧、21は石皿である。

	器種	Ob				計
A類	石鏃	6				6
	石錐	2				2
	スクレイパーA	4				4
	R・F・A	1				1
	ピエス・エスキーユ	1				1
	小計	14				14
B類		Sh	An	GAn	KH	
	打製石斧	10	1	1	1	13
	スクレイパーB	6				6
	その他	1	2			3
	小計	17	3	1	1	22
C類		An	砂岩			
	凹石	3				3
	磨石	3				3
	敲石	2				2
	石皿	2				2
	台石	1				1
	砥石		2			2
	小計	11	2			13
D類		KH				
	棒状礫	2				2
	小計	2				2
E類		玄武岩系				
	磨製石斧	1				1
	小計	1				1
	合計	45	5	1	1	52

第12表　土壙・ピット出土の石器組成表

(3) 竪穴状遺構

Ｔ－１号竪穴状遺構（第39図）

Ｃ－13、Ｄ－13グリッドに位置し、東側約半分が調査区外となる。他の遺構との重複はない。西壁に接してピットが存在する。遺構の平面形は円形または楕円形と推測される。規模は最長部で約１m27cm、深さは約10cmを計る。ピットは遺構底面から約25cmを計る。

遺物出土状況

遺物は、少量出土し、土器はＶ類が出土した。

Ｔ－２号竪穴状遺構（第39図）

Ｄ－13・14、Ｅ－13・14グリッドに位置し、東側約半分が調査区外となる。他の遺構との重複関係はない。

遺構の平面形は円形または楕円形と推測される。規模は最長部で約1m17cm、深さは浅い部分で約3cm、深い部分で約23cmを計る。

遺物出土状況

遺物は、少量出土し、土器はV類が出土した。

	器種	Ob	Sh			計
A類	石鏃	23				23
	石錐	7				7
	石匙		4			4
	スクレイパーA	41				41
	R・F・A	57				57
	ピエス・エスキーユ	7				7
	小計	135	4			139
B類		Sh	An	GAn	KH	
	打製石斧	66	21	1	3	91
	スクレイパーB	43	1	1		45
	その他	8	1			9
	小計	117	23	2	3	145
C類		An	砂岩	KH		
	凹石	25				25
	磨石	25				25
	敲石	4		1		5
	石皿	2		2		4
	台石	1				1
	砥石	3	5			8
	小計	60	5	3		68
D類		KH	An			
	棒状礫	4	1			5
	小計	4	1			5
E類		玄武岩系				
	磨製石斧	4				4
	小計	4				4
	合計	320	33	5	3	361

第13表　調査区出土の石器組成表

(4) 縄文土器観察表

遺構名称	遺物番号	器種	残存状態	器形・文様の特徴	分類
J－1住	No.1	深鉢	胴部破片	半截竹管状工具による幅広の内側爪形文、円形竹管文、	Ⅰ類
J－1住	No.2	深鉢	口縁部破片	篦状工具による刻目。	〃
J－1住	No.3	深鉢	胴部破片	1から12は半截竹管状工具による集合沈線文、棒状・耳	〃
J－1住	No.4	深鉢	胴部破片	状・円形状貼付文によって文様構成される。2、3、5	〃
J－1住	No.5	深鉢	胴部破片	は円形貼付門文上に半截竹管による刺突、4、6、7、	〃
J－1住	No.6	深鉢	胴部破片	8、10、11は棒状工具による刺突を加えている。2、11	〃
J－1住	No.7	深鉢	胴部破片	は結節状沈線が垂下する。2、6は口唇部に竹管による	〃
J－1住	No.8	深鉢	口縁部破片	刻みをもつ。	〃
J－1住	No.9	深鉢	口縁部破片		〃
J－1住	No.10	深鉢	口縁部破片		〃
J－1住	No.11	深鉢	底部破片		〃
J－1住	No.12	深鉢	底部破片		〃
J－1住	No.13	深鉢	口縁部破片		〃
J－1住	No.14	深鉢	胴部破片	地文に縄文、半截竹管により区画され区画内に細沈線に	Ⅲ類
				よる格子目文を施す。	
J－1住	No.15	深鉢	胴部破片	地文に縄文、半截竹管による沈線が垂下する。	〃
J－1住	No.16	深鉢	胴部破片	縦位、横位の沈線文及び沈線による渦巻文、刻み目をも	Ⅴ類
				つ隆帯を施す。	
J－1住	No.17	深鉢	口縁部破片	17、18、19は隆帯で、小渦巻文と楕円区画を施し、区画	Ⅷ類
				内に単節斜縄文を施す。	
J－1住	No.18	深鉢	口縁部破片		〃
J－1住	No.19	深鉢	口縁部破片		〃
J－1住	No.20	土偶	胴部破片	板状、胸部に乳房を表現する突起があり、沈線が胸元か	〃
				ら下胴部に施文し、背中にも沈線を施文する。	
J－2住	No.1	深鉢	胴部破片	1、2は半截竹管状の工具による幅広の内側爪形文、櫛	Ⅰ類
				状工具による刻み目を施す。	
J－2住	No.2	深鉢	胴部破片		〃
J－2住	No.3	深鉢	胴部破片	篦状工具による刻み目をもつ浮線文を施す。	〃
J－2住	No.4	深鉢	口縁部破片	半截竹管あるいは複数本単位の櫛状工具による集合沈線	〃
				文を施文する。口縁部は波状を呈する。	
J－3住	No.1	深鉢	口縁から胴部破片	器面全体に単節の斜縄文を施す。口縁部は波状を呈し、	〃
				波頂部に刻みをもつ。	
J－3住	No.2	深鉢	口縁から底部	ミニチュア土器。器面全体に単節の斜縄文を施す。	〃
J－3住	No.3	深鉢	胴部破片	3から7は半截竹管状工具による幅広の内側爪形文、円	〃
J－3住	No.4	深鉢	胴部破片	形竹管文、篦状工具による刻み目を施す。4は爪形文に	〃
J－3住	No.5	深鉢	口縁部破片	よって無文部が区画されている。7は爪形文、刻み目の	〃
J－3住	No.6	深鉢	口縁部破片	横位の施文下に結束羽状縄文を施文する。	〃
J－3住	No.7	深鉢	胴部破片		〃
J－3住	No.8	深鉢	口縁から胴部	8から18は地文に単節の斜縄文を施し、篦状工具による	〃
J－3住	No.9	深鉢	口縁から胴部	刻み目をもつ浮線文によって文様構成されている。8、	〃
J－3住	No.10	深鉢	口縁から胴部	9、12、18は口縁部に円形の粘土粒が1つ貼付され、13、	〃
J－3住	No.11	深鉢	口縁から胴部	14は3つが三角形に貼付されている。8、15は平行浮線	〃
J－3住	No.12	深鉢	口縁から胴部	文間に縦位、X字状の浮線文を施す。17は獣面状取っ手	〃
J－3住	No.13	深鉢	口縁から胴部	をもち浮線も他に比べ盛り上がりが高い。18は靴先状口	〃
J－3住	No.14	深鉢	口縁から胴部	縁を有する。19は浮線文上に爪形文を施す。	〃
J－3住	No.15	深鉢	胴部	8、9、12、13、14、17、18の口縁部は波状を呈する。	〃

遺構名称	遺物番号	器種	残存状態	器形・文様の特徴	分類
J－3住	No.16	深鉢	胴部		I類
J－3住	No.17	深鉢	口縁部破片		〃
J－3住	No.18	深鉢	口縁部破片		〃
J－3住	No.19	深鉢	口縁部破片	口縁部は波状を呈する。地文に単節の斜縄文を施文し、浮線文上に爪形文を施す。	〃
J－3住	No.20	深鉢	胴部破片	地文に単節の斜縄文を施文し、篦状工具による刻み目をもつ浮線文で文様構成する。	〃
J－3住	No.21	深鉢	口縁から胴部	口縁部は波状を呈する。地文に単節の斜縄文を施し、爪形文を施した浮線文により文様構成される。胴くびれ部には平行浮線文間に縦位、X字状の浮線文を施す。	〃
J－3住	No.22	深鉢	胴部	22、23は地文に単節斜縄文を施し、篦状工具により刻み	〃
J－3住	No.23	深鉢	底部	目をもつ浮線文により文様構成される。22は平行浮線文間に縦位、X字状の浮線文を施す。	〃
J－3住	No.24	浅鉢	口縁部	口縁は直立する。口縁と胴部の境に有孔列、篦状工具により刻み目をもつ隆帯が横走する。隆帯部分に朱が残る。	〃
J－3住	No.25	深鉢	胴部破片	25、26、27は地文に単節斜縄文を施し、篦状工具による	〃
J－3住	No.26	深鉢	胴部破片	刻み目をもつ浮線文により文様構成される。浮線文に	〃
J－3住	No.27	深鉢	胴部破片	沿って直径約1ミリの円形刺突が巡る。	〃
J－3住	No.28	深鉢	口縁部破片	28、29は地文に単節斜縄文を施し、半截竹管による平行	〃
J－3住	No.29	深鉢	口縁部破片	沈線文により文様構成される。28は口縁部に粘土粒を1つ貼付している。	〃
J－3住	No.30	深鉢	胴部破片	半截竹管による平行沈線により文様構成されている。	〃
J－3住	No.31	深鉢	胴部から底部	ミニチュア土器。胴部に朱が残る。	〃
J－3住	No.32	浅鉢	完形	ミニチュア土器。手ずくね。	〃
J－3住	No.33	深鉢	口縁から胴部	地文に単節の斜縄文を施す。クの字に内屈した口縁部には半截竹管による爪形文により文様構成され、それ以下胴部は半截竹管による平行沈線で文様構成される。口縁に粘土粒が1つ貼付され、口縁は波状。	〃
J－3住	No.34	深鉢	口縁から底部	地文に単節の斜縄文を施す。文様帯は口縁から1／3ほどで、半截竹管による平行沈線により文様構成され、隆帯によって文様帯を区画している。口縁は波状を呈する。	〃 〃
J－3住	No.35	深鉢	口縁から底部	胴部のほぼ中央から口縁にかけ単節斜縄文、底部にかけて無節斜縄文を施す。	〃
J－4a住	No.1	深鉢	口縁から胴部	口唇部に小さな山形突起が3つ貼付され、器面全体に単節斜縄文を施す。	〃
J－4a住	No.2	深鉢	胴部破片	半截竹管による平行沈線で文様構成されている。	〃
J－4a住	No.3	浅鉢	口縁部破片	篦状工具による刻み目をもつ浮線文、半截竹管による爪形文により文様構成される。	〃
J－4a住	No.4	深鉢	口縁部破片	口唇に小さな山形突起をもち、半截竹管状工具による幅広の内側爪形文を施す。	〃
J－4a住	No.5	深鉢	胴部破片	5、6、7は半截竹管状工具による幅広の内側爪形文、	〃
J－4a住	No.6	深鉢	胴部破片	円形刺突文、爪形文に沿って篦状工具による刻み目が巡	〃
J－4a住	No.7	深鉢	胴部破片	る。	〃
J－4a住	No.8	深鉢	口縁部破片	8、9、10、11、12、13は地文に単節の斜縄文を施し、	〃
J－4a住	No.9	深鉢	胴部破片	8、9、10、11、12は篦状工具による刻み目を有する浮	〃
J－4a住	No.10	深鉢	胴部破片	線文によって文様構成されている。8は口唇部にも浮線	〃
J－4a住	No.11	深鉢	口縁部破片	文を施す。10は浮線文に沿って直径約1ミリの円形刺突	〃
J－4a住	No.12	深鉢	口縁から胴下部	が巡る。11、13は波状口縁を呈し、11は口縁部に粘土粒	〃

遺構名称	遺物番号	器種	残存状態	器形・文様の特徴	分類
J－4a住	No.13	深鉢	口縁部破片	が1つ貼付されている。13は口縁部の浮線文に刻みも何もなく胴部の浮線文上に縄文を施す。	Ⅰ類
J－5住	No.1	深鉢	口縁部破片	地文に単節斜縄文を施す。単節斜縄文を施文した浮線文により文様構成される。	Ⅰ類
J－5住	No.2	深鉢	胴部破片	半截竹管により区画され区画内に細沈線による格子目文を施す。	Ⅲ類
J－5住	No.3	深鉢	口縁部破片	半截竹管による平行沈線を横位に施し交互刺突を施す。口唇部に刻みをもつ。	〃
J－5住	No.4	浅鉢	口縁部破片	地文に単節斜縄文を施す。半截竹管による平行沈線を横位、縦位、鋸歯状に施す。	〃
J－5住	No.5	深鉢	胴部破片	隆帯と沈線により文様構成され、区画内に刺突文を施す。	Ⅴ類
J－5住	No.6	深鉢	胴部破片	隆帯と沈線により渦巻状の文様構成をし、区画内に単節斜縄文を施文する。	Ⅶ類
J－5住	No.7	深鉢	胴部破片	地文に単節斜縄文を施し、幅広の沈線により渦巻文を施文する。	〃
J－5住	No.8	深鉢	胴部破片	沈線により渦巻状に区画された中に単節斜縄文を施す。	〃
J－5住	No.9	深鉢	胴部破片	地文に撚糸文を施文し、隆帯と沈線により横位に文様帯を構成する。	〃
J－5住	No.10	深鉢	胴部破片	沈線を斜めに施文した上に隆帯をクロスするように斜めに施文している。	Ⅵ類
J－5住	No.11	深鉢	胴部破片	隆帯と沈線により文様構成される。	Ⅴ類
J－5住	No.12	深鉢	口縁部破片	12、13は太い隆帯により小渦巻文、楕円区画文を施す。	Ⅷ類
J－5住	No.13	深鉢	口縁部破片	区画内に12は撚糸文、13は撚糸文が網目状を呈する単軸絡条体？を施文する。	〃
J－5住	No.14	深鉢	口縁部破片	14、15、16、17は隆帯により小渦巻文、楕円区画文を施す。14は区画内に平行沈線を施文する。15、16、17は区画内に単節の斜縄文を施文する。	〃
J－5住	No.15	深鉢	口縁部破片		〃
J－5住	No.16	深鉢	口縁部破片		〃
J－5住	No.17	深鉢	口縁部破片		〃
J－5住	No.18	深鉢	胴部破片	隆帯により文様構成され、区画内に単節斜縄文を施す。	〃
J－5住	No.19	深鉢	口縁部破片	太い沈線により文様構成される。	〃
J－6住	No.1	深鉢	口縁部破片	平行沈線を斜めに施文し、口唇部に隆帯を蛇行状に張り付ける。	Ⅲ類
J－6住	No.2	深鉢	胴部破片	地文に単節斜縄文を施し、半截竹管による平行沈線により文様構成する。	〃
J－6住	No.3	深鉢	胴部破片	半截竹管により文様構成し、区画内に単節斜縄文を施す。	〃
J－6住	No.4	深鉢	口縁部破片	口縁は波状を呈する。隆帯と沈線により文様構成され、隆帯上に刻み目をもつ。	〃
J－6住	No.5	深鉢	胴部破片	5、6は太い隆帯により文様構成される。隆帯上に刻みをもつ。区画内には沈線を施す。	Ⅶ類
J－6住	No.6	深鉢	胴部破片		〃
J－6住	No.7	深鉢	口縁部破片	地文に撚糸文を施し、太い隆帯と沈線により文様構成される。	〃
J－6住	No.8	深鉢	口縁部破片	太い隆帯により文様構成され、区画内に撚糸文を施す。	Ⅷ類
J－6住	No.9	深鉢	口縁部破片	隆帯により小渦巻文、楕円区画文を施す。区画内に単節斜縄文を施文する。	〃
J－6住	No.10	深鉢	胴部破片	条線を施文する。	〃
J－6住	No.11	深鉢	胴部破片	沈線により区画後、区画内に単節斜縄文を施す。	〃
J－6住	No.12	深鉢	胴部破片	撚糸文を施す。	〃
J－6住	No.13	深鉢	口縁から胴部破片	太い隆帯により文様帯を区画し、区画内に沈線を施す。	〃

遺構名称	遺物番号	器種	残存状態	器形・文様の特徴	分類
J－6住	No.14	深鉢	口縁部破片	太い隆帯と沈線により小渦巻文、楕円区画文を施し、区画内に沈線を施す。	VIII類
J－7住	No.1	深鉢	胴部から底部	1、2、3、4は半截竹管状工具の平行沈線文＋篦状工具による刻み目＋爪形文と交互刺突＋三角印刻文を施文する。2、3は口縁が波状を呈する。	II類
J－7住	No.2	深鉢	口縁から胴部		〃
J－7住	No.3	深鉢	口縁から底部		〃
J－7住	No.4	深鉢	胴部		〃
J－7住	No.5	深鉢	口縁部	5、6は半截竹管により区画され区画内に細沈線による格子目文を施す。5は口唇部の隆帯に刻みをもつ。6は口縁下の地文に単節斜縄文を施す。	III類
J－7住	No.6	深鉢	口縁部		〃
J－7住	No.7	深鉢	胴部破片	隆帯と棒状工具による結節沈線により文様構成される。	IV類
J－7住	No.8	深鉢	胴部破片	沈線により三角形の区画をし、区画内に爪形文、三叉文を施文する。	V類
J－7住	No.9	深鉢	口縁部破片	沈線により文様構成され、鋸歯状の交互刺突、渦巻文を施した突起が付される。	〃
J－7住	No.10	深鉢	胴部破片	半截竹管腹面使用の平行沈線、爪形状の刻み目を施す。	〃
J－7住	No.11	深鉢	口縁部破片	11、12、13は平行沈線により文様構成される。12は三叉文を施文する。	〃
J－7住	No.12	深鉢	胴部破片		〃
J－7住	No.13	深鉢	胴部破片		〃
J－7住	No.14	深鉢	口縁部破片	14、15、16は隆帯と沈線によって文様構成され、双環状突起を中核として隆帯と沈線によって孤状を描き、その中に刺突文を施文する。	〃
J－7住	No.15	深鉢	胴部破片		〃
J－7住	No.16	深鉢			〃
J－7住	No.17	深鉢	胴部破片	太い隆帯と沈線によって曲線的な文様構成をされている。	VI類
J－7住	No.18	深鉢	胴部破片	地文に単節斜縄文を施す。双環状の隆帯と沈線により文様構成され、隆帯上に単節斜縄文を施文する。	VII類
J－7住	No.19	深鉢	胴部破片	眼鏡状の橋状取っ手が付されている。隆帯上に単節斜縄文を施す。	〃
J－7住	No.20	深鉢	口縁部破片	20、21、22は橋状取っ手が付くI群である。	〃
J－7住	No.21	深鉢	口縁部破片		〃
J－7住	No.22	深鉢	口縁部破片		〃
J－7住	No.23	深鉢	口縁部破片	口縁下より隆帯と沈線が垂下し、隆帯上には刻みをもつ。	〃
J－7住	No.24	深鉢	口縁部破片	24、25、26は隆帯と沈線により小渦巻文、楕円区画文を施す。24は区画内に単節の斜縄文を施す。25、26は沈線を施す。	VIII類
J－7住	No.25	深鉢	口縁部破片		〃
J－7住	No.26	深鉢	口縁部破片		〃
J－7住	No.27	深鉢	口縁部破片	山形の小突起をもち、口縁部下に撚糸文を施す。	〃
J－8住	No.1	深鉢	口縁から胴下部	口縁は5単位の波状を呈する。口縁部に2条の爪形文を施した隆帯を横位に施文し、波頂部から隆帯が垂下する。隆帯以下胴部は結節の縄文を施文する。	III類
J－8住	No.2	深鉢	口縁部破片	半截竹管による沈線で区画され、区画内に細沈線による格子目文を施す。	〃
J－8住	No.3	深鉢	口縁部破片	口縁は波状を呈すると思われ、太い隆帯と沈線によって文様構成される。	V類
J－8住	No.4	深鉢	胴部破片	太い隆帯と沈線により文様構成され、隆帯上に単節斜縄文を施文する。	〃
J－8住	No.5	深鉢	胴部破片	隆帯によって区画され、区画内にペン先状刺突文を施文する。	〃
J－8住	No.6	深鉢	胴部破片	矢羽状の刻みをもつ隆帯を施文する。	〃
J－8住	No.7	深鉢	口縁から胴部	口縁部に半截竹管腹面使用の沈線を斜めに施し、頸部に隆帯を2条施文する。	VI類

遺構名称	遺物番号	器種	残存状態	器形・文様の特徴	分類
J－8住	No.8	深鉢	口縁から胴部	太い隆帯を孤状に連結し、楕円区画を構成する。区画内には沈線文を施す。	VI類
J－8住	No.9	深鉢	口縁部破片	太い渦巻状隆帯が施文される。楕円区画内には沈線文を施す。	VIII類
J－8住	No.10	深鉢	口縁部破片	10、11は隆帯により小渦巻文、楕円区画を構成する。区画内には沈線が施文されている。	〃
J－8住	No.11	深鉢	口縁部破片		〃
J－8住	No.12	深鉢	胴部破片	２条の隆帯が垂下し、条線文を施文する。	〃
J－8住	No.13	深鉢	口縁部破片	頸部に隆帯と沈線を横位に施文する。	〃
J－9住	No.1	深鉢	胴部破片	１、２は半截竹管状工具による幅広の内側爪形文、円形竹管文、篦状工具による刻み目を施す。	I類
J－9住	No.2	深鉢	胴部破片		〃
J－9住	No.3	深鉢	口縁から胴下部	３、４、５、６、７は半截竹管による平行沈線、連孤状、山形状、渦巻状に沈線で文様を描いている。３、６は粘土粒を貼付している。	〃
J－9住	No.4	深鉢	底部破片		〃
J－9住	No.5	深鉢	胴部破片		〃
J－9住	No.6	深鉢	底部破片		〃
J－9住	No.7	深鉢	胴部破片		〃
J－9住	No.8	深鉢	口縁から底部	半截竹管により羽状沈線を施す。	〃
J－9住	No.9	深鉢	胴部破片	９、10は半截竹管によるしっかりとした深い羽状沈線を施している。	〃
J－9住	No.10	深鉢	口縁部破片		〃
J－9住	No.11	深鉢	口縁部破片	11、12、13は半截竹管により孤状の文様を施す。13は粘土粒を貼付されている。	〃
J－9住	No.12	深鉢	胴部破片		〃
J－9住	No.13	深鉢	口縁部破片		〃
J－9住	No.14	深鉢	口縁部破片	14、15、16は地文に半截竹管による平行沈線を施し、その上に結節浮線文により縦位、横位、連孤状、渦巻状に文様を施す。15、16は波状口縁を呈している。	〃
J－9住	No.15	深鉢	口縁部破片		〃
J－9住	No.16	深鉢	口縁部破片		〃
J－9住	No.17	深鉢	口縁部破片	17、18は半截竹管状工具による平行沈線文＋篦状工具による刻み目＋爪形文と交互刺突＋三角印刻文を施文する。口縁は波状を呈する。	II類
J－9住	No.18	深鉢	口縁部破片		〃
J－9住	No.19	深鉢	口縁部破片	口縁部は波状を呈し、波頂部に小突起が１対貼付される。	III類
J－9住	No.20	浅鉢	口縁部破片	太い隆帯と沈線により、渦巻文が描かれている。	V類
J－10住	No.1	深鉢	胴部破片	１、２は半截竹管状工具による幅広の内側爪形文、円形刺突文、篦状工具による刻み目を施す。	I類
J－10住	No.2	深鉢	口縁部破片		〃
J－10住	No.3	深鉢	胴部破片	半截竹管による平行沈線により縦位、横位に施文する。	〃
J－10住	No.4	深鉢	胴部破片	半截竹管により太いしっかりとした羽状沈線文を施す。	〃
J－10住	No.5	深鉢	胴部破片	半截竹管により平行沈線が孤状に施文する。	〃
J－10住	No.6	浅鉢	口縁部破片	口唇部に沿って篦状工具により刻み目を施し隆帯を施文する。	〃
J－1土壙	No.1	深鉢	胴部破片	半截竹管状工具による幅広の内側爪形文、篦状工具による刻み目を施す。	I類
J－1土壙	No.2	深鉢	胴部破片	半截竹管による平行沈線で渦巻文を施す。	〃
J－1土壙	No.3	深鉢	口縁部破片	渦巻状隆帯、沈線により文様構成されている。	VIII類
J－1土壙	No.4	深鉢	口縁部破片	隆帯により口縁部を区画され、区画内に単節斜縄文を施す。	〃
J－2土壙	No.1	深鉢	胴部破片	１、２は器面全体に単節の斜縄文を施文する。	〃
J－2土壙	No.2	深鉢	胴部破片		〃
J－3土壙	No.1	深鉢	胴部破片	地文に撚糸文を施し、横位に隆帯を施す。	VII類
J－3土壙	No.2	深鉢	胴部破片	隆帯と沈線により文様構成され、隆帯上に鋸歯状刺突文を施す。	〃

遺構名称	遺物番号	器種	残存状態	器形・文様の特徴	分類
J－3土壙	No.3	深鉢	口縁部破片	太い隆帯により口縁部を区画され、区画内に単節斜縄文を施す。	Ⅷ類
J－3土壙	No.4	深鉢	胴部破片	隆帯と沈線によって文様構成され、沈線による区画内に撚糸文を施す。	〃
J－4土壙	No.1	深鉢	胴部破片	地文に単節斜縄文を施し、蛇行浮線文を施文する。	Ⅰ類
J－4土壙	No.2	深鉢	口縁部破片	口唇部に刻みをもつ。胎土に金雲母を多量に含む。	Ⅳ類
J－4土壙	No.3	深鉢	胴部破片	器面全体に単節斜縄文を施す。	Ⅷ類
J－5土壙	No.1	深鉢	胴部破片	沈線によって区画され、区画内に格子状に隆帯を施文する。	Ⅲ類
J－5土壙	No.2	浅鉢	口縁部破片	隆帯により渦巻文を施文する。	Ⅴ類
J－5土壙	No.3	深鉢	胴部破片	矢羽状の刻みをもつ隆帯により区画され、区画内に撚糸文を施す。	〃
J－5土壙	No.4	深鉢	胴部破片	地文に撚糸文を施文し、沈線により連孤状の文様が描かれる。	Ⅷ類
T－1竪穴	No.1	深鉢	胴部破片	沈線による渦巻文、鋸歯状文を施す。	Ⅴ類
T－1竪穴	No.2	深鉢	胴部破片	半截竹管腹面使用の沈線により文様構成され、ペン先状刺突文、三叉文を施文する。	〃
T－2竪穴	No.1	深鉢	胴部破片	刻みをもつ隆帯と、撚糸文を施文する。	〃
T－2竪穴	No.2	深鉢	胴部破片	半截竹管による平行沈線を施文する。	〃

2　奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 住 居 址

H－1号住居址（第43図）

D—10・11、E—10・11、F—10・11グリッドに位置する。J－1号住居址と重複し、北西部分が一部調査区外に出る。

住居址の平面形はほぼ正方形と思われ、規模は約5m80cm×5m70cm、周壁は約80cmを計る。主軸方向はN－30°－Wを示す。主柱穴は3本確認されたが、調査区外にも1本あるものと思われ、4本柱穴の住居と思われる。

カマドは、住居址北西に設けられており、袖部はローム混入の褐色土で作り付けられている。貯蔵穴はカマドの東側で確認された。この住居址の周壁には、壁の中央部分に沿って小さな横穴が幾つも確認された。

遺物出土状況

カマド周辺や貯蔵穴周辺を中心に土師器坏、甕等が十数点出土した。出土遺物から7世紀の後半に属する住居と思われる。

H－2号住居址（第45図）

H—10・11グリッドに位置し、他の遺構との重複はない。

住居址の平面形は長方形で、規模は約4m80cm×3m60cm、周壁は約25cmを計る。主軸方向はN－90°－Eを示す。柱穴は住居址内、住居址外共に確認することができなかった。カマドは、住居址東の南寄りに設けられており、袖部は確認できなかった。

遺物出土状況

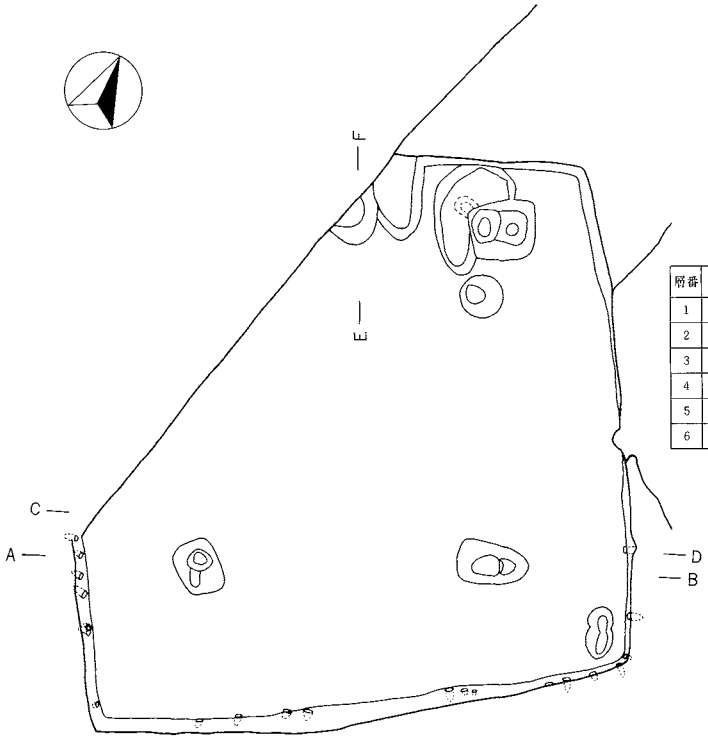
カマド周辺を中心に土師器坏、甕、須恵器坏などが十数点出土した。出土遺物から8世紀前半から中半に属する住居と思われる。

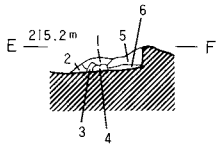
H－3号住居址（第47図）

R－12、S－12グリッドに位置し、他の遺構との重複はない。

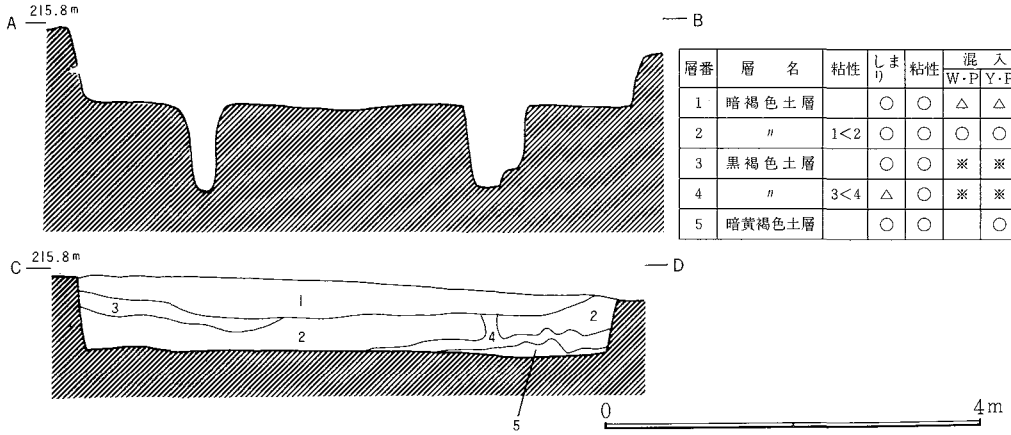
住居址の平面形はほぼ正方形で、規模は約3m60cm×3m30cm、周壁は約35cmを計る。主軸方向はN－80°－Eを示す。柱穴は住居址内、住居址外共に確認することができなかった。カマドは、住居址東の多少南寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土で作り付けられている。

遺物出土状況



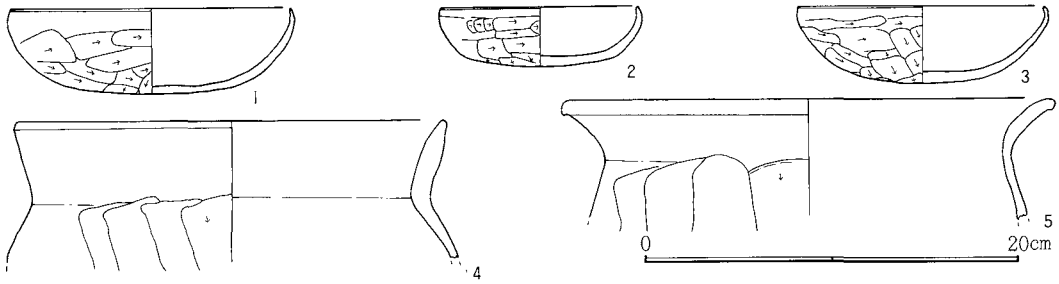


層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 Y・P	混入物 R・P	混入物 R・B	備考
1	暗褐色土層		○	○	△	△		焼土△ 炭化物△
2	黄褐色土層	1<2	○	○		△		焼土△
3	赤褐色土層		○	○			△	焼土◎
4	暗赤褐色土層	3>4	○	○		△		焼土△
5	赤褐色土層	3<5	○	○				焼土◎ 炭化物△
6	黄褐色土層		○	◎		◎		焼土△

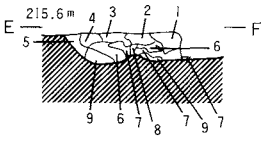


層番	層名	粘性	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 Y・P	混入物 R・P
1	暗褐色土層		○	○	△	△	※
2	〃	1<2	○	○	○	○	○
3	黒褐色土層		○	○	※	※	
4	〃	3<4	△	○	※	※	※
5	暗黄褐色土層		○	○		○	○

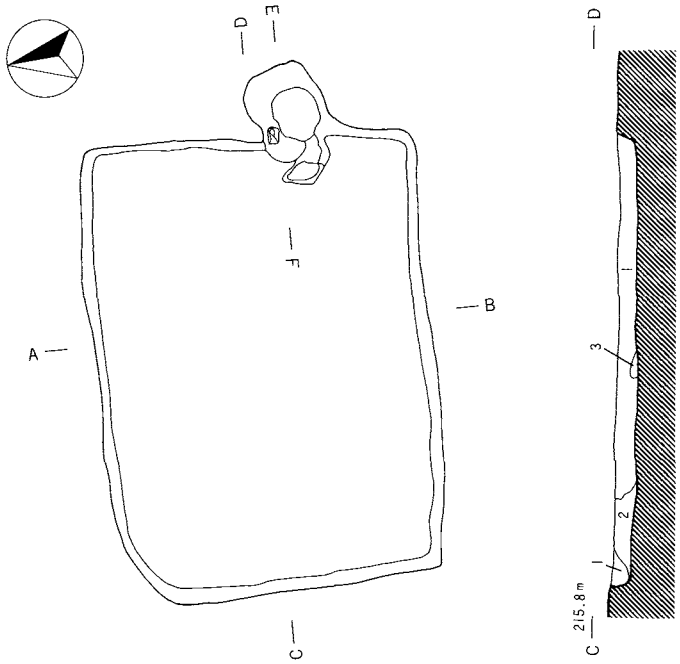
第43図　H－1号住居址実測図



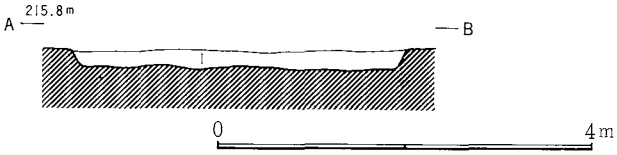
第44図　H－1号住居址出土の遺物



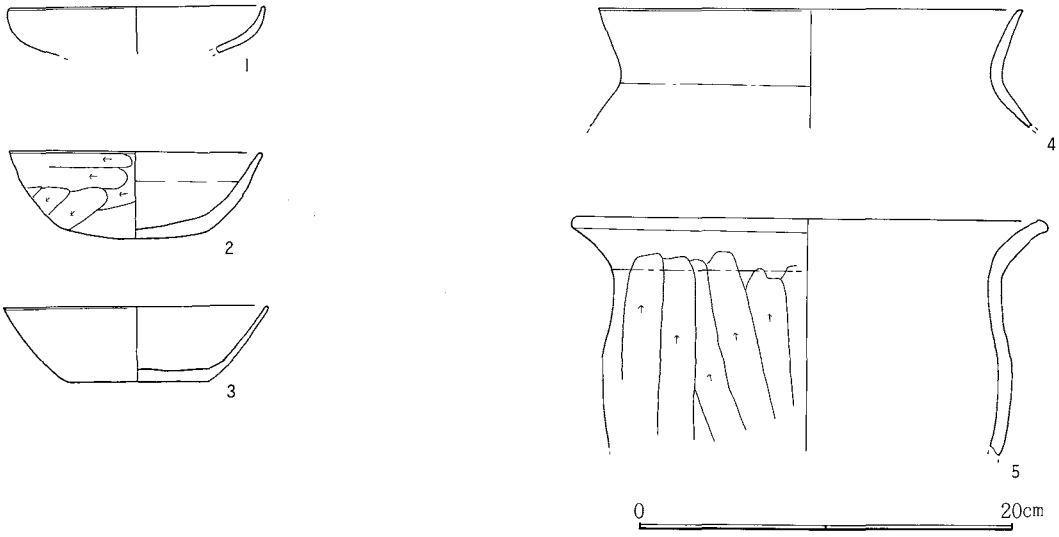
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・P	備考
1	黒褐色土層		○	○	※	※	
2	〃	1<2	○	○	△	△	焼土※
3	暗黄褐色土層	2<3	◎	◎		◎	焼土※
4	暗黄赤褐色土層	3<4	◎	◎	※	○	焼土○
5	黒褐色土層	4>5	△	△		△	焼土※
6	暗赤褐色土層	4>6	○	○		※	焼土◎
6′	〃	6<6′	○	○		△	焼土◎
7	暗褐色土層		○	○	△	※	焼土※
8	黒褐色土層	2>8	△	△			
9	暗褐色土層	7>9	△	△		※	焼土△



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・B
1	黒褐色土層		○	○	△	
2	暗褐色土層	1<2	△	○		△
3	暗黄褐色土層	2<3	◎	○		○



第45図　H－2号住居址実測図



第46図　H－2号住居址出土の遺物

遺物は出土しなかった。

H－4号住居址（第48図）

S－15・16、T－15・16グリッドに位置し、J－2号住居址と重複する。

住居址の平面形はほぼ正方形で、規模は約3m10cm×3m、周壁は約22cmを計る。主軸方向はN－75°－Eを示す。柱穴は住居内には確認されなかったがこの住居に関係していると思われる柱穴が、西側の周壁に接して1基、南側の周壁の外に1基確認された。カマドは、住居址東側の多少南寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土で作り付けられている。住居址北側のコーナー部分に周壁をオーバーハングして土壙が掘られている。

遺物出土状況

遺物の遺存状態は良く、住居址全体から土師器坏、甕等多数出土した。完形の坏、復元可能な甕等も出土した。出土遺物から7世紀中半から後半に属する住居と思われる。

H－5号住居址（第50図）

H－12・13グリッドに位置し、他の遺構との重複はない。

住居址の平面形は長方形で、規模は約3m30cm×2m88cm、周壁は約30cmを計る。主軸方向はN－85°－Eを示す。柱穴は、住居内住居外共に確認されなかった。カマドは、住居東側の多少南寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土で作り付けられている。

遺物出土状況

遺物の遺存状態は良く、カマド周辺を中心に住居址全体から土師器坏、甕、長胴甕、須恵器坏など多数出土した。復元可能な甕も出土した。出土遺物から7世紀後半に属する住居と思われる。

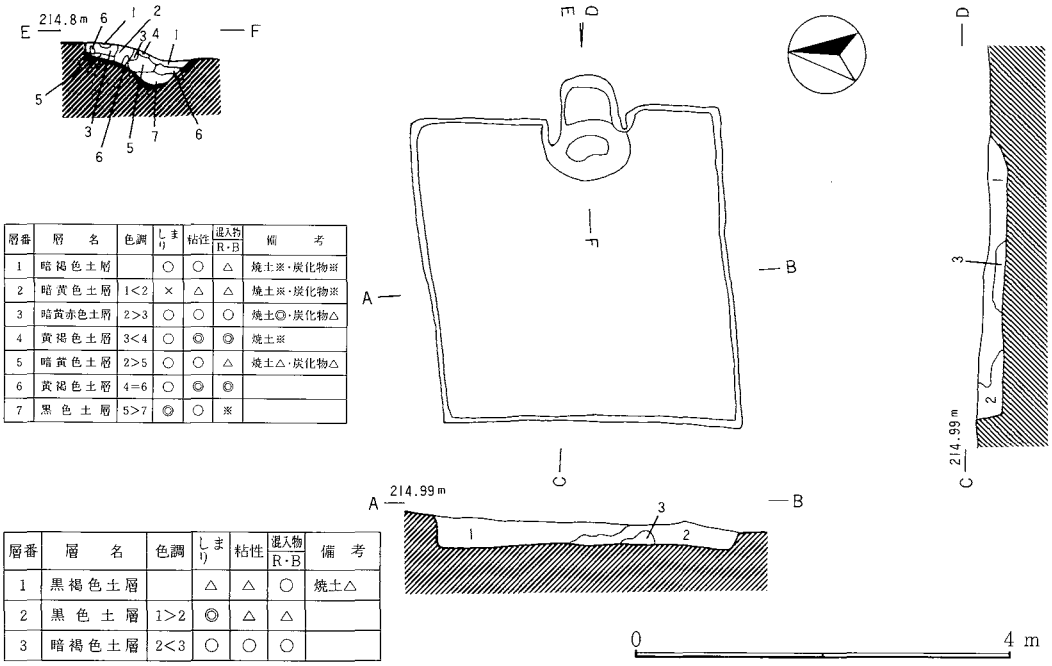
H－6号住居址（第51図）

J－12・13、K－12・13グリッドに位置し、他の遺構との重複はない。

住居址の平面形は長方形で、規模は約4m88cm×4m20cm、周壁は約42cmを計る。主軸方向はN－85°－Eを示す。柱穴は住居内住居外共に確認されなかった。カマドは、住居東側の南寄りと、北側の東寄りの2カ所に設けられており、袖部は2基共にローム混入の褐色土で作り付けられている。東側のカマドの袖の先端には両側に石がそえてある。住居址南の床面直上より、あまり遺存状態は良くなかったが炭化材が検出された。この住居が火災にあった可能性が考えられる。

遺物出土状況

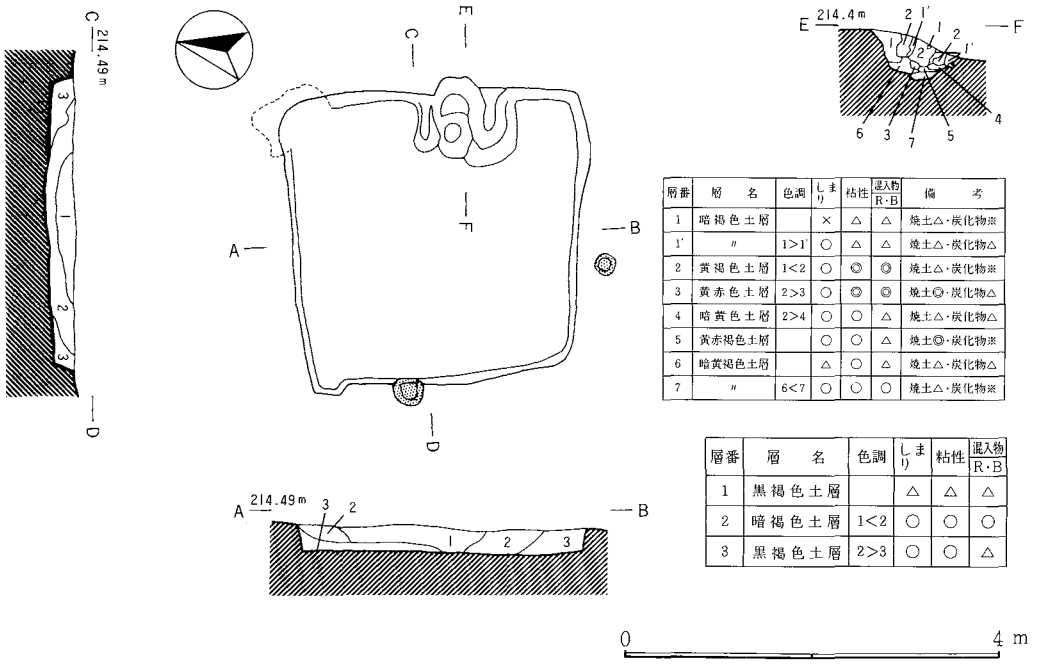
遺物の遺存状態は良く、北、東両カマドの周辺を中心に、土師器坏、甕、長胴甕、須恵器坏、蓋など多数出土した。復元可能な長胴甕も出土した。出土遺物から8世紀前半に属する住居と思



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R・B	備考
1	暗褐色土層		○	○	△	焼土※・炭化物※
2	暗黄色土層	1<2	×	△	△	焼土※・炭化物※
3	暗黄赤色土層	2>3	○	○	○	焼土◎・炭化物△
4	黄褐色土層	3<4	○	◎	◎	焼土※
5	暗黄色土層	2>5	○	○	△	焼土△・炭化物△
6	黄褐色土層	4=6	○	◎	◎	
7	黒色土層	5>7	◎	○	※	

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R・B	備考
1	黒褐色土層		△	△	○	焼土△
2	黒色土層	1>2	◎	△	△	
3	暗褐色土層	2<3	○	○	○	

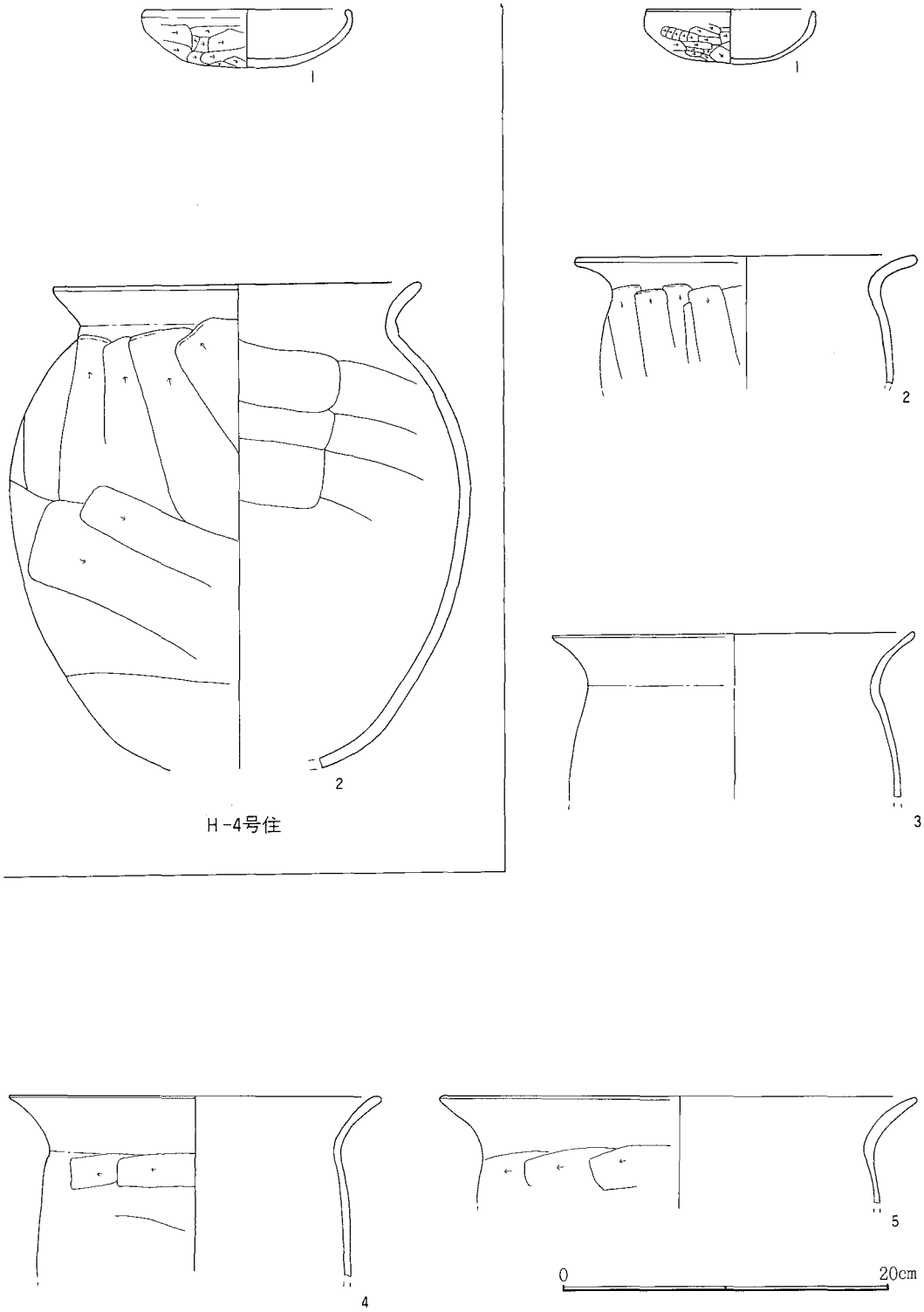
第47図　H－3号住居址実測図



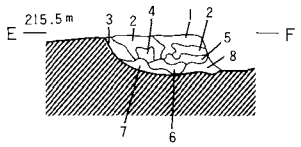
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R・B	備考
1	暗褐色土層		×	△	△	焼土△・炭化物※
1'	〃	1>1'	○	△	△	焼土△・炭化物△
2	黄褐色土層	1<2	○	◎	◎	焼土△・炭化物※
3	黄赤色土層	2>3	○	◎	◎	焼土◎・炭化物△
4	暗黄色土層	2>4	○	○	△	焼土△・炭化物△
5	黄赤褐色土層		○	○	△	焼土◎・炭化物※
6	暗黄褐色土層		△	○	△	焼土△・炭化物△
7	〃	6<7	○	○	○	焼土△・炭化物※

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R・B
1	黒褐色土層		△	△	△
2	暗褐色土層	1<2	○	○	○
3	黒褐色土層	2>3	○	○	△

第48図　H－4号住居址実測図

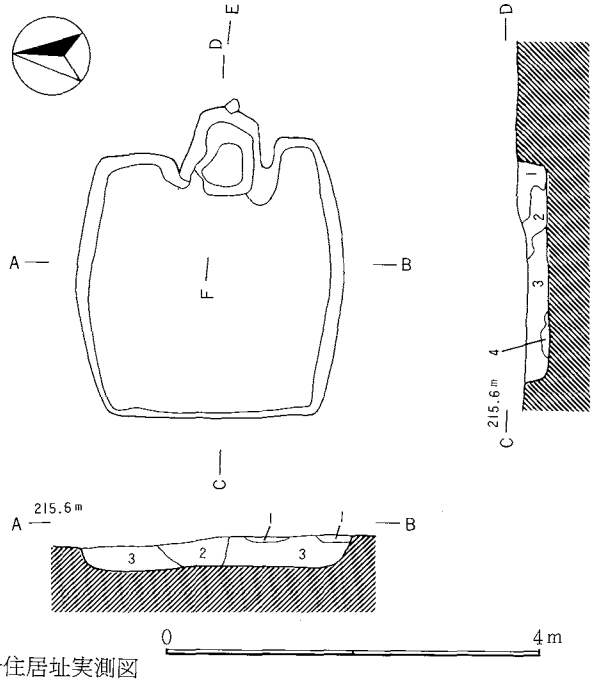


第49図　H－4・5号住居址出土の遺物

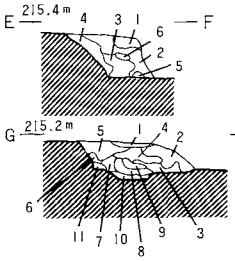


層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R・P	混入物 R・B	備考
1	黒褐色土層		○	○	※		
2	黄褐色土層	1<2	◎	◎	◎	◎	
3	黒褐色土層	1>3	△	○	△		焼土△
4	暗黄褐色土層	2>4	○	○	※		焼土※
5	暗黄赤褐色土層		○	○		※	焼土※
6	〃	5>6	○	○	△		
7	暗褐色土層	4<7	△	△			焼土◎
8	黒褐色土層	5>8	○	○	△		

層番	層名	しまり	粘性	混入物 R・P	混入物 R・B	混入物 W・P	備考
1	黒褐色土層	×	×				As-A○
2	黒褐色土層	◎	○	○			焼土△
3	暗褐色土層	○	○	△		△	
4	暗黄褐色土層	◎	○		○		



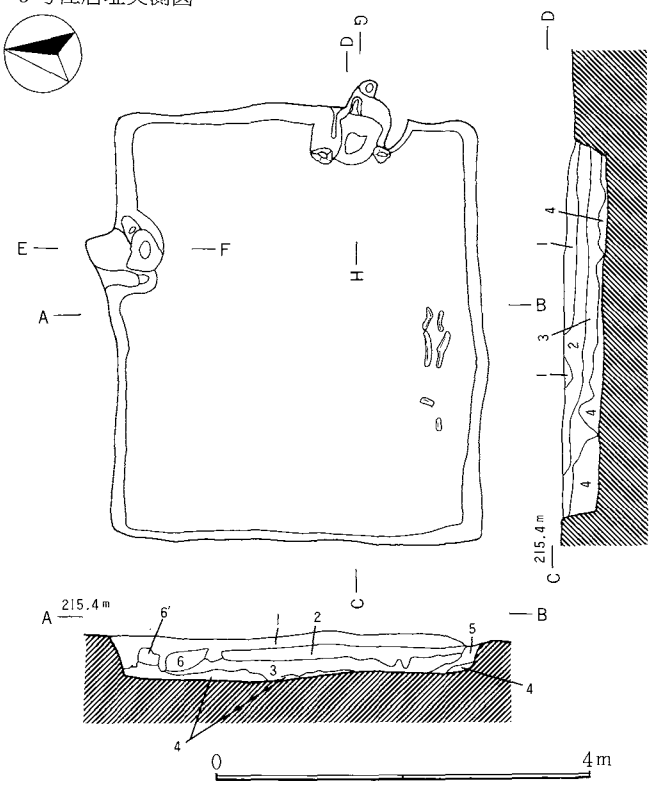
第50図　H－5号住居址実測図



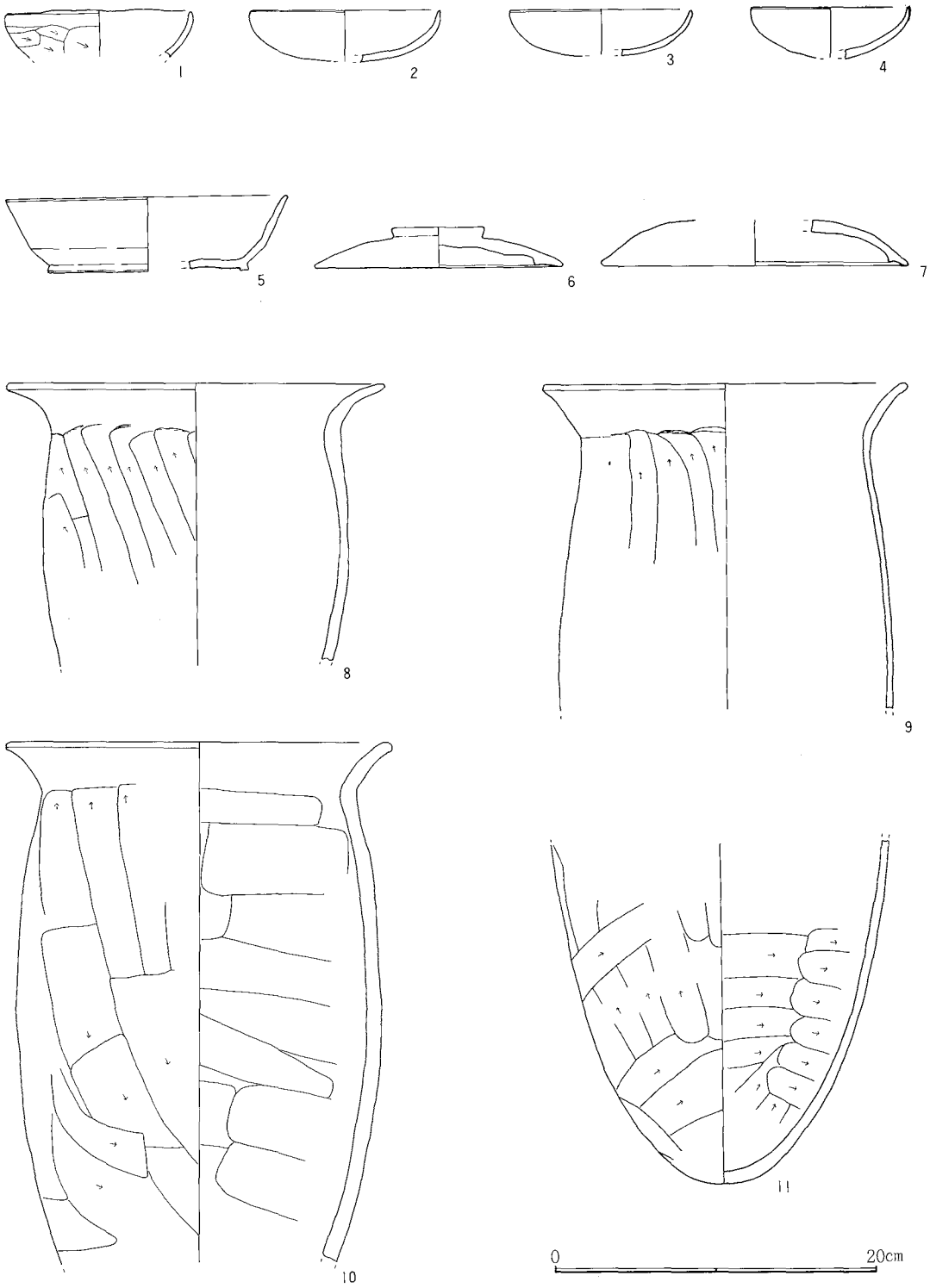
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・P	混入物 R・B	備考
1	暗褐色土層		◎	○	△	△		
2	暗黄褐色土層	1<2	○	○		○	※	
3	〃	2<3	○	○		○		焼土※
4	暗赤褐色土層		○	○		○		焼土◎
5	黄褐色土層		△	○		◎	◎	
6	黒色土層		△	×				

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・P	混入物 Y・P	備考
1	黒色土層		×	×				As-B△
2	暗褐色土層	1<2	○	○	※	※		
3	〃	2<3	△	○		△	△	
4	暗黄褐色土層	3<4	○	○	※	○	△	
5	黄褐色土層	4<5	○	○		○		焼土○
6	暗褐色土層		○	△	△			
7	褐色土層	6<7	○	○		△		焼土※
8	黄褐色土層	5>8	○	○		○		焼土○
9	〃	8<9	○	○		○		焼土○
10	赤褐色土層		×	×				焼土◎
11	褐色土層	7<11	○	○		△		焼土※

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・P	混入物 R・B	備考
1	黒褐色土層		△	×				As-B○
2	暗褐色土層		○	○	△	△		
3	〃	2<3	○	○	※	※		
4	暗黄褐色土層		○	◎		○		
5	〃	4>5	○	◎		○		
6	暗褐色土層	3<6	○	○	△	○		焼土△
6′	〃	6<6′	○	○	△		○	



第51図　H－6号住居址実測図



第52図　H－6号住居址出土の遺物

われる。

Ｈ－７号住居址（第53図）

Ｌ－７・８、Ｍ－８・９グリッドに位置し、Ｊ－10号住居址と重複し、東側コーナーの一部が調査区外に出る。

住居址の平面形はほぼ正方形で、規模は約５ｍ×４ｍ90cm、周壁は約70cmを計る。主軸方向はＮ－75°－Ｅを示す。柱穴は住居内に数本確認されたが、主柱穴がどれに当たるのか確認はできなかった。周壁下には周溝が廻り、周溝に沿ってピットが数基確認された。またＨ－１号住居址と同様、壁の中央付近に沿って小さな横穴が幾つも確認された。カマドは、住居東側に設けられており、袖部はローム混じりの褐色土で作り付けられている。確認面からの掘り込みが深かったため、カマドの遺存状態は良好であった。

遺物出土状況

遺物の遺存状態は良く、北壁中央分の床面直上より遺棄されたような状態で編物石が14点出土した。その他カマドには甕がかけられた状態で検出された。他の遺物の遺存状態も良く、住居址全体から土師器坏、甕、長胴甕、須恵器坏、平瓶、滑石製の紡錘車などが多数出土した。復元可能な甑、長胴甕も出土した。出土遺物から８世紀前半に属する住居と思われる。

Ｈ－８号住居址（第56図）

Ｌ－５・６、Ｍ－５・６グリッドに位置し、他の遺構との重複はない。

住居址の平面形は長方形で、規模は約５ｍ40cm×４ｍ、周壁は約42cmを計る。主軸方向はＮ－80°－Ｅを示す。柱穴は４本確認され、これが主柱穴と思われる。この他、住居外にも当住居に関係すると思われる柱穴が３基確認された。周壁下には周溝が廻り、西側で一部切れる部分があるため、出入口などの施設が考えられる。カマドは、住居東側のやや南寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土で作り付けられている。

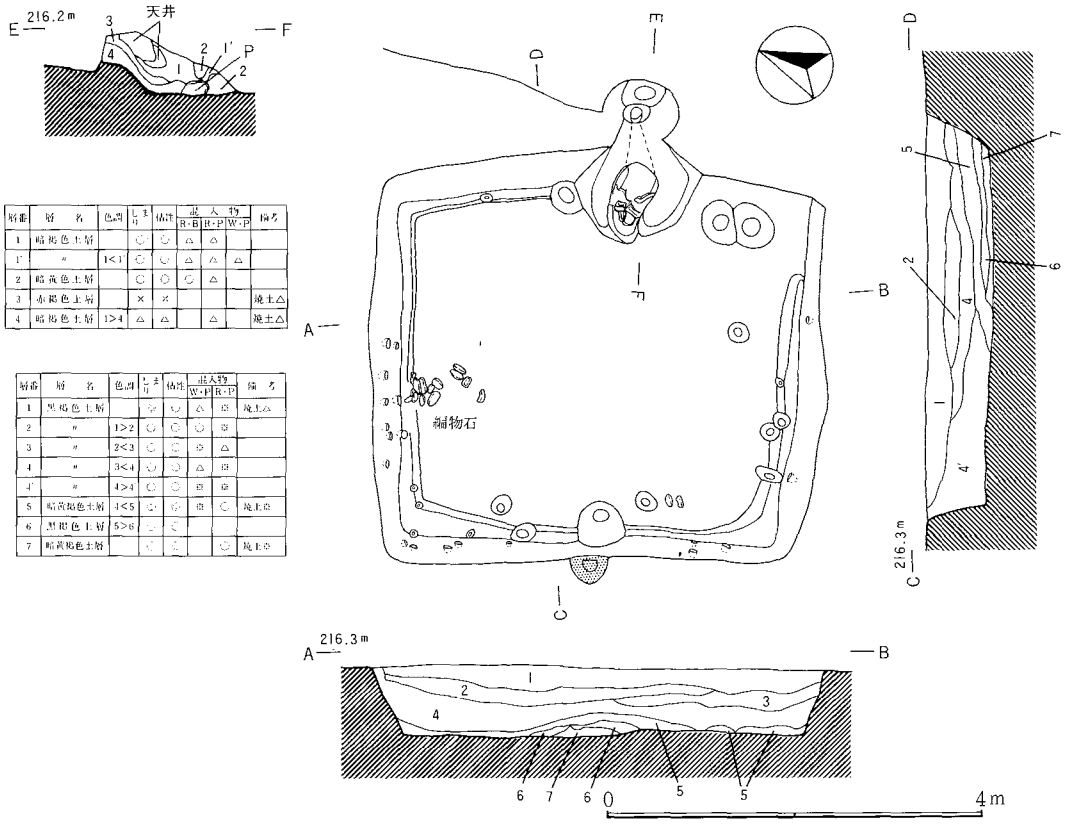
遺物出土状況

遺物は、カマド周辺に土師器杯、長胴甕、須恵器坏等が十数点出土した。出土遺物から８世紀中半に属する住居と思われる。

Ｈ－９号住居址（第58図）

Ｌ－４・５、Ｍ－４・５グリッドに位置し、南壁と西壁の一部が調査区外で、西側は周壁が確認できなかった。

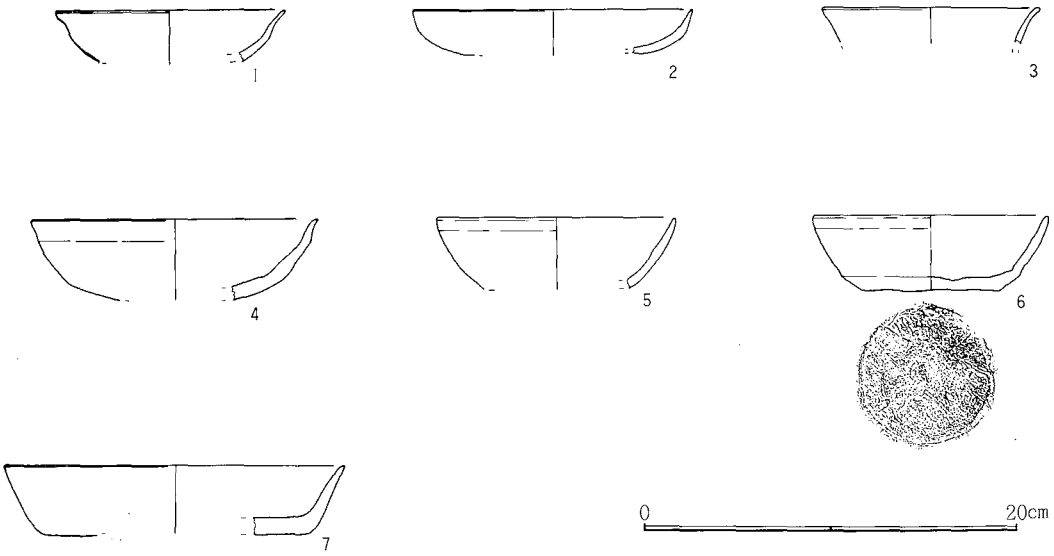
住居址の平面形は正方形と推測され、規模は約５ｍ30cm×４ｍ60cm、周壁は深いところで20cmを計る。主軸方向はＮ－95°－Ｅを示す。柱穴は、主柱穴と思われるものが１基確認され、住居址



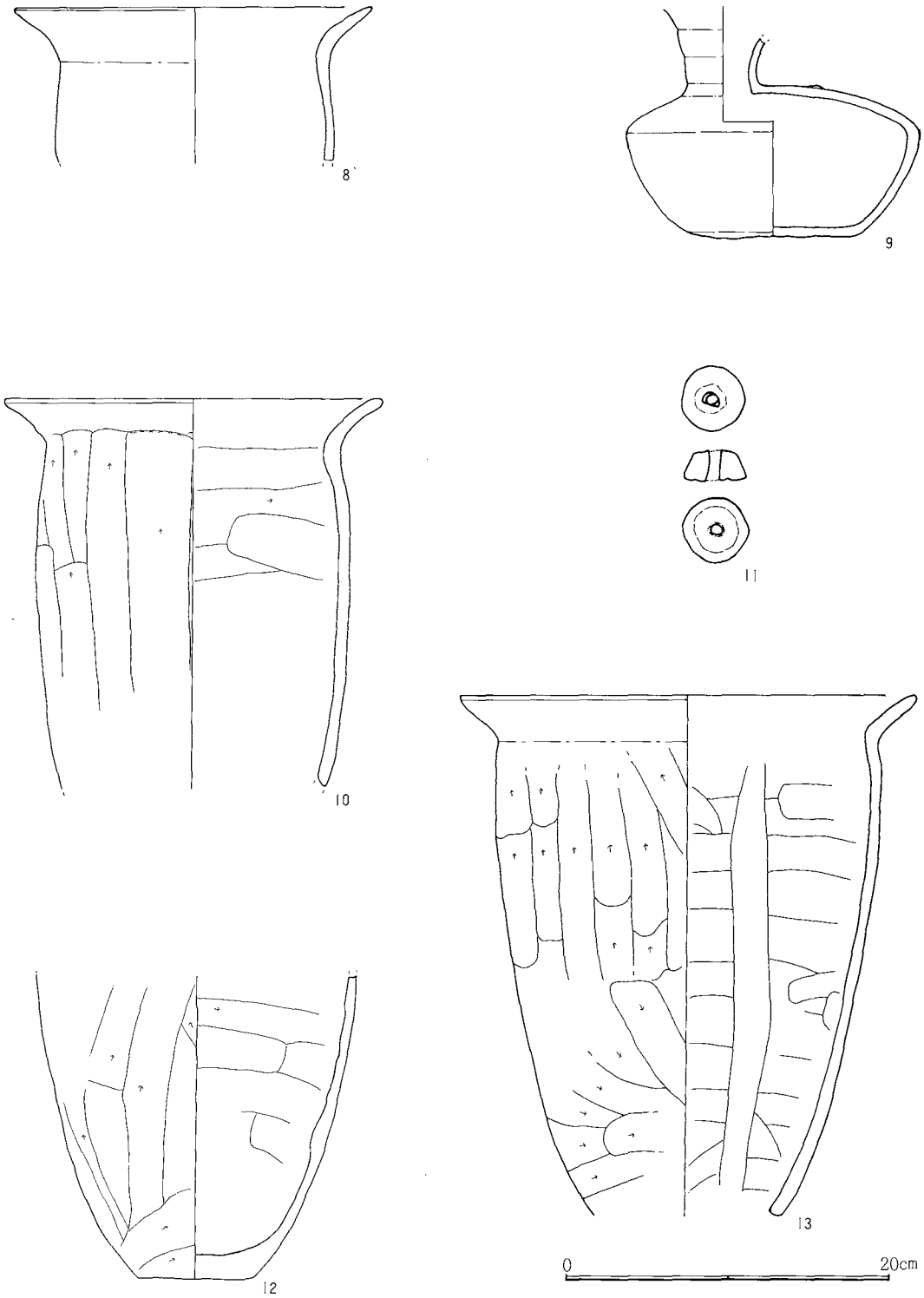
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R・B	混入物 R・P	混入物 W・P	備考
1	暗褐色土層		○	○	△	△		
1'	〃	1<1'	○	○	△	△	△	
2	暗黄色土層		○	○	○	△		
3	赤褐色土層		×	×				焼土△
4	暗褐色土層	1>4	△	△		△		焼土△

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・P	備考
1	黒褐色土層		☆	○	△	☆	焼土△
2	〃	1>2	○	○	○	☆	
3	〃	2<3	○	○	☆	△	
4	〃	3<4	○	○	△	☆	
4'	〃	4>4'	○	○	☆	☆	
5	暗黄褐色土層	4<5	○	☆	☆	○	焼土☆
6	黒褐色土層	5>6	○	○			
7	暗黄褐色土層		○	○		○	焼土☆

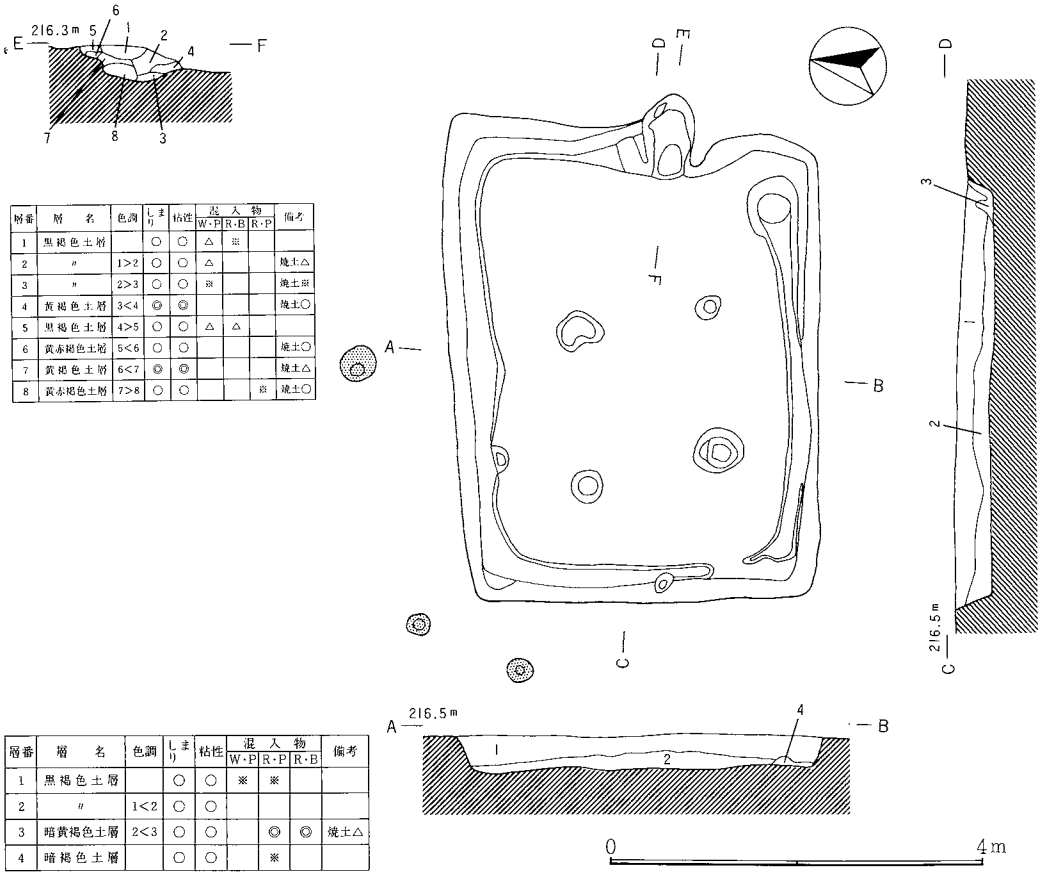
第53図　H－7号住居址実測図



第54図　H－7号住居址出土の遺物(1)



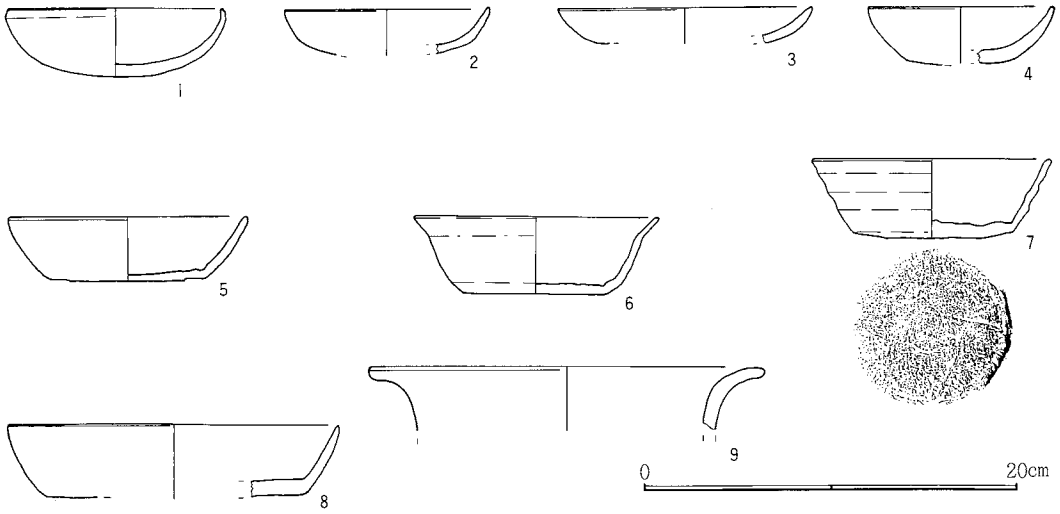
第55図　H－7号住居址出土の遺物(2)



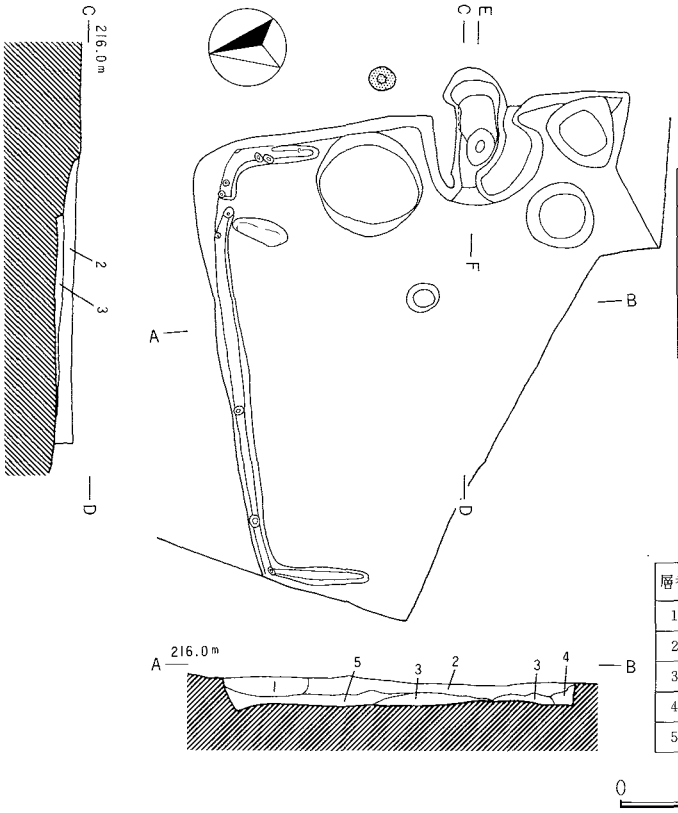
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・B	混入物 R・P	備考
1	黒褐色土層		○	○	△	※		
2	〃	1>2	○	○	△			焼土△
3	〃	2>3	○	○	※			焼土※
4	黄褐色土層	3<4	◎	◎				焼土○
5	黒褐色土層	4>5	○	○	△	△		
6	黄赤褐色土層	5<6	○	○				焼土○
7	黄褐色土層	6<7	◎	◎				焼土△
8	黄赤褐色土層	7>8	○	○			※	焼土○

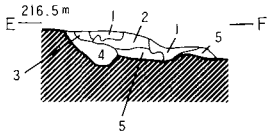
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・P	混入物 R・B	備考
1	黒褐色土層		○	○	※	※		
2	〃	1<2	○	○				
3	暗黄褐色土層	2<3	○	○		◎	◎	焼土△
4	暗褐色土層		○	○		※		

第56図　H－8号住居址実測図



第57図　H－8号住居址出土の遺物



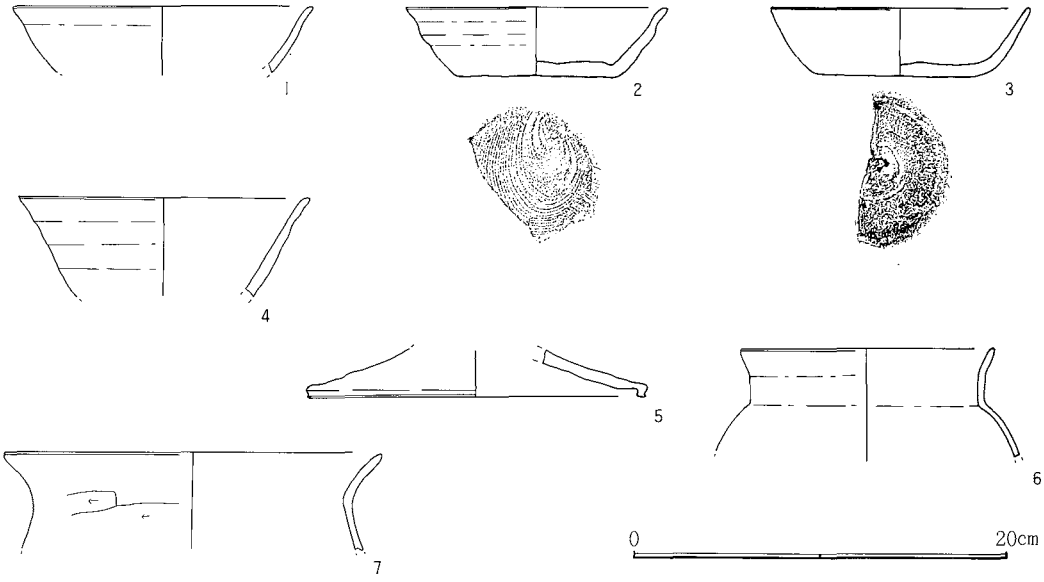


層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・B	備考
1	暗褐色土層		○	○	※		
2	暗黄褐色土層	5<2	○	○			焼土○
3	暗赤褐色土層	2>3	○	○			焼土◎
4	〃	3<4	○	○		△	焼土◎
5	暗黄褐色土層	1<5	○	○			焼土△

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 R・P	備考
1	黒色土層		×	×			As-A◎
2	〃	1>2	○	○	※	※	
3	黒黄褐色土層	2<3	◎	◎		◎	焼土※
4	暗黄褐色土層		○	○	※		焼土△
5	黒褐色土層	2<5	○	○			

0 4m

第58図　H－9号住居址実測図



第59図　H－9号住居址出土の遺物

外に当住居に関係すると思われる柱穴が1基確認された。周壁下には周溝が確認され、H－8号住居址と同様西側が一部切れるために、出入口などの施設が考えられる。カマドは、住居東側のやや南寄りに設けられており、袖部はローム混入の褐色土で作り付けられている。カマドを囲み土壙が3基確認されたが、そのうちカマド南側の2基が貯蔵穴と思われる。

遺物出土状況

遺物は、カマド周辺、貯蔵穴を中心に土師器坏、甕、須恵器坏、蓋など十数点出土した。出土遺物から11世紀前半に属する住居と思われる。

H－10号住居址（第60図）

J－5・6、K－5・6グリッドに位置し、他の遺構との重複はない。

住居址の平面形はほぼ正方形で、規模は約3m50cm×3m40cm、周溝は約65cmを計る。主軸方向はN－80°－Eを示す。柱穴は、住居址内に数基確認されたが主柱穴と思われるものは確認されなかった。住居址外に当住居に関係すると思われる柱穴が確認され、それぞれ掘り込みのしっかりしたものが多く、主柱穴が住居の掘り込みの外側に存在した可能性が考えられる。周壁の中央に沿って、当住居でも小さな横穴が幾つも確認された。カマドは、住居東側のやや南寄りに設けられ、袖部はローム混じりの褐色土で作り付けられている。確認面からの掘り込みが深かったため、カマドの遺存状態は良好であった。貯蔵穴は、カマド南側に確認された。

遺物出土状況

遺物の遺存状態は良く、カマドに甕がかかった状態で検出された。その他住居址全体から土師器坏、甕、長胴甕、須恵器坏など多数出土した。復元可能な甕、長胴甕も出土した。出土遺物から8世紀中半に属する住居と思われる。

H－11号住居址（第61図）

H－6・7グリッドに位置し、住居の北側半分が調査区外に出てしまい、カマドも確認できなかった。周壁は30cmを計る。柱穴は住居内、外共に確認できなかった。

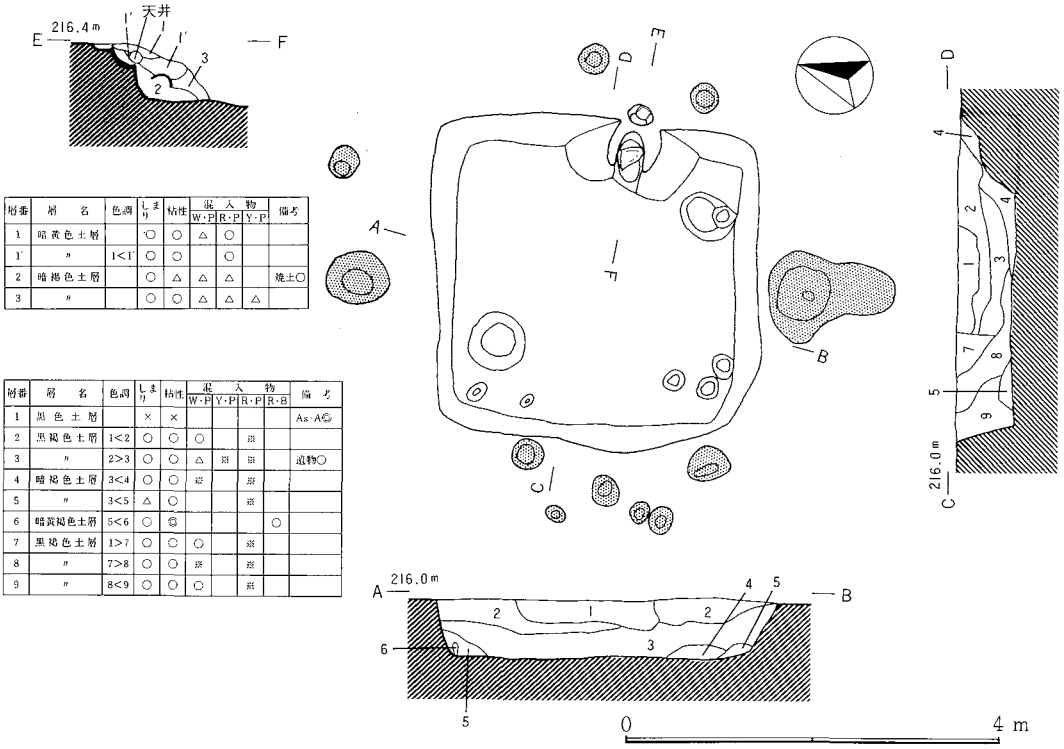
遺物出土状況

遺物は出土しなかった。

H－12号住居址（第63図）

G－14、H－13・14グリッドに位置し、他の遺構との重複はない。

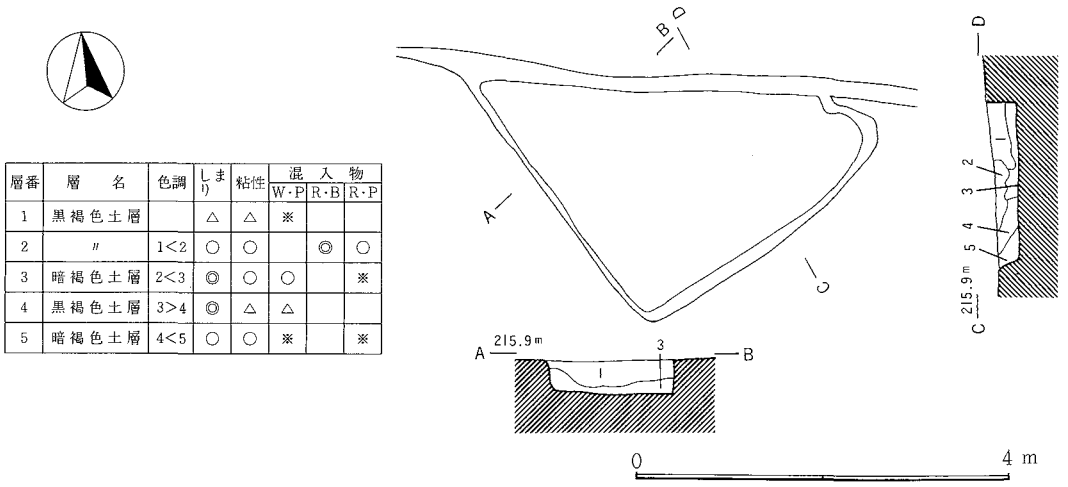
住居址の平面形は長方形で、規模は約4m50cm×3m50cm、周壁は深い所で約64cmを計る。主軸方向はN－65°－Eを示す。柱穴は、住居内、住居外共に確認されなかった。カマドは、住居東



層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	R・P	Y・P	備考
1	暗黄色土層		○	○	△	○		
1'	〃	1<1'	○	○		○		
2	暗褐色土層		○	△	△	△		焼土○
3	〃		○	○	△	△	△	

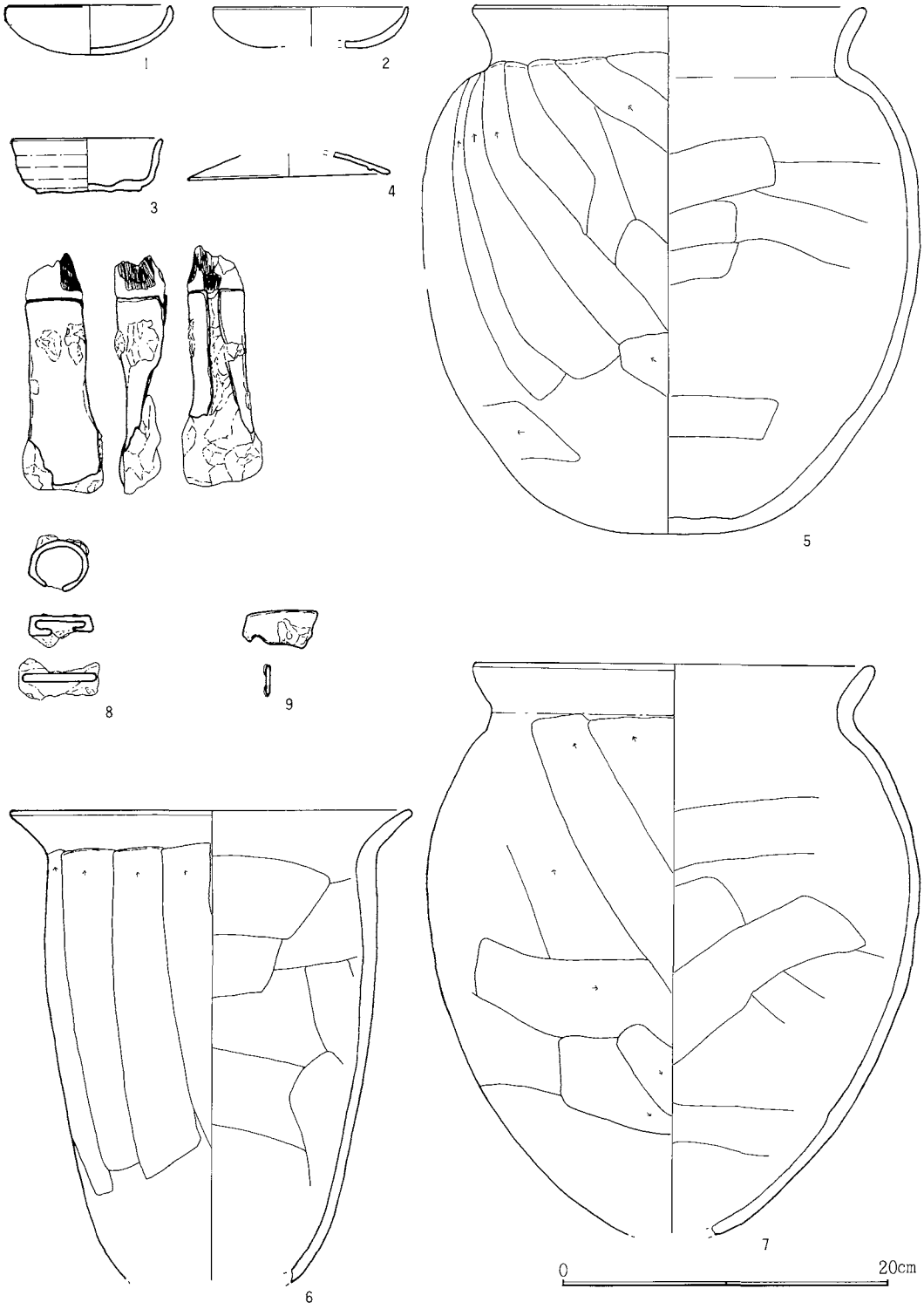
層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	Y・P	R・P	R・B	備考
1	黒色土層		×	×					As・A◎
2	黒褐色土層	1<2	○	○	○		※		
3	〃	2>3	○	○	△	※	※		遺物○
4	暗褐色土層	3<4	○	○	※		※		
5	〃	3<5	△	○			※		
6	暗黄褐色土層	5<6	○	◎				○	
7	黒褐色土層	1>7	○	○	○		※		
8	〃	7>8	○	○	※		※		
9	〃	8<9	○	○	○		※		

第60図　H－10号住居址実測図

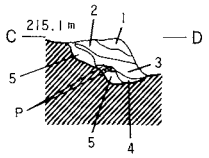


層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	R・B	R・P
1	黒褐色土層		△	△	※		
2	〃	1<2	○	○		◎	○
3	暗褐色土層	2<3	◎	○	○		※
4	黒褐色土層	3>4	◎	△	△		
5	暗褐色土層	4<5	○	○	※		※

第61図　H－11号住居址実測図

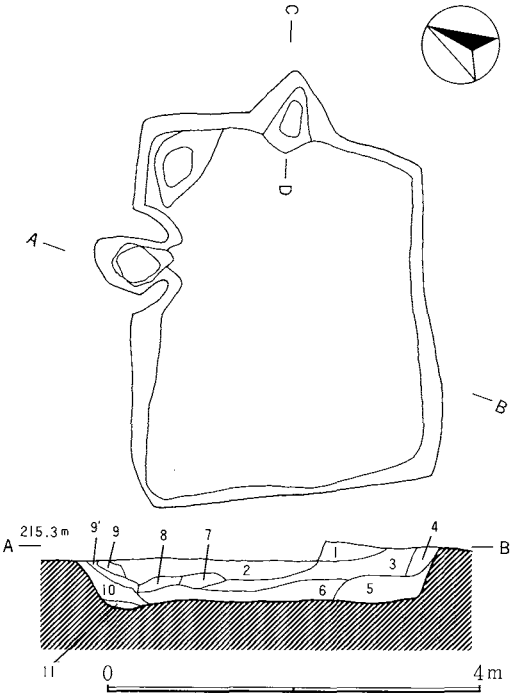


第62図　H－10号住居址出土の遺物

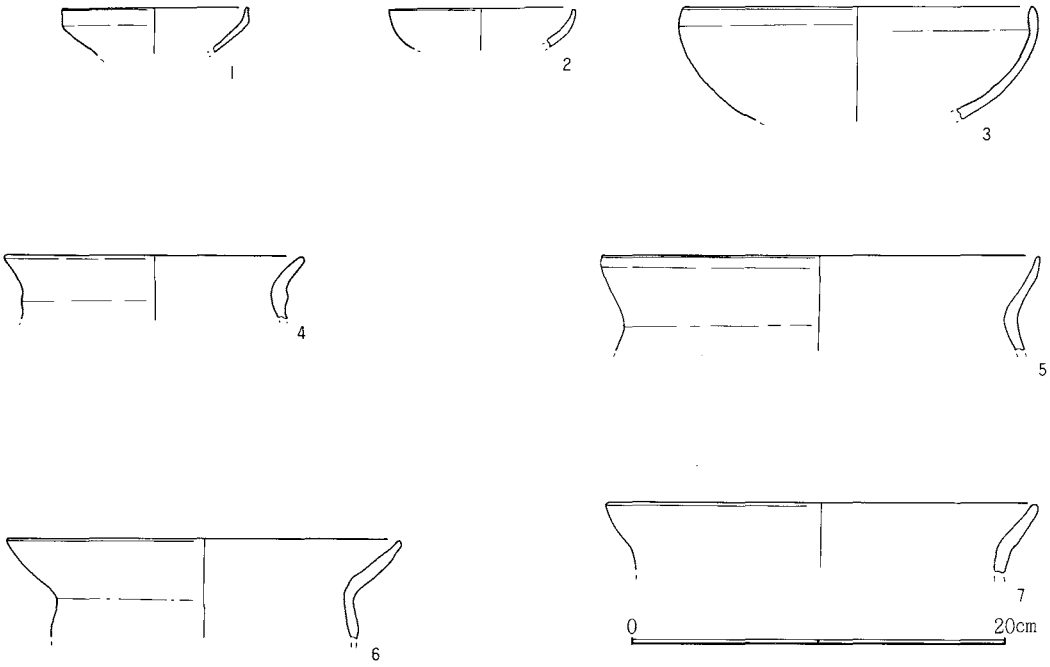


層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R・P	混入物 Y・P	混入物 R・B	備考
1	黒褐色土層		△	△	※			
2	暗黄褐色土層		○	○	○	※		焼土※
3	〃	2>3	○	○	△	※		
4	〃	3<4	○	○	○	※	△	
5	黄褐色土層		○	◎	◎			焼土※

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 W・P	混入物 Y・P	混入物 R・P	備考
1	黒褐色土層		○	○	※	※		
2	暗褐色土層	1<2	○	○		※	△	焼土※
3	〃	2>3	○	○		※	※	
4	〃	3>4	○	○	※	※	※	
5	〃	3>5	○	○	※	※	※	
6	〃	3>6	○	○	※	※	※	焼土※
7	〃	2<7	○	○		○	※	
8	暗黄褐色土層	7<8	○	○		※	○	焼土※・炭化物※
9	〃	8>9	○	○			○	焼土○
9'	〃	8<9'	○	○			○	焼土○
10	赤褐色土層	9'<10	○	○			△	焼土◎・炭化物※
11	暗黄褐色土層	10>11	○	○			△	焼土※



第63図　H－12号住居址実測図



第64図　H－12号住居址出土の遺物

側と北側東寄りに2基確認された。北側のカマドの袖部はローム混じりの褐色土で作り付けられていた。東側のカマドは袖が確認されなかった。貯蔵穴は北東コーナー部分に確認された。

遺物出土状況

遺物は、住居址全体から土師器坏、甕等が十数点出土した。出土遺物から7世紀後半から8世紀前半に属する住居と思われる。

(2) 遺物観察表

遺構名称	遺物番号	器種	法量(cm)	調整技法	胎土	色調	残存	備考
H－1住	No.1	土師器坏	器高：4.5 口径：15.0	外面：口縁部横ナデ、体底部縦横方向へラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	2/3	内面にスス付着
H－1住	No.2	土師器坏	器高：3.2 口径：10.5	〃	〃	〃	〃	〃
H－1住	No.3	土師器坏	器高：4.1 口径：13.1	〃	〃	〃	1/3	〃
H－1住	No.4	土師器甕	器高：7.6 口径：22.5	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向へラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	〃	口縁部から胴上部1/3	口唇部にスス付着
H－1住	No.5	土師器長胴甕	器高：6.0 口径：22.5	〃	〃	〃	〃	〃
H－2住	No.1	土師器坏	器高：2.5 口径：13.5	外面：口縁部横ナデ、体底部へラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	〃	1/6	
H－2住	No.2	土師器坏	器高：4.6 口径：13.4	外面：口縁部横ナデ、体底部縦横方向へラケズリ 内面：横ナデ	〃	褐色	1/2	
H－2住	No.3	須恵器坏	器高：4.0 口径：14.0	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	1/2	
H－2住	No.4	土師器甕	器高：6.2 口径：22.4	外面：口縁部横ナデ、胴部へラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁部から胴上部1/6	
H－2住	No.5	土師器長胴甕	器高：12.2 口径：24.4	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向へラケズリ 内面：横ナデ	〃	褐色	〃	
H－4住	No.1	土師器坏	器高：3.6 口径：12.2	外面：口縁部横ナデ、体底部縦横方向へラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	ほぼ完形	
H－4住	No.2	土師器甕	器高：29.3 口径：22.2	外面：口縁部横ナデ、胴部縦横方向へラケズリ 内面：〃	砂粒を少量含む	〃	4/5	胴中央部から下にスス付着
H－5住	No.1	土師器坏	器高：3.5 口径：10.0	外面：口縁部横ナデ、体底部横方向へラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	〃	完形	口唇部にスス付着
H－5住	No.2	土師器長胴甕	器高：8.1 口径：20.6	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向へラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	〃	口縁部から胴上部1/4	

遺構名称	遺物番号	器種	法量(cm)	調整技法	胎土	色調	残存	備考
H－5住	No.3	土師器 長胴甕	器高：10.0 口径：22.0	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁部から胴上部1/4	磨滅が著しい
H－5住	No.4	土師器 長胴甕	器高：10.5 口径：22.5	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ 内面：横ナデ	〃	〃	口縁部から胴上部1/3	
H－5住	No.5	土師器 長胴甕	器高：6.8 口径：28.6	〃	〃	〃	〃	
H－6住	No.1	土師器 坏	器高：2.7 口径：11.3	外面：口縁部横ナデ、体底部横方向ヘラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/3	
H－6住	No.2	土師器 坏	器高：3.0 口径：11.5	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ 内面：横ナデ	〃	〃	1/4	
H－6住	No.3	土師器 坏	器高：3.0 口径：11.0	〃	〃	〃	〃	
H－6住	No.4	土師器 坏	器高：3.0 口径：9.8	〃	〃	〃	〃	
H－6住	No.5	須恵器 高台坏	器高：4.5 口径：17.4 底径：12.5	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	2/3	
H－6住	No.6	須恵器 蓋	器高：2.4 口径：15.0 底径：5.5	内外面共に回転横ナデ	〃	〃	4/5	
H－6住	No.7	須恵器 蓋	器高：2.9 口径：18.6	〃	〃	〃	1/4	
H－6住	No.8	土師器 甕	器高：17.4 口径：23.0	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁部から胴部1/3	
H－6住	No.9	土師器 長胴甕	器高：20.0 口径：22.0	〃	〃	〃	〃	
H－6住	No.10	土師器 長胴甕	器高：31.6 口径：23.0	外面：口縁部横ナデ、胴部縦横方向ヘラケズリ 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ	〃	〃	1/5	胴下部にスス付着
H－6住	No.11	土師器 長胴甕	器高：21.0	外面：胴部縦方向ヘラケズリ 内面：縦横方向ヘラケズリ	〃	〃	胴中央部から底部1/2	〃
H－7住	No.1	土師器 坏	器高：3.0 口径：12.0	外面：口縁部横ナデ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	〃	1/6	磨滅が著しい
H－7住	No.2	土師器 坏	器高：2.5 口径：14.9	〃	〃	〃	〃	〃
H－7住	No.3	須恵器 坏	器高：2.0 口径：11.5	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	1/5	
H－7住	No.4	土師器 坏	器高：4.3 口径：15.0	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/4	磨滅が著しい
H－7住	No.5	須恵器 坏	器高：3.8 口径：12.5	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	1/3	

遺構名称	遺物番号	器種	法量(cm)	調整技法	胎土	色調	残存	備考
H－7住	No.6	須恵器 坏	器高： 4.0 口径：12.5 底径： 7.2	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰色	3/5	
H－7住	No.7	須恵器 坏	器高： 3.5 口径：18.0 底径：14.0	内外面共に回転横ナデ	〃	〃	1/4	
H－7住	No.8	土師器 長胴甕	器高： 9.4 口径：21.9	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁部から胴上部1/3	
H－7住	No.9	須恵器 平瓶	器高：14.0 口径：10.5	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	7/8	
H－7住	No.10	土師器 長胴甕	器高：23.6 口径：23.0	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁部から胴部1/2	胴中央部にス付着
H－7住	No.11	石製 紡錘車			滑石		完形	
H－7住	No.12	土師器 長胴甕	器高：18.5 口径： 7.0	外面：縦横方向ヘラケズリ 内面：横方向ヘラケズリ	砂粒を少量含む	赤褐色	胴中央部から底部2/3	
H－7住	No.13	土師器 長胴甕	器高：31.5 口径：27.7 底径：11.4	外面：口縁部横ナデ、胴部縦横方向ヘラケズリ 内面：〃	〃	〃	4/5	甑
H－8住	No.1	土師器 坏	器高： 3.6 口径：11.4	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	〃	3/4	
H－8住	No.2	土師器 長胴甕	器高： 2.5 口径：10.9	〃	〃	〃	1/6	
H－8住	No.3	土師器 長胴甕	器高： 1.9 口径：13.2	〃	〃	〃	〃	
H－8住	No.4	土師器 長胴甕	器高： 3.0 口径：10.0	〃	〃	〃	1/5	
H－8住	No.5	須恵器 坏	器高： 3.5 口径：12.6 底径： 8.2	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰白色	5/6	
H－8住	No.6	須恵器 坏	器高： 4.0 口径：13.0 底径： 7.5	〃	〃	灰色	完形	
H－8住	No.7	須恵器 坏	器高： 4.1 口径：12.6 底径： 8.5	〃	〃	〃	ほぼ完形	
H－8住	No.8	須恵器 坏	器高： 4.0 口径：17.5 底径：13.5	〃	〃	〃	1/5	
H－8住	No.9	土師器 長胴甕	器高： 3.3 口径：21.0	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁部から胴上部1/7	
H－9住	No.1	須恵器 坏	器高： 3.5 口径：15.4	内外面共に回転横ナデ	緻密	灰色	1/6	
H－9住	No.2	須恵器 坏	器高： 3.6 口径：13.5 底径： 8.5	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	〃	灰白色	2/3	

遺構名称	遺物番号	器　種	法量(cm)	調　整　技　法	胎　　土	色　調	残　存	備　考
H－9住	No.3	須恵器坏	器高：3.6 口径：14.0 底径：8.5	内外面共に回転横ナデ 底部回転糸切り	緻密	灰　色	1/2	
H－9住	No.4	須恵器坏	器高：5.0 口径：15.5	内外面共に回転横ナデ	〃	〃	1/5	
H－9住	No.5	須恵器蓋	器高：2.5 口径：18.0	〃	〃	〃	1/4	
H－9住	No.6	土師器甕	器高：5.9 口径：13.5	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ 内面：横ナデ	砂粒を少量含む	赤褐色	口縁部から胴上部1/2	
H－9住	No.7	土師器長胴甕	器高：5.1 口径：20.0	外面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ 内面：横ナデ	〃	〃	口縁部から胴上部1/5	
H－10住	No.1	土師器坏	器高：3.0 口径：10.0	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	〃	1/4	
H－10住	No.2	土師器坏	器高：2.2 口径：11.9	〃	〃	〃	1/6	
H－10住	No.3	須恵器坏	器高：3.2 口径：9.0	内外面共に回転横ナデ、底部回転糸切り	緻密	灰　色	完形	
H－10住	No.4	須恵器蓋	器高：1.4 口径：12.4	〃	〃	〃	1/5	
H－10住	No.5	土師器甕	器高：31.8 口径：23.5 底径：6.0	外面：口縁部横ナデ、胴部縦横方向ヘラケズリ 内面：口縁部横ナデ、胴部横方向ヘラケズリ	砂粒を少量含む	赤褐色	5/6	
H－10住	No.6	土師器長胴甕	器高：28.4 口径：24.4	外面：口縁部横ナデ、胴部縦方向ヘラケズリ 内面：口縁部横ナデ、胴部縦横方向ヘラケズリ	〃	〃	3/5	
H－10住	No.7	土師器甕	器高：34.5 口径：24.4	外面：口縁部横ナデ、胴部縦横方向ヘラケズリ 内面：〃	〃	〃	1/2	
H－10住	No.8	斧	刃部：5.0 長さ：11.5	鉄製			刃部を一部欠く	木の柄に装着
H－10住	No.9	鎌	長さ：4.5	〃			1/4	
H－12住	No.1	土師器坏	器高：2.4 口径：10.0	外面：口縁部横ナデ、体底部ヘラケズリ 内面：横ナデ	細砂粒を少量含む	赤褐色	1/6	
H－12住	No.2	土師器坏	器高：2.1 口径：10.0	〃	〃	〃	1/7	
H－12住	No.3	土師器坏	器高：6.0 口径：18.6	〃	〃	〃	1/3	表面の磨滅が著しい
H－12住	No.4	土師器甕	器高：3.4 口径：15.6	外面：口縁部横ナデ 内面：〃	砂粒を少量含む	〃	口縁部1/6	
H－12住	No.5	土師器長胴甕	器高：5.0 口径：23.0	外面：口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ 内面：横ナデ	〃	〃	口縁部から胴上部1/8	
H－12住	No.6	土師器長胴甕	器高：5.5 口径：21.0	〃	〃	〃	口縁部から胴上部1/5	
H－12住	No.7	土師器長胴甕	器高：3.6 口径：23.0	外面：口縁部横ナデ 内面：〃	〃	〃	口縁部1/6	

IX　成果と問題点

1　縄文時代前期Ⅰ、Ⅱ群土器について

今回の調査により縄文時代前期諸磯式の良好な資料を多数得ることができた。本文中においてこれら諸磯式を一括してⅠ群土器として扱ってきたが、ここではこれらの土器を細分し概観してみたい。

Ⅰ群土器は、J－1、J－2、J－3、J－4a、J－5、J－7、J－9、J－10号住居址から出土している。特にJ－3、J－4a号住居址からはまとまって出土している。土器の細分に当たっては、J－3、J－4a号住居址出土土器の層位及び、現在までの諸磯式土器編年研究の結果を踏まえて行いたいと思う。

諸磯a、b、c式中特に、諸磯b式土器については出土数も多く、土器の出土層位から爪形文を主体とした段階（古）と、浮線文を主体とした段階（新）、沈線文を主体とした段階（新）に区分することができた。

以下それぞれについて概観してみたい。

諸磯a式土器

資料数は少ないが、J－3号住居址、J－4号住居址より出土している。器面全体に単節斜縄文を施文しているもの、平行沈線により文様構成しているものがみられる。

諸磯b式土器（古）

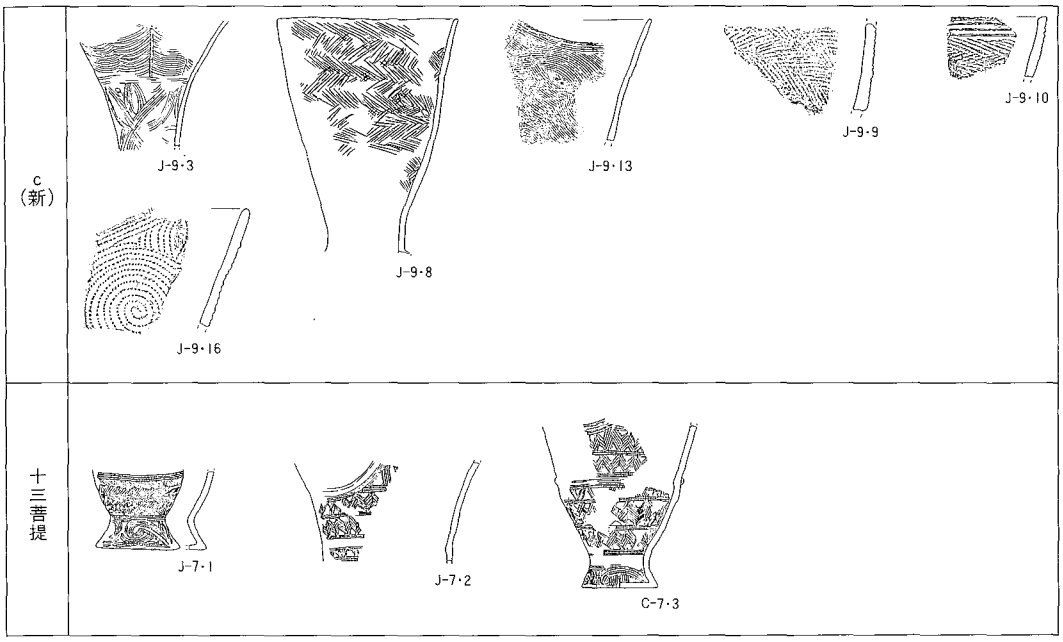
資料数はJ－3号住居址を中心として、諸磯b式が最も多い。J－3号住の土器の出土層位や、今までの編年研究を踏まえ、榎木畑遺跡では、諸磯b式を古、新（浮線系）、新（沈線系）の3細分にすることができそうである。

この段階の土器は、J－1、J－2、J－3、J－4a、J－9、J－10号住居址より出土している。半截竹管状工具による幅広の内側爪形文、円形竹管文、篦状工具による刻み目により文様構成している土器が主体を成す。

諸磯b式土器（新、浮線系）

諸磯b式（新、浮線系）と諸磯b式（新、沈線系）は浮線系が古く位置づけられているが、榎木畑遺跡においてははっきりとした時間差は見い出せなかった。時間差はあってもそれはごくわずかで、諸磯式b式のバリエーションとして考えたい。なお同様の例として花鳥山遺跡・水呑場北遺跡（長沢1989）がある。花鳥山遺跡・水呑場北遺跡においても、爪形文主体の古段階と浮線文・沈線文主体の新段階とに区分し、浮線文・沈線文は時間差はあってもわずかであり、諸磯b

第65図　諸磯式土器編年図(1)



第66図　諸磯式土器編年図(2)

式のバリエーションとして捉えている。

この段階の土器は、Ｊ－２、Ｊ－３、Ｊ－４、Ｊ－５号住居址より出土している。地文に単節の斜縄文を施文した後、篦状工具により刻み目をもつ浮線文を施文している土器が主体を占める。浮線文上に爪形文を施すもの、縄文を施すものもある。この他、篦状工具による刻み目も上下の浮線文で矢羽状になるものと同じ方向に刻まれ矢羽状にならないものとがある。

諸磯ｂ式（新、沈線文系）

この段階の土器は、Ｊ－３号住居址より出土している。地文に単節の斜縄文を施文した後、半截竹管による平行沈線により文様構成している土器が主体を占める。諸磯ｂ式（新、沈線系）がＪ－３号住居址から出土して、他の諸磯ｂ式を出土している住居址からは出土していないことから、前記した様に、ただ単に諸磯ｂ式のバリエーションとして捉えてよいかどうか他遺跡との比較および資料の増加を待ち、今後の課題としたい。

諸磯ｃ式（古）

諸磯ｃ式は古、新の２細分にできる。

この段階の土器は、Ｊ－１号住居址より出土している。半截竹管状工具による集合沈線文、棒状、耳状、円形状貼付文により文様構成している土器が主体を成す。

諸磯ｃ式（新）

この段階の土器は、Ｊ－２、Ｊ－９、Ｊ－10号住居址より出土している。半截竹管による平行

沈線、連孤状、山形状、渦巻状、羽状を施文している土器が主体を成す。Ｊ－９号住居址16等は平行沈線上に結節浮線文を施す土器で、今回資料数が少ないため、諸磯ｃ式（新）に入れたが、さらにこの中を２細分することができそうである。

十三菩提式

この段階の土器は、Ｊ－７、Ｊ－９号住居址より出土している。半截竹管状工具の平行沈線文＋箆状工具による刻み目＋爪形文と交互刺突＋三角印刻文を施文している土器が主体を成す。器形はトロフィー形で、口縁部は４単位の波状を呈する。

以上の様に本遺跡においての土器細分を示すことができたが、出土した土器の点数は非常に多く、これら多数の資料を詳細に分析するには、今回十分な時間を得ることができなかった。

特に諸磯ｂ式については、今回３細分することができたが不十分な点が多い。浮線文系土器と沈線文系土器についても、その新旧関係についてわずかな時間差が存在するだけで、諸磯ｂ式のバリエーションとして捉えたが、前記した様にこの点についても今後さらに検討を重ねてゆく必要がある。

諸磯ｃ式については、今回２細分することができた。ｃ式（新）の段階では更に２細分することができそうであり、この段階の資料の増加を待ち分析を行っていきたい。

また、未報告の道前久保・道前久保II遺跡からも諸磯ｂ式、諸磯ｃ式、のまとまった資料が検出されている。この遺跡からは諸磯ｂ式の出土数も多いが、今回出土数の少なかった諸磯ｃ式(古)段階の資料が多く検出されているので、道前久保・道前久保II遺跡報告時に他地域との比較検討も踏まえ、再度諸磯ｂ式(特に浮線文系と沈線文系の土器を中心に)、諸磯ｃ式の分析を行いたいと思う。

参考文献

石坂　茂他　1988『勝保沢中ノ山遺跡Ｉ』群馬県埋蔵文化財調査事業団

今村啓爾　1982「諸磯式土器」『縄文文化の研究３』雄山閣

小野和之、谷藤保彦他　1987『三原田城遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

小野和之、山口逸弘他　1989『房谷戸遺跡Ｉ』群馬県埋蔵文化財調査事業団

黒岩文夫、富澤敏弘　1985『中棚遺跡』群馬県昭和村教育委員会

坂口　一、三浦京子　1986「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』24群馬県史編さん委員会

下城　正他　1989『大平台遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

大工原豊、千田茂雄　1988『野殿北屋敷・西殿遺跡』安中市教育委員会

長沢宏昌　1989『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』山梨県教育委員会

吉田　格、羽生淳子他　1983『稲荷丸北遺跡』稲荷丸北遺跡調査団

2　榎木畑遺跡における前期後半から中期中葉にかけての石器群について

(1)　石匙について

榎木畑遺跡からは、石匙が20点検出されている。これらの石匙はチャート、硬質頁岩、黒色安山岩を用いた小形で鋭利なもの（石匙Ａ類：第８図５・第16図９・第36図７）と、在地の頁岩、黒色安山岩を用いた比較的大形で鈍い刃部を有するもの（石匙Ｂ類：第８図６・第16図10・11・第17図６・第20図６・第23図12・第31図２・第36図８等）に大別される。前者は精致な押圧剝離によって作出されているが、後者では押圧剝離のみならず、時には直接打撃による階段状剝離のものも存在する。そして、使用による磨耗痕は石匙Ｂ類に顕著に認められる。また、こうした磨耗痕はスクレイパーＢ類に顕著に認められ、同様の機能を有していた可能性が高い。しかも、形態上も非常に類似したものになっている（第８図７・第23図13・14・第41図10・11等）。

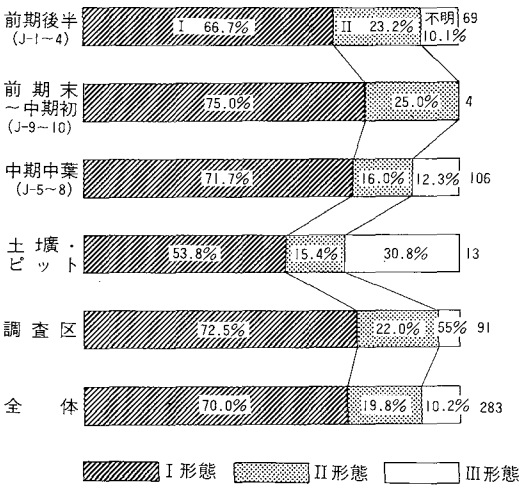
また、検出状況をみると、石匙Ａ類は前期後半期のＪ－１・Ｊ－３号住居址に存在し、中期中葉にはほとんど存在しない（ただし、Ｊ－９号住居址に１点存在する）。

このように、石匙は前期後半段階以降には、Ａ類としての要件を満たす小形で精緻なものと、Ｂ類の要件を満たす比較的大形で粗雑なものに二極分化するようになる。こうした傾向は、かつて藤森栄一氏によって指摘されているとおりであり、狩猟用の携帯ナイフから採集用の携帯ナイフへ機能的変化を行ったものと考えられている(藤森1963)。この考えは概ね当を得たものと言えよう。

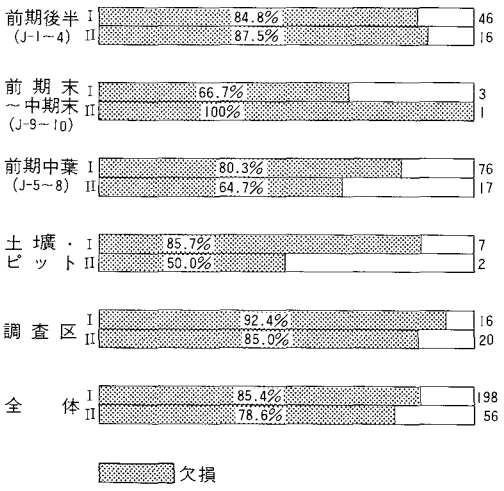
石匙は本来的にはＡ類の石材群を素材とし、Ａ類の伝統技法である押圧剝離によって作出される定形化された器種である。しかし、生業体系の変化に伴いＢ類の石器に変容してしまう。こうした意味から、Ａ類とＢ類の「交わり」として存在する器種と認識される。この石匙の変容の問題については、Ａ類・Ｂ類のスクレイパーの構造変化の問題も含めて、今後も出現から衰退まで追究してゆく必要がある。

(2)　打製石斧について

この遺跡から検出された打製石斧は、短冊形（Ⅰ形態）と撥形（Ⅱ形態）に区分される。両者の時期別の割合は第67図のとおりである。この中で前期末葉～中期初頭（２期）の場合、打製石斧の個数が少ないので、その傾向を判断することができない。そして、前期後半（１期）と中期中葉（３期）を比較すると、Ⅱ形態の比率が減少する傾向がみられる。また、欠損率をみるとⅠ形態では１期と３期ではほとんど変化していないのに対して、Ⅱ形態では、欠損率がやや少ない



第67図　打製石斧の形態別割合

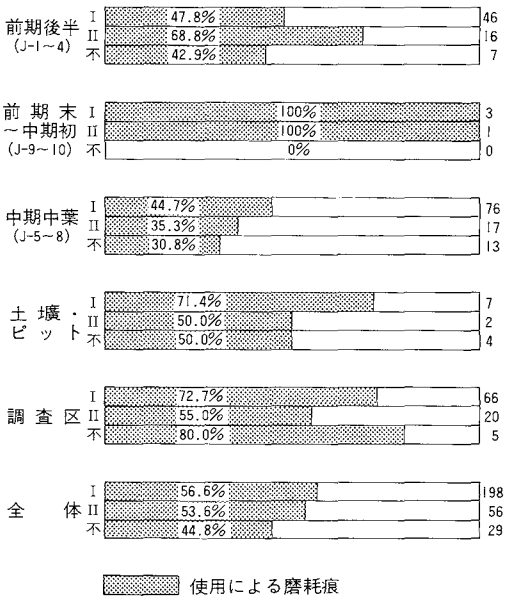


第68図　打製石斧の欠損割合

(第68図)。こうしたII形態の1期と3期での差異は使用痕でも認められ、3期になると使用による磨耗痕が大幅に減少する（第69図)。

このように、打製石斧では前期後半期から中期中葉にかけて撥形の使用頻度が減少し、短冊形が圧倒的多数を占めるようになる。この傾向は、これまでも一般的に認められているものであり、本遺跡でもそれが確認された。(註1)

打製石斧製作工程の問題については、II形態の減少傾向とも関連する問題であるが、スクレイパーB類の製作工程とも関連があるので、スクレイパーB類の項で述べたい。



第69図　打製石斧の使用痕

一方、結晶片岩製の打製石斧が19点検出されている。出土状態をみると、前期後半から中期中葉まで一定の割合で存在している。これらの結晶片岩製の打製石斧を製作したとみられる剥片はほとんど存在しないので、製品として遺跡外から搬入されたと推定される。こうした結晶片岩製の石器は、本遺跡では他にC類の凹石・石皿にも存在している。また、D類の棒状礫のように石棒に類似した形態の石器も存在することから、これら

の結晶片岩製の石器は、単に実用品としてではなく、「第二の道具」としての性格を有していると推定される。

(3) スクレイパーB類について

本遺跡からはスクレイパーB類が132点検出されている。スクレイパーB類における石材の優先順位は在地の頁岩が圧倒的であり、安山岩、黒色安山岩が用いられることは少ない。この傾向は1期から3期にかけて変化していない。すなわち、スクレイパーB類と頁岩との結び付きは安定していると判断される。

スクレイパーB類の中で、この遺跡において規格化されているものは、横長剝片を素材とし、外湾した刃部を打点の反対の縁辺に作出したものであり、杏仁形を呈している（第8図7・第12図12・第23図13・14・第26図10・第36図12・第41図10・11）。これらの杏仁形を呈するスクレイパーB類には刃部の使用による磨滅痕が顕著に認められるものが多い。そして、同様の使用痕は石匙B類にも認められ、ほぼ同じ機能を有していたとみられる。

このスクレイパーB類については、すでに松村和男氏により前期前半期に出現していることと、その形態的特徴・製作技法等の諸属性について指摘されており、氏の分類ではII種に該当する（松村1985）。

また、この杏仁形のスクレイパーB類について、「横刃形石器」という呼称で称されることがあり、この「横刃形石器」の意味については白石典之氏が「技術形態学」的側面から検討し、むしろ「複刃削器」として把握した方が妥当であるとの見解を述べている（白石1987）。このように、スクレイパーB類が複刃となる傾向は本遺跡においても認められ、群馬県内では一般的傾向と推定される。

ここで少し遡って、杏仁形のスクレイパーB類が出現した前期前半期の石器群について検討してみると、こうした杏仁形を呈したものは主体とはならず、大形で粗雑な松村氏の分類のI種と、小形で不定形なものが主体的である。本遺跡では大形のものとしては、第26図9などが存在し、小形のものとしては、第20図7・8、第36図9・11などが存在する。しかし、これらのスクレイパーB類は主体的なものではなく、前期後半以降は杏仁形を呈するものが主体となるとみられる。

また、前期前半期の打製石斧はII形態（撥形）で、片面に原礫面を大きく残し、片面加工を主体とするものが多く存在する。しかし、前期後半期以降はI形態（短冊形）が主体となりII形態は少なくなる。

このような打製石斧とスクレイパーB類の変化は別々のものではなく、B類の石器群に構造的変化が生じている可能性がある。そこで、スクレイパーB類の製作システムについて検討してみ

たい。

まず、前期後半から中期中葉のスクレイパーB類と打製石斧を比較すると、石材はほぼ同じ選択規準によっていることが、各住居址の石器組成表により確認することができる。(ただし、結晶片岩製の打製石斧の存在については、前項で述べたように別の意味を有している可能性が高いので除外して考えることにしたい。)

次に、打製石斧とスクレイパーB類の原礫面の残存状況をみると、打製石斧では原礫面の存在しないものが比較的多い。しかし、スクレイパーB類では大部分が原礫面を一部に残しており、この点に大きな差異が存在する。この現象は、両器種が独立した製作システムを有しているのではなく、一連の剝片剝離過程の中で共に製作されていることを示していると考えることができる。つまり、最初にスクレイパーB類の素材剝片を作出し、さらに剝離が進行した段階で作出された剝片、あるいは石核そのものが打製石斧の素材になると推定される。

このB類の石器製作システムは前期前半段階では十分確立しておらず、打製石斧の素材とスクレイパーB類の大形の一群（松村氏のI種）の素材は原礫面を大きく残した剝片であり、共通のものである。すなわち、打製石斧とスクレイパーB類が並立関係にある。また、この石器製作過程とは別に、小形で不定形のスクレイパーの製作過程が存在していた可能性が強い(第70図)。この問題については、ここではこれ以上言及を避けるが、B類の石器製作システムが前期前半と後半では大きく変化していることは明かである。この変化の大きな要因は、打製石斧がII形態からI形態へ依存度を強化する過程、つまり、形態的・機能的変化によるところが大きいと考えられる。

このように、一連の製作工程の中で作出される杏仁形を呈するスクレイパーB類の石器製作システムは、前期後半段階に確立するとみられる。そして、この変化の背景には「前期的石器群」

〈前期前半期〉

原石→素材剝片→打製石斧（撥形主体）
　　↘スクレイパーB類（大形）
原石→不定形剝片→スクレイパーB類（小形）

〈前期後半期〉

原石→スクレイパーB類→打製石斧（短冊形主体）→打製石斧調整剝片→スクレイパーB類
　　（杏仁形）　　（横長）

第70図　縄文時代前期のB類石器製作システムの変化

の解体と「中期的石器群」の成立という生業の本質的変化が存在し、そのひとつの表徴であると考えることができる。さらに、打製石斧調整剝片を素材とするスクレイパーB類（第16図13・第29図５）も散見され、B類の打製石斧依存型石器製作システムは強化されてゆく傾向が萌芽している。こうした視点で今後ともB類の石器群をはじめ、石器群全体についても、構造的に検討してゆく必要があろう。

(4) 石器組成

榎木畑遺跡では前期後半から中期中葉にかけての遺構と遺物が検出されている。しかし、重複が多いため、石器の所属時期・様相について検討するにあたり、各住居単位では困難である。そこで、大まかに時期を区分して、石器群の様相について検討してみることにする。(註２) なお、石器群の区分は、遺構・出土土器から次のように分けることが可能である。

１期：Ｊ－１・２・３・４号住居址出土の石器……前期後半期（諸磯ｂ～ｃ期）

２期：Ｊ－９・10号住居址出土の石器……前期末葉～中期初頭期（十三菩提～五領ケ台期）

	器種	前期後半 (J-1～4)	前期末～中期初 (J-9・10)	中期中葉 (J-5～8)	土壙・ピット	調査区	全体
A類	石鏃	8	3	18	6	23	58
	石錐	3	4	6	2	7	22
	石匙	9	2	5		4	20
	スクレイパーA	24	10	33	4	41	112
	R・F・A	17	10	44	11	47	129
	ピエス・エスキーユ	3	1	13	1	7	25
	小計	64	30	119	24	129	366
B類	打製石斧	69	4	106	13	91	283
	スクレイパーB	28	9	44	6	45	132
	その他	10	3	4	3	9	29
	小計	107	16	154	22	145	444
C類	凹石	31	21	29	3	25	109
	磨石	18	7	17	3	25	70
	敲石	3	1	2	2	5	13
	石皿	6	2	4	2	4	18
	台石	2	1		1	1	5
	砥石	9	3	16	2	8	38
	小計	69	35	68	13	68	253
D類	棒状礫	7		7	2	5	21
	小計	7		7	2	5	21
E類	磨製石斧	5		4	1	4	14
	小計	5		4	1	4	14
	合計	252	81	352	62	351	1098

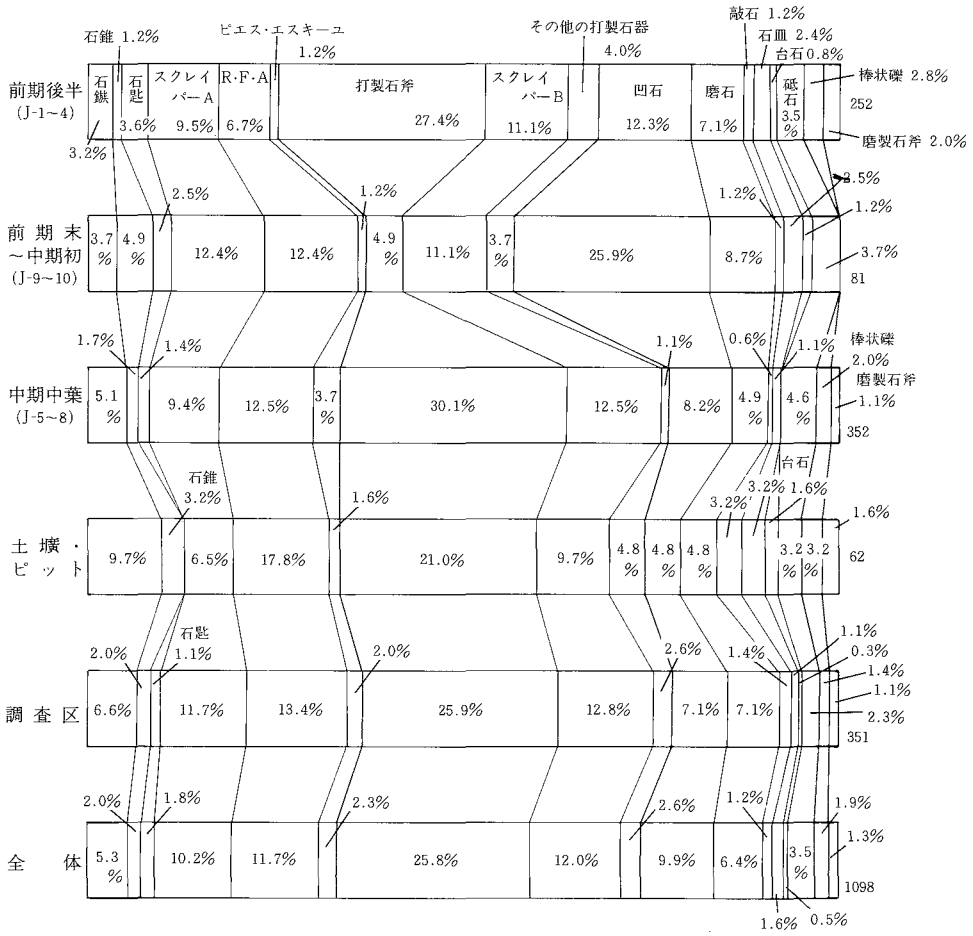
第14表　榎木畑遺跡石器組成表

3期：J－5・6・7・8号住居址出土の石器……中期中葉期（勝坂～加曽利E１期）＊但し、一部前期末葉の石器も混在しているとみられる。

また、土壙・ピット、調査区出土の石器は大部分がJ－1及びJ－5～8号住居址の周辺に集中していることから、前期後半と中期中葉のものが混在していると推定される。

こうした区分によって作成された石器組成は、第14表、第71図のとおりである。最初に、住居址出土の石器群について、時期別に比較してみたい。

まず、A類についてみることにする。A類では2期を除いて剝片や石核、石鏃未成品、石錐未成品が多量検出されており、石鏃・石錐の製作が盛んに行われていたことが確認されている。しかし、石鏃、石錐の量は剝片や石核の量に比べて少ない。そして、石鏃は徐々に増加する傾向が認められるが顕著ではない。また、ピエス・エスキーユが3期になって増加する傾向がある。ピエス・エスキーユは両極技法によって製作されるもので、石鏃の素材剝片作出にもこの技法が用



第71図　榎木畑遺跡石器組成図

いられることから、両器種の増加傾向には関連性があると考えられる。また、石匙は組成上は顕著ではないが、やや減少傾向が認められる。石匙については、組成だけではなく重要な変容があることは、すでに述べたとおりである。

次に、B類では2期において、打製石斧だけが極端に少ないことがわかる。2期の石器群の場合、石器の点数が少ないので、本来の組成と異なっている可能性があるが、ほかの器種は1期や3期とほとんど差異が認められないことから、2期にこの遺跡では何らかの事情により、打製石斧が減少したと推定される。また、1期には多数存在した撥形が3期には減少し、大部分を短冊形が占めるようになる。この傾向については、先に述べたとおりである。また、スクレイパーB類については、ほとんど変化がみられない。

一方、C類では2期において凹石の割合が大きくなる傾向がある。この場合も資料数が少ないためこのような突出した形で示されている可能性がある。しかし、凹石と磨石との量比は、他の時期の組成と同じ傾向であり、この程度の突出は統計処理上の問題として認識される。

このように、本遺跡の石器群は1期から3期にかけて、漸移的な変化はあるが、本質的な石器組成の変化は認められない。これは前項でも触れたが、すでに前期後半期には「中期的石器群」が成立していることを示している。

ところで、遺跡内での空間利用の問題について、石器組成から調べてみたい。土壙・ピットから検出された石器では、A類の石鏃の比率が住居址のそれに比べて著しく高い。これは、土壙・ピットが石鏃とより強い結び付きを有している傾向があることによると、考えることができる。その具体的事由については、この資料からは言及することはできないが、墓壙への副葬や狩猟動物の残滓と共に廃棄されたこと等の可能性が考えられる。また、調査区内から検出された石器組成は住居域のそれとほとんど変化していない。

このように、本遺跡では住居域と土壙・ピット内の遺物において、若干の差異が認められたに過ぎないが、さらに詳細な出土位置や出土状態を検討することにより、集落内での空間利用の在り方を解明することが可能であることを示しており、縄文時代の集落構造を正確に把握するためにも、今後さらにこうした分析が実践されるべきであろう。

註

1　打製石斧の中で、撥形のものは「斧」としての機能的特徴が強く、短冊形のように「土掘具」としての特徴は少ない。これは、使用による磨耗痕においても両者の間に差異が認められることからも明かである。そして、撥形を呈する打製石斧と機能的・用途的に競合する器種は磨製石斧である。磨製石斧は一般的には前期前半期から存在するが、量的に安定して存在するようになるのは前期後半期以降である。
したがって、撥形を呈する打製石斧の減少傾向、用途の変化（磨耗痕の存在するものの増加）と磨製石斧の増加の間には相関関係があると考えられる。すなわち、この現象は木材に対して用いられる「斧」の磨製石斧化の現象として把握しておく必要がある。J－3号住出土の局部磨製の撥形を呈する打製石斧（第16図18）は「斧」の磨製石斧化の象徴的な石器であろう。

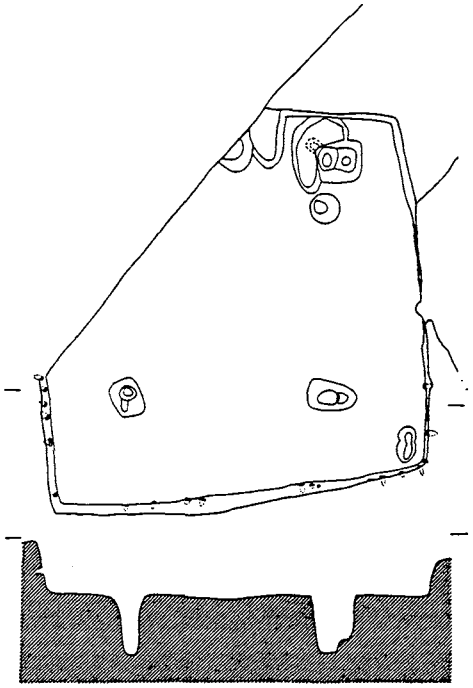
2　縄文時代中期の住居址では、ある程度時間的に連続する数軒の重複があることが一般的であり、この現象は定住化の強化として認識することができる。したがって、定住化の強化の背景には、生業形態の安定化があると推定される。そのため、石器組成上の変化も漸移的なものと仮定することが可能である。そこで、これらの重複した住居址の石器組成を統計的に扱う場合、分離が困難な時には重複した住居址を有意の分析単位とすることができよう。

参考文献
白石典之　1987「「縄文中期的石器」に関する一試論」『行幸田山遺跡』渋川市教育委員会
大工原豊・能登健・藤巻幸男　1985『郷原遺跡』吾妻町教育委員会
藤森栄一　1963「縄文中期に於ける石匙の機能的変化について」『考古学雑誌』49－3
松村和男　1985「堤東遺跡出土の縄文時代遺物について」『群馬文化』203

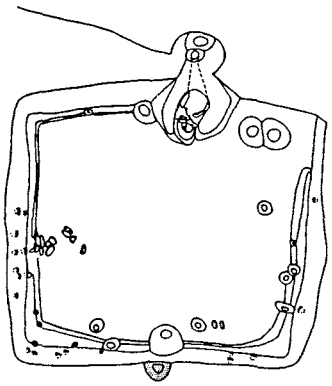
3　H－1、H－7号住居址壁面の横穴について

今回の調査によりH－1、H－7号住居址の壁に横穴を確認した。各住居ともに横穴は不規則に並び、床面からの高さも、横穴の径も不規則である。しかし、いずれの横穴も先ぼそりで、先を細く削った棒状のものを突き刺した様相を示している。同様の例は、安中市の野殿北屋敷・西殿遺跡、杉名薬師遺跡（未報告）で確認されている。野殿北屋敷・西殿遺跡は今回の住居と同じ時期の住居址である。杉名薬師遺跡は古墳時代後半の住居址である。いずれの遺跡も、今回の例と同じく不規則に先ぼそりの横穴が壁面に並んでいる。特に杉名薬師遺跡はほとんどの住居址から横穴が検出されている。火災住居からも横穴が検出されており、横穴の性格を分析するのに良好な資料が得られている。横穴についての詳しい分析は、杉名薬師遺跡の報告時に行うこととするが、現時点で考えられる横穴の性格を記しておきたいと思う。

現時点では、この横穴は住居の壁の崩落を防ぐためのものと考えられる。棚状等の施設の存在なども考えられるが横穴が不規則に存在することや、横穴の下の床面に対応するような小穴がない事から壁の保護のための横穴と考えている。例えば壁に板などを押し付け崩落を防ごうとするとき、板だけを壁に押しつけるだけでは壁が崩れてしまうため、板を押えるために先の尖った杭のようなものを打ちつけ止めたものと考える事ができないであろうか。実際民族例で、冬の作業場として土を掘り込み上屋をかけ、壁の保護と断熱のため壁、床全体にワラを敷き詰め壁のワラの崩落を防ぐため小杭を壁に打ち、その杭にワラを止めた例がある。今回時間の関係もあり、詳しい分析は杉名薬師遺跡の報告時に行う事とするが、安中市では今回を含め3例目であり、安中市以外では同様の例は見あたらないことから、これは地域的な特徴として捉えられるのかどうか、今後他の地域の資料に注意して分析を行いたい。

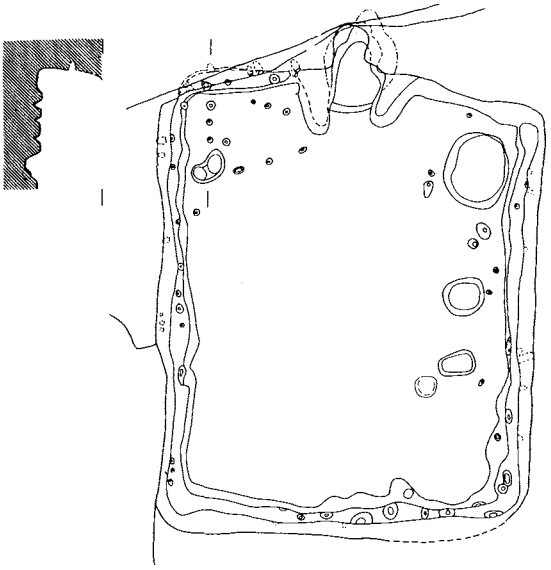


榎木畑H－1号住居址

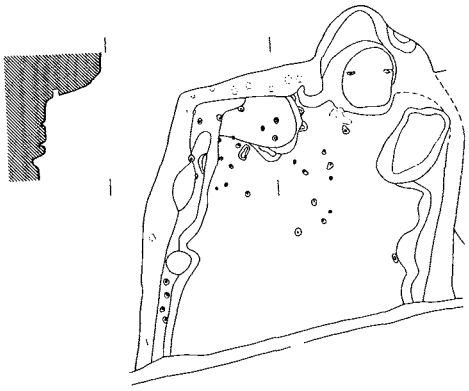


榎木畑H－7号住居址

0　4m



野殿北屋敷・西殿遺跡H－6号住居址



野殿北屋敷・西殿遺跡H－5号住居址

0　2m

第72図　横穴を持つ住居址

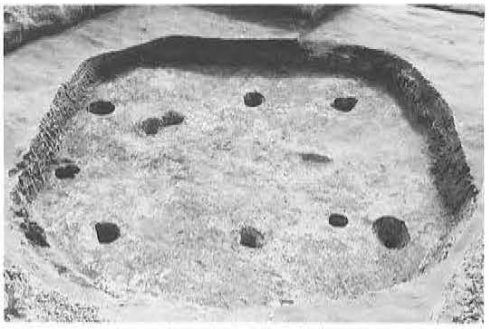
写　真　図　版

榎木畑遺跡遠景

J－1号住居址

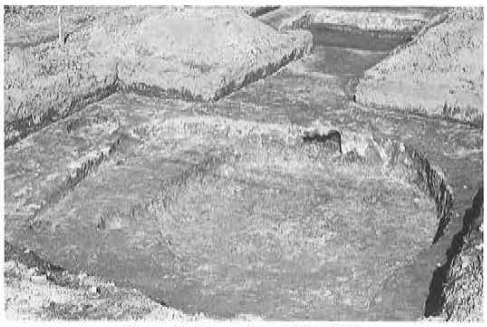
図版 2

J－2号住居址



J－3号住居址

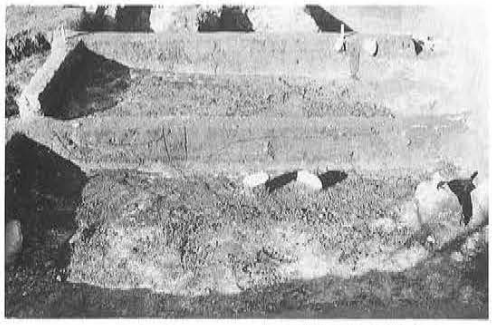
J－3号住居址遺物出土状況



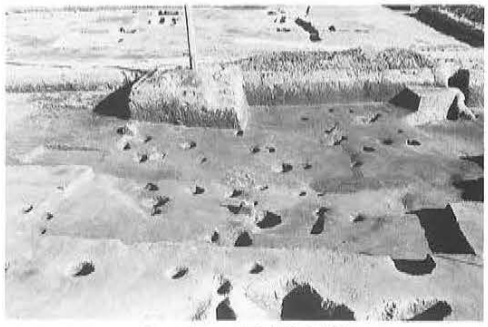
J－4 a、b号住居址

J－5・6・7・8号住居址

J－5・6・7・8号住居址覆土



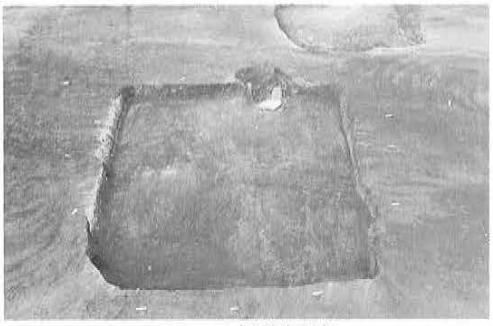
J－5・6・7・8号住居址覆土



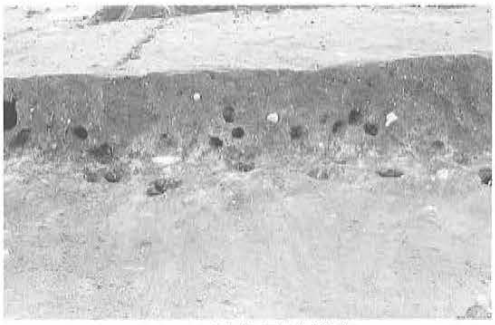
J－9・10号住居址

D－1・3・5号土壙

H－1号住居址



H－2号住居址



H－1号住居址横穴

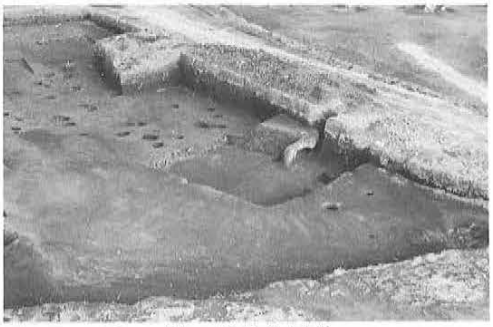
H－3号住居址

H－4号住居址

H－5号住居址

H－6号住居址

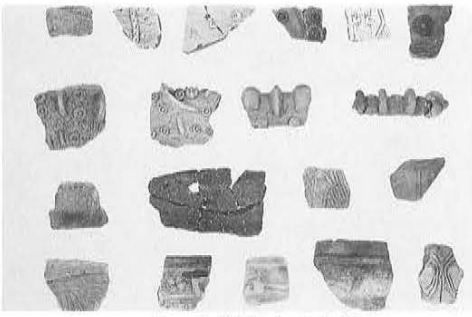
図版 4



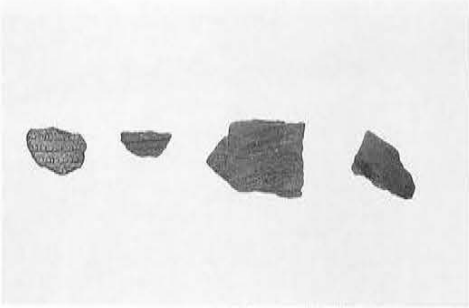
H－7号住居址

H－8・9・10号住居址

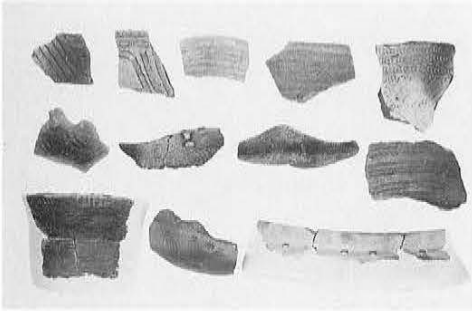
H－11号住居址



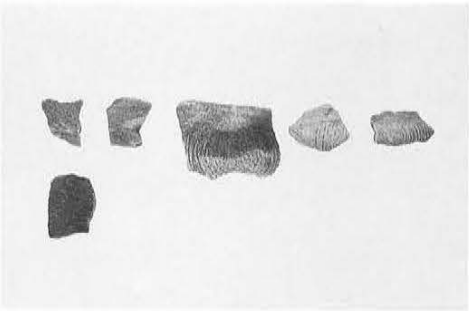
J－1住出土の土器



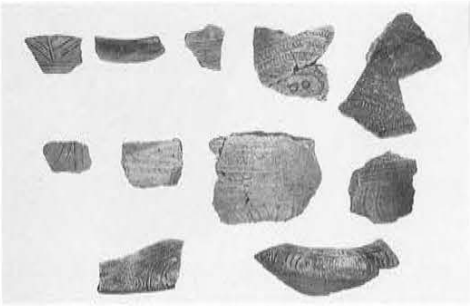
J－2住出土の土器



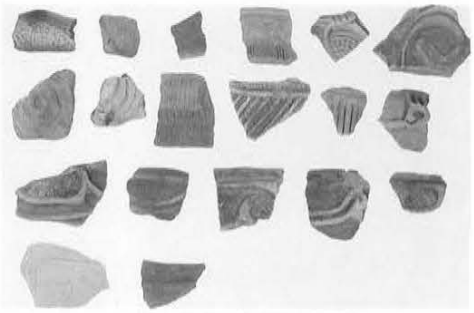
J－3住出土の土器



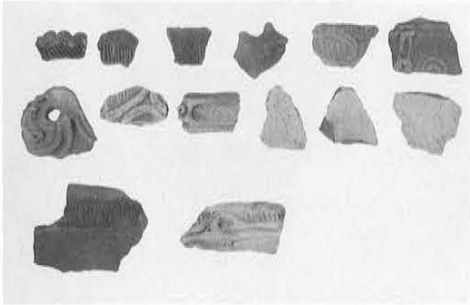
J－3住出土の土器



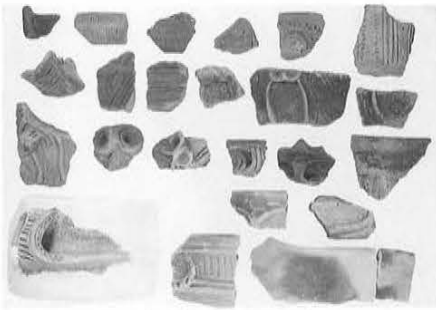
J－4a 住出土の土器



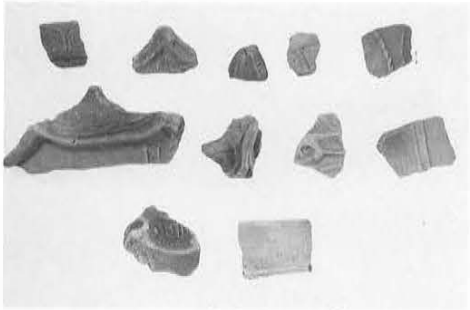
J－5 住出土の土器



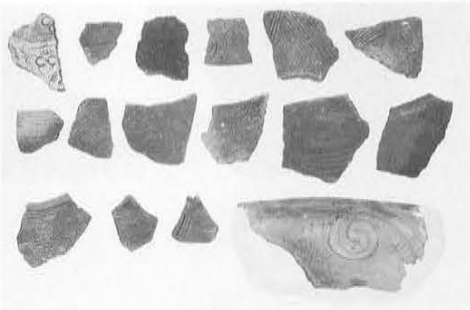
J－6 住出土の土器



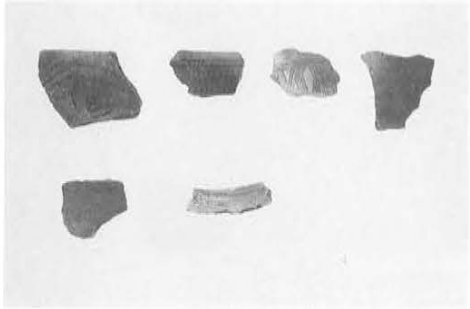
J－7 住出土の土器



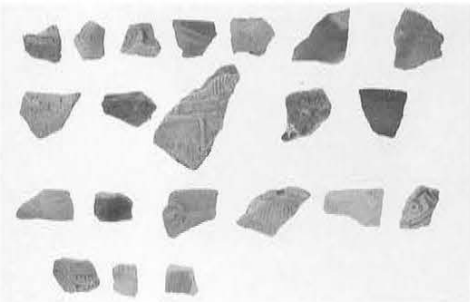
J－8 住出土の土器



J－9 住出土の土器



J－10住出土の土器



土壙出土の土器

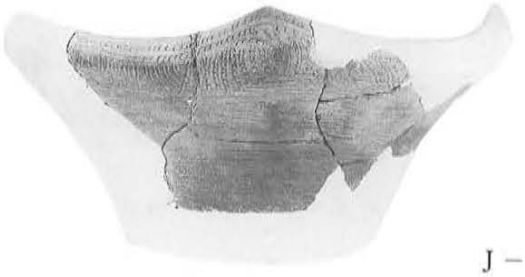
図版 6

J－1住

J－1住

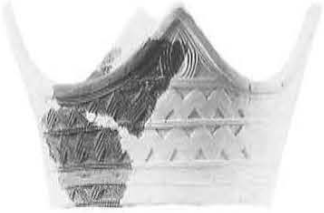
J－3住

J－3住



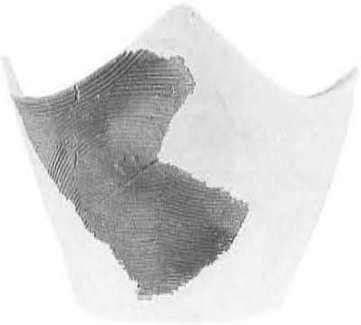
J－3住

J－4a住



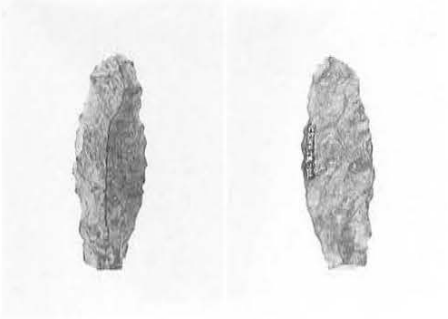
J－7住

J－8住

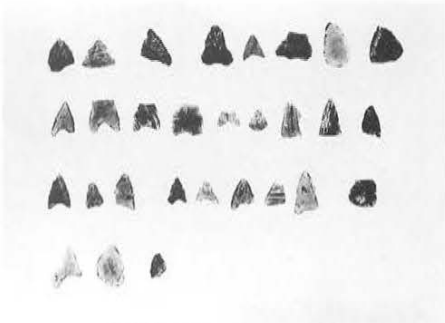


J－9住

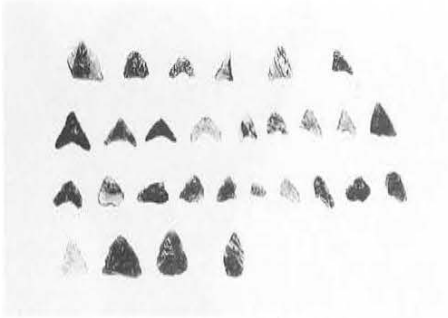
図版 8



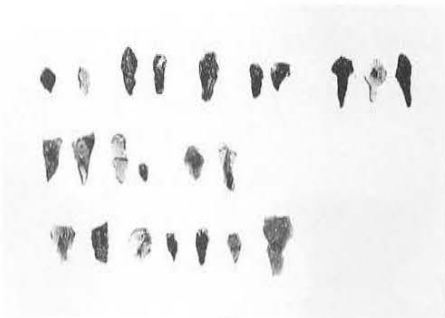
尖頭状石器



石鏃（J－1～10住）



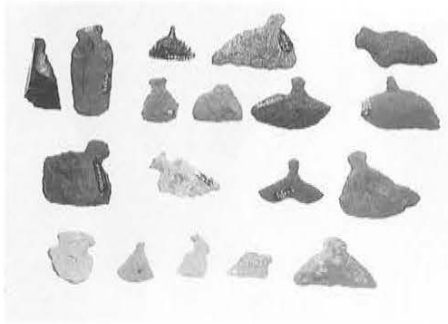
石鏃（土壙・グリッド）



石錐

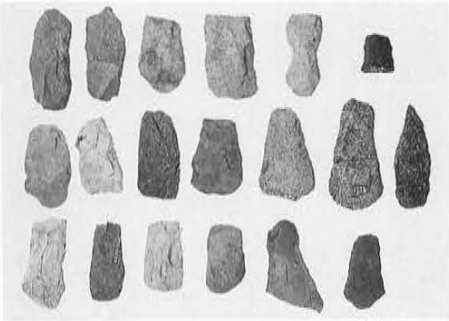
スクレイパーA類（J－1～10住）

スクレイパーA類（土壙・グリッド）

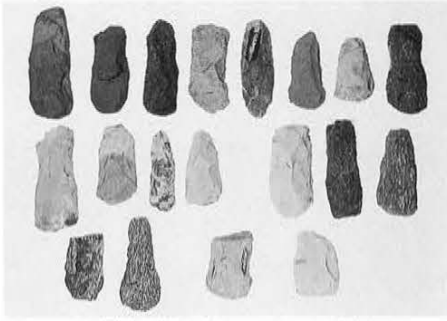


石匙

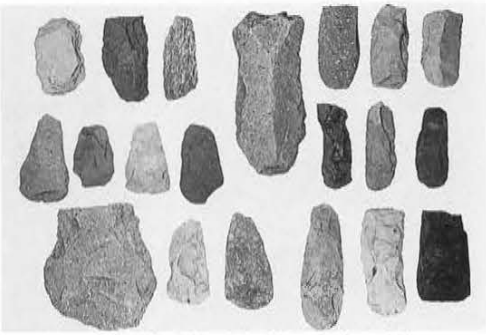
ピエス・エスキーユ



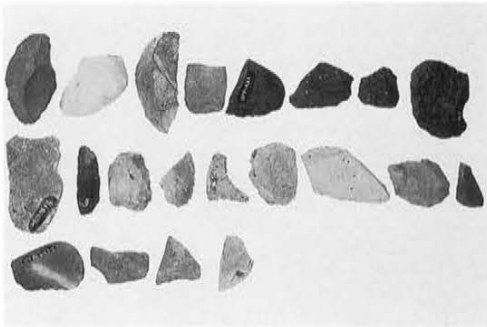
打製石斧（J－1～4住）



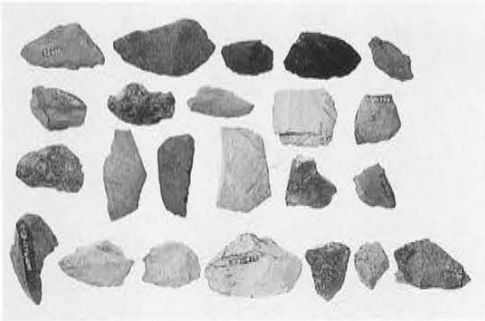
打製石斧（J－5～10住）



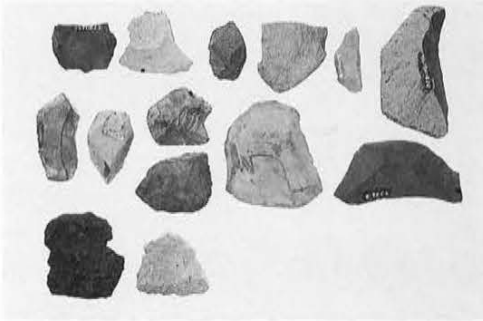
打製石斧（土壙・グリッド）



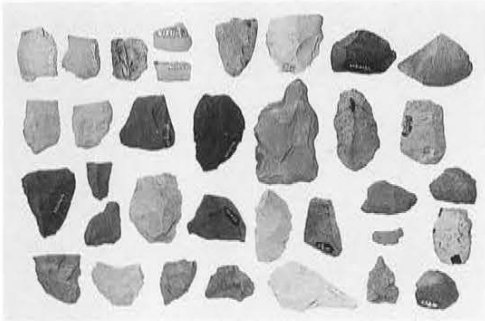
スクレイパーB類（J－1～4住）



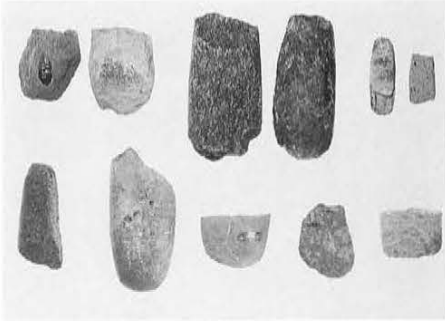
スクレイパーB類（J－5～8住）



スクレイパーB類（J－7～10住）

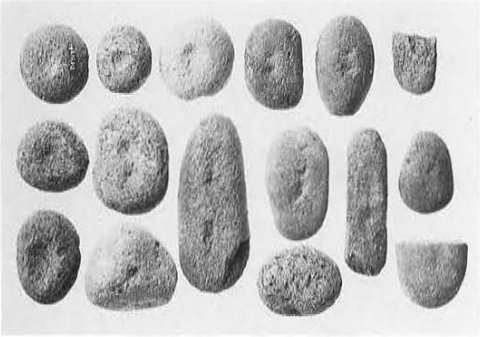


スクレイパーB類（土壙・グリッド）

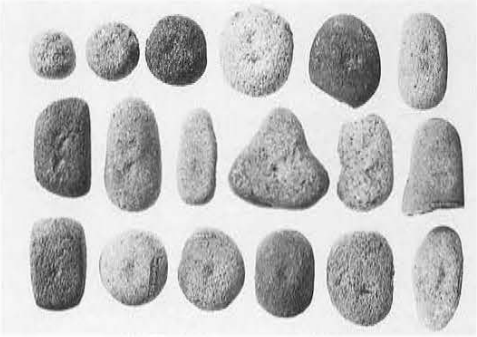


磨製石斧

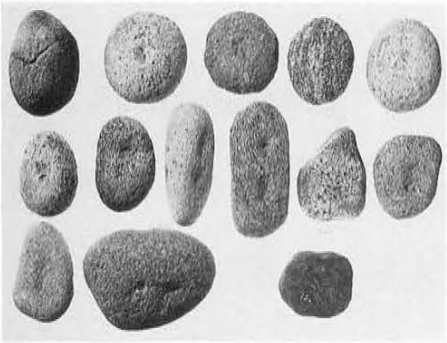
図版10



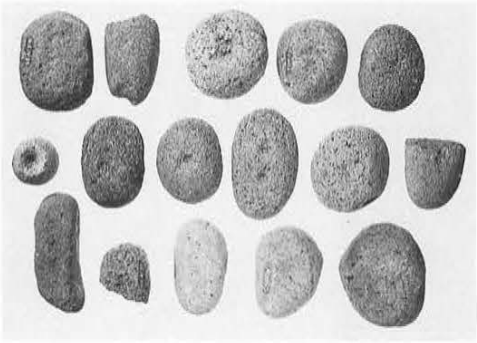
凹石（J－1～4住）



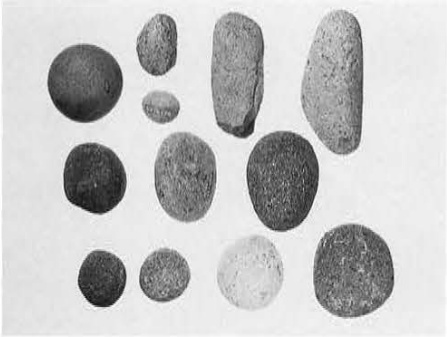
凹石（J－5～7住）



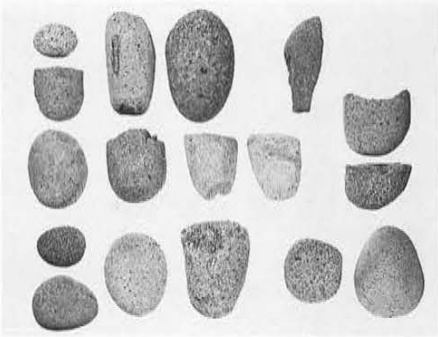
凹石（J－8～10住）



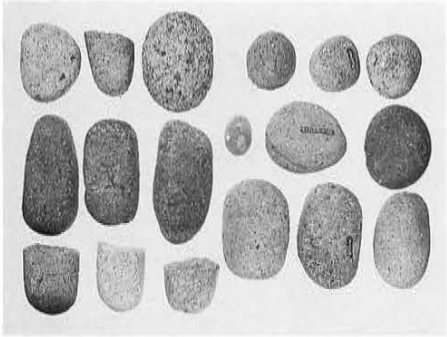
凹石（土壙・グリッド）



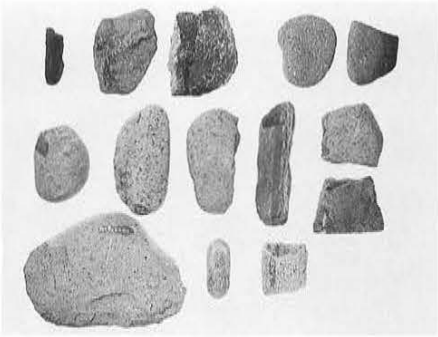
磨石（J－1～4住）



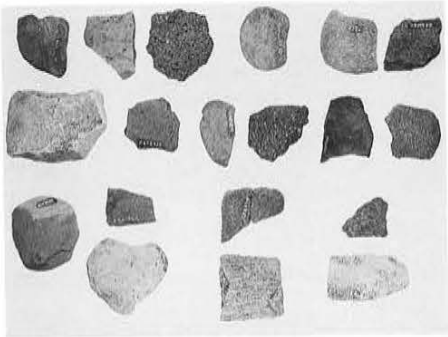
磨石（J－5～10住）



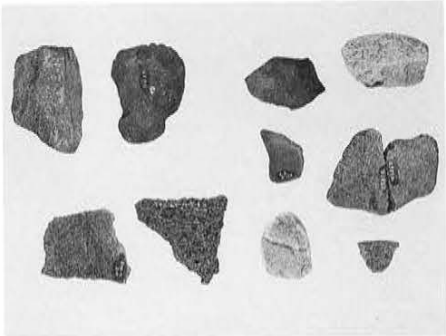
磨石（土壙・グリッド）



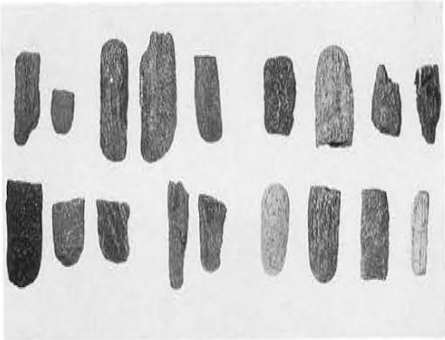
敲石



砥石（住居）



砥石（土壙・グリッド）



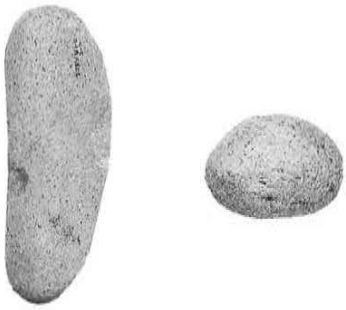
棒状礫

J－1住　J－3住

J－5住

J－5住

J－9住



J－1住

J－9・10住周辺

J－9・10住周辺

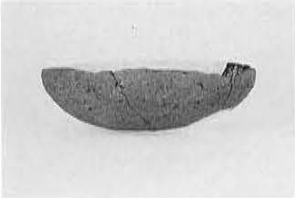
台石

J－9・10住周辺

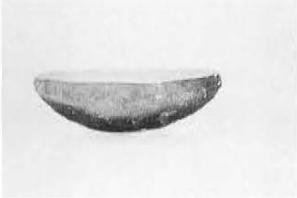
P－55

石皿

図版12

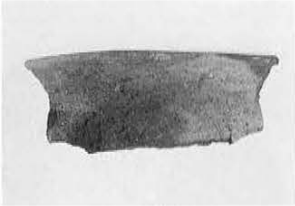


H－1住杯

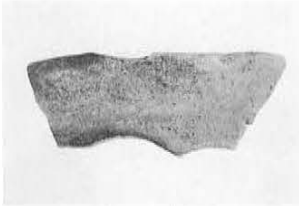


H－1住杯

H－1住杯



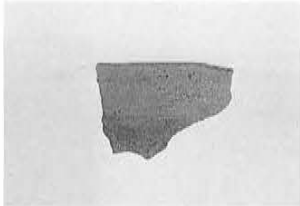
H－1住甕



H－1住甕

H－2住杯

H－2住杯



H－2住甕

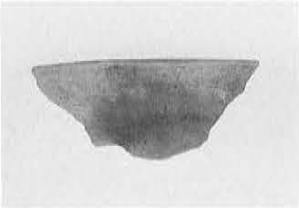
H－2住甕

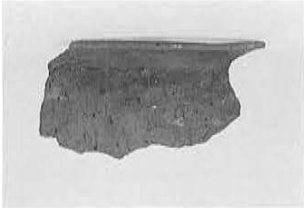
H－4住甕

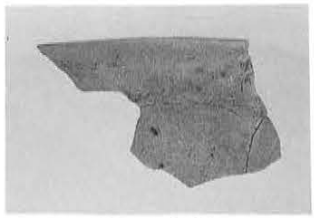
H－4住甕

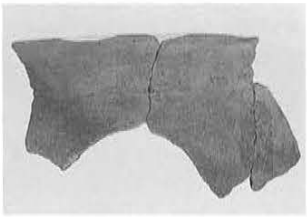
H－4住杯

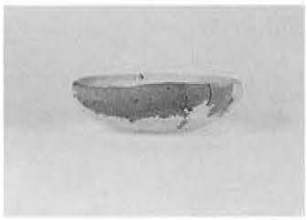
H－5住杯

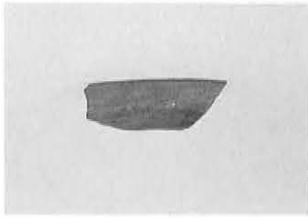

H－5住甕

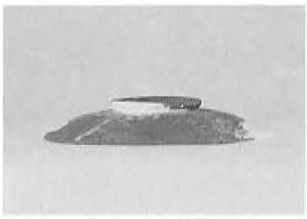

H－5住甕

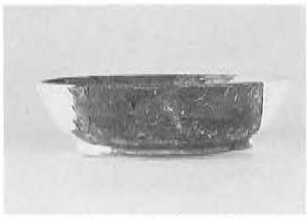

H－5住甕


H－5住甕

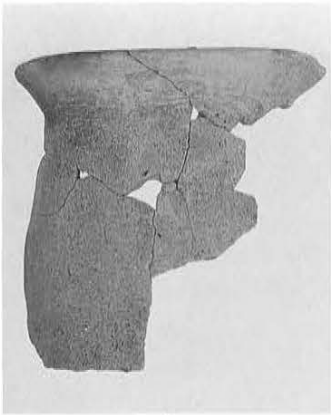

H－6住杯


H－6住杯

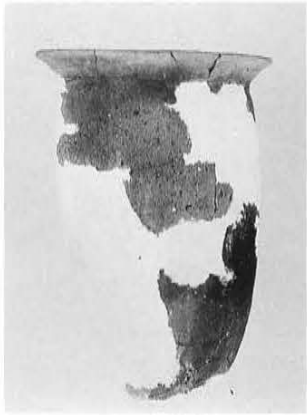

H－6住蓋


H－6住高台杯

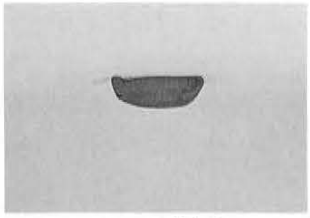
H－6住甕

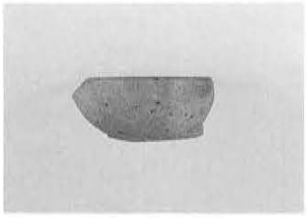

H－6住甕

H－6住甕


H－6住甕

図版14


H－7住杯

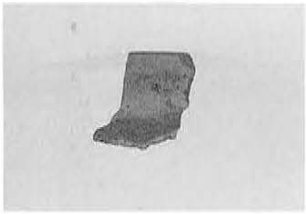

H－7住杯

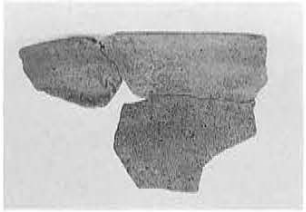
H－7住杯

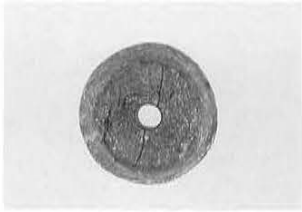
H－7住杯

H－7住杯

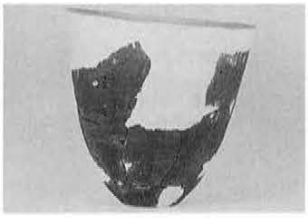
H－7住杯

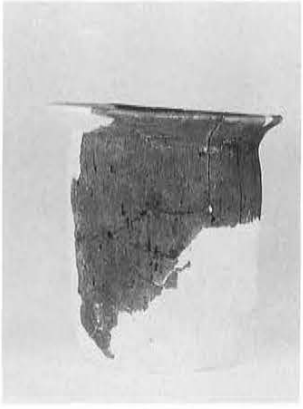

H－7住甕

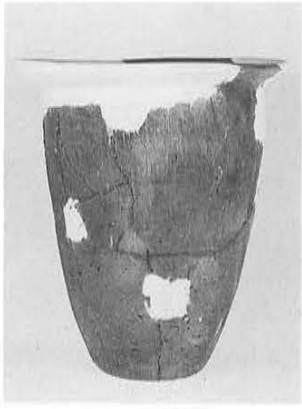

H－7住甕

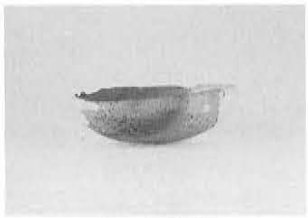

H－7住紡錘車

H－7住平瓶


H－7住甕

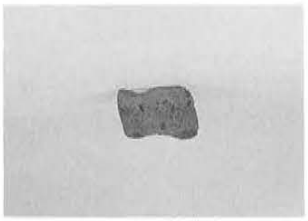

H－7住甕

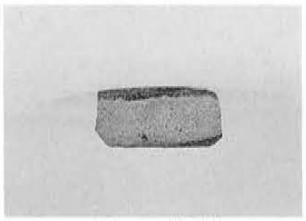

H－7住甕

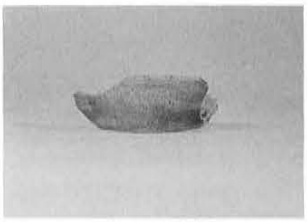

H－8住杯

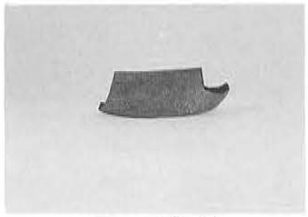
H－8住杯

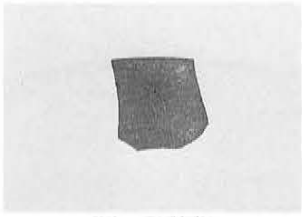
H－8住杯

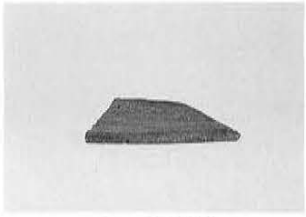

H－8住杯

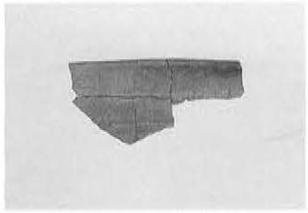

H－8住杯

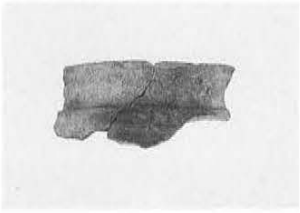

H－9住杯

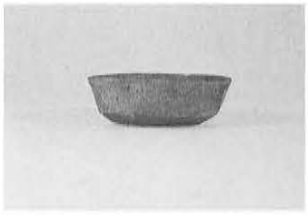

H－9住杯

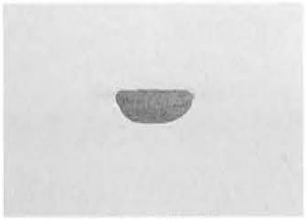

H－9住杯

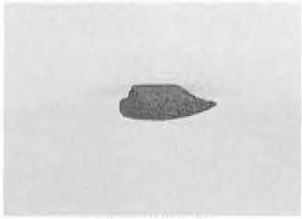

H－9住蓋

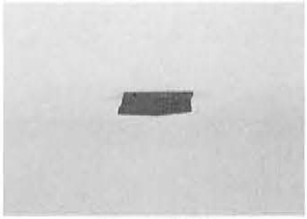

H－9住甕


H－9住甕


H－10住杯

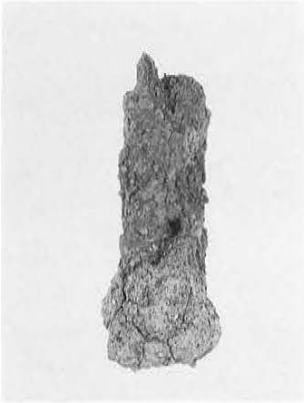

H－10住杯


H－10住杯

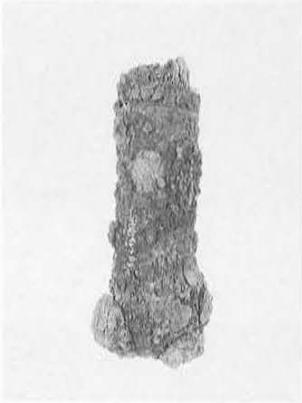

H－10住杯

図版16

H－10住甕

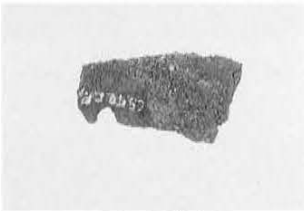


H－10住鉄製斧

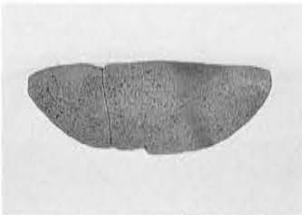


H－10住鉄製斧

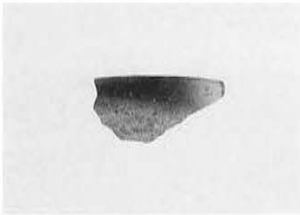
H－10住甕



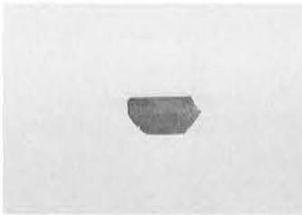
H－10住鎌



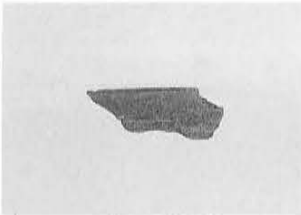
H－12住杯



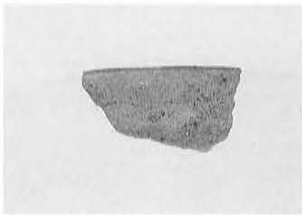
H－12住杯



H－12住杯



H－12住甕



H－12住甕

榎木畑遺跡

—安中市特別養護老人ホーム建設事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発　行　日　平成2年3月31日

編集・発行　安中市教育委員会社会教育課
群馬県安中市福祉事務所

印　　刷　朝日印刷工業株式会社